愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第129集

Ｉ－Ｇ－２号窯跡

２００５

財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

調査区全景（東より）

出土遺物

序

愛知県愛知郡長久手町は名古屋市の東に位置し、歴史的には小牧・長久手の戦いの舞台として古くから知られております。近年は名古屋近郊の住宅地として、あるいは大学や研究機関が立ち並び、文字通り発展しつつある地域です。また平成17年には愛知青少年公園の敷地内で日本国際博覧会「愛・地球博」が開催され、脚光を浴びております。

Ⅰ-G-2号窯が所在する三ヶ峯丘陵一帯には古代から中世にかけて操業した古窯跡がいくつか残り、かつて窯業生産が盛んであったことが知られるようになって来ました。このたび愛知県建設部は愛知青少年公園再整備の一環として、園路及び広場等の整備を計画いたしました。整備予定地の一角に古窯跡の存在が確認されたため、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施いたしました。調査の結果3基の古窯の存在が確認され、この地域における窯業生産のあり方について貴重な知見を得ることができました。本書はこの調査結果をまとめたもので、中世窯業や地域史研究の一助になれば幸いです。

文末ではありますが、調査にあたり関係各機関には格段の御協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人　愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター
理事長　**古池　庸男**

例　　言

1.　本書は、愛知県愛知郡長久手町大字岩作字三ヶ峯（やざこ　さ　が　みね）に所在する、Ⅰ−G−2 号窯跡の発掘調査報告書である。

2.　調査は公園緑地整備事業に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた、愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

3.　調査期間は平成 15 年 4 月より 7 月にかけて行い、整理作業には平成 16 年 8 月から入った。調査面積は 350 ㎡である。

4.　調査担当者は藤岡幹根（主査、現小牧市立一色小学校教諭）、酒井俊彦（主査）、鵜飼雅弘（調査研究員）である。また調査補助員として、中島京の協力を得た。

5.　調査にあたっては、次の諸機関の御指導・御協力を得た。
　愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部、長久手町教育委員会

6.　本書の編集・執筆は鵜飼が行った。

7.　遺物の整理・製図等には下記の方々の協力を得た。
　調査研究補助員：平野昌子、神谷巳佳、水野多栄
　整理補助員：堀田春美、鈴木小百合、佐藤美弥子、新留禎博

・遺跡の空中写真撮影、遺構の写真測量および基本平面図の作成については、株式会社イビソクに委託した。
・熱残留磁気測定資料の採取・報告を株式会社パレオ・ラボ（担当：藤根久氏）に委託した。
・遺物の実測図トレースは、株式会社ウェルオンに委託した。
・遺物の写真撮影に関しては、有限会社写真工房　遊（担当：金子知久氏）に委託した。

8.　報告書の作成に当たって、次の諸機関・諸氏の御教示・御協力を得た。
　長久手町教育委員会　愛知県立芸術大学芸術資料館、伊藤隆、神谷麻理子、高崎祥一郎
　赤羽一郎、藤澤良祐、楢崎彰一、岡本直久、磯谷和明、青木修、河合君近、金子健一

9.　調査区の座標は、国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系（世界測地系）に準拠した。なお、海抜標高は T. P.（東京湾平均海面高度）による。

10.　本書で使用する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』に依拠した。

11.　本書で使用する遺構記号は、窯体；SY、溝；SD、土坑；SK である。

12.　発掘調査に関する実測図・写真については、愛知県埋蔵文化財センターが保管している。

13.　出土遺物については、愛知県埋蔵文化財調査センターが保管している。

目　次

Contents

挿図目次

表目次

図版目次

写真目次

Chapter 1

遺跡の立地と調査経過

1 調査の経緯

長久手町は尾張丘陵のほぼ中央に位置する愛知郡の北端にあり、東は豊田市、西は名古屋市、南は日進市、北は瀬戸市、尾張旭市と隣接する。古くから「小牧・長久手の戦い」の主戦場として知られたが、近年名古屋市近郊の住宅地として開発が進み、急速な変貌を遂げつつある。町は尾張丘陵と尾張平野が接する位置に当たり、丘陵と平地が複雑に入り組んだ、南東に高く北西に低い地形である。

I−G−2 号窯跡（県登録番号 15033）は愛知県愛知郡長久手町大字岩作字三ヶ峯地内、愛知青少年公園内に所在する。同窯は、愛知県教育委員会が昭和 52（1977）年から実施した猿投山西南麓古窯跡分布調査により発見され、登録されている。

愛知県建設部公園緑地課は平成 13（2001）年、愛知青少年公園再整備の一環として園路および広場等の整備を計画した。同課は愛知県教育委員会に埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて照会したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地としてのI−G−2 号窯および中世陶器片の散布が確認された。平成 14(2002)年 1 月、愛知県教育委員会は 2 ヶ所に試掘トレンチを入れたところ、窯体および灰層の一部を確認した。これによって発掘調査の必要が生じたため、愛知県教育委員会から委託を受けた（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが調査に入ることになった。

図 1　長久手町位置図

2　遺跡の立地と環境

（1）自然環境

地質

長久手町の地質について概観すると、基盤岩は青少年公園地内に花崗岩の露頭、色金山・高根山付近にホルンフェルスの岩体が露頭している以外に観察されず、大部分は鮮新統・更新統の地層で覆われている。鮮新統は瀬戸陶土層・矢田川累層に大別されるが、瀬戸陶土層は地表面で観察できない。矢田川累層はさらに水野砂礫層・尾張夾炭層・猪高層に細分され、水野砂礫層はおもに町東部の丘陵に、尾張夾炭層・猪高層は町西部の丘陵を中心に分布する（図 2）。地形的には、丘陵とその谷に形成された沖積層が分布する。丘陵は町域南東の三ヶ峯丘陵に端を発し、北に大草・前熊丘陵、北西に岩作丘陵が連なり、西部には中央丘陵と長湫（ながくて）丘陵が分布する。

三ヶ峯丘陵

遺跡の位置する三ヶ峯丘陵は町の標高 100m から 180m を誇る町域最大の丘陵であり、最高点は標高約 184m を数える。また西では尾張・三河両国の境をなし、北は大草丘陵を経て瀬戸市幡山丘陵へと続く。大部分が水野砂礫層に属し、一部に尾張夾炭層が分布する。また丘陵に形成された谷のひとつに源を発する香流川は、緩やかな S 字を描きながら町の南東から北西へ流れ、名古屋市内で矢田川と合流する。

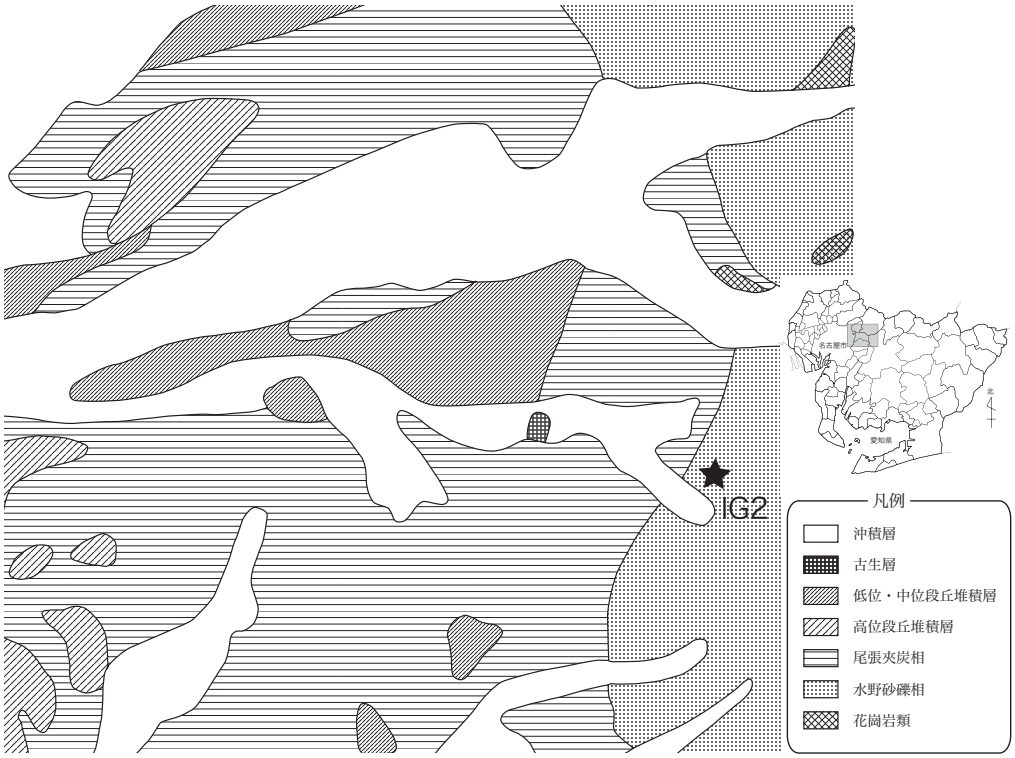


図 2　遺跡周辺の地質図（1：100000）

（2）歴史的環境

長久手町域における旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡は、現在のところごくわずかに確認されるに留まる。長久手町が昭和55（1980）年に行った遺跡分布調査によれば、内万場遺跡で旧石器時代の剥片石器、権道寺北遺跡で縄文後期の深鉢の胴部、宮脇遺跡で弥生後期の壺形土器の胴部などが採集されているが、遺構を確認するまでには至っていない。また古墳時代中期までの様相も不明な部分が多く、今後の解明が待たれる。

周辺の古墳群

古墳時代後期になり、ようやくこの地域でも古墳の築造が確認できる。町内の群集墳は高根山古墳群・熊張古墳群・南部古墳群の3群に大別され、うち熊張古墳群は助六古墳群・神明社古墳群の2グループからなる。このうち助六一号墳は胴張り型横穴式石室をもち、石室からは高杯・平瓶などの須恵器、直刀や刀子などの鉄製品などとともに銀環・金環が出土しており、出土状況から2ないし3世代、5体の被葬者が想定されている。また神明社二号墳の横穴式石室からも細頸瓶・台付鉢などの須恵器が出土しており、須恵器の年代観から古墳群の形成は7世紀初頭と考えられている。また遺物散布地として古墳群周辺にくたらげ遺跡・杁ヶ根遺跡があり、いずれも7世紀代の須恵器片が採集されていることから、集落の存在が推定されている。

須恵器生産

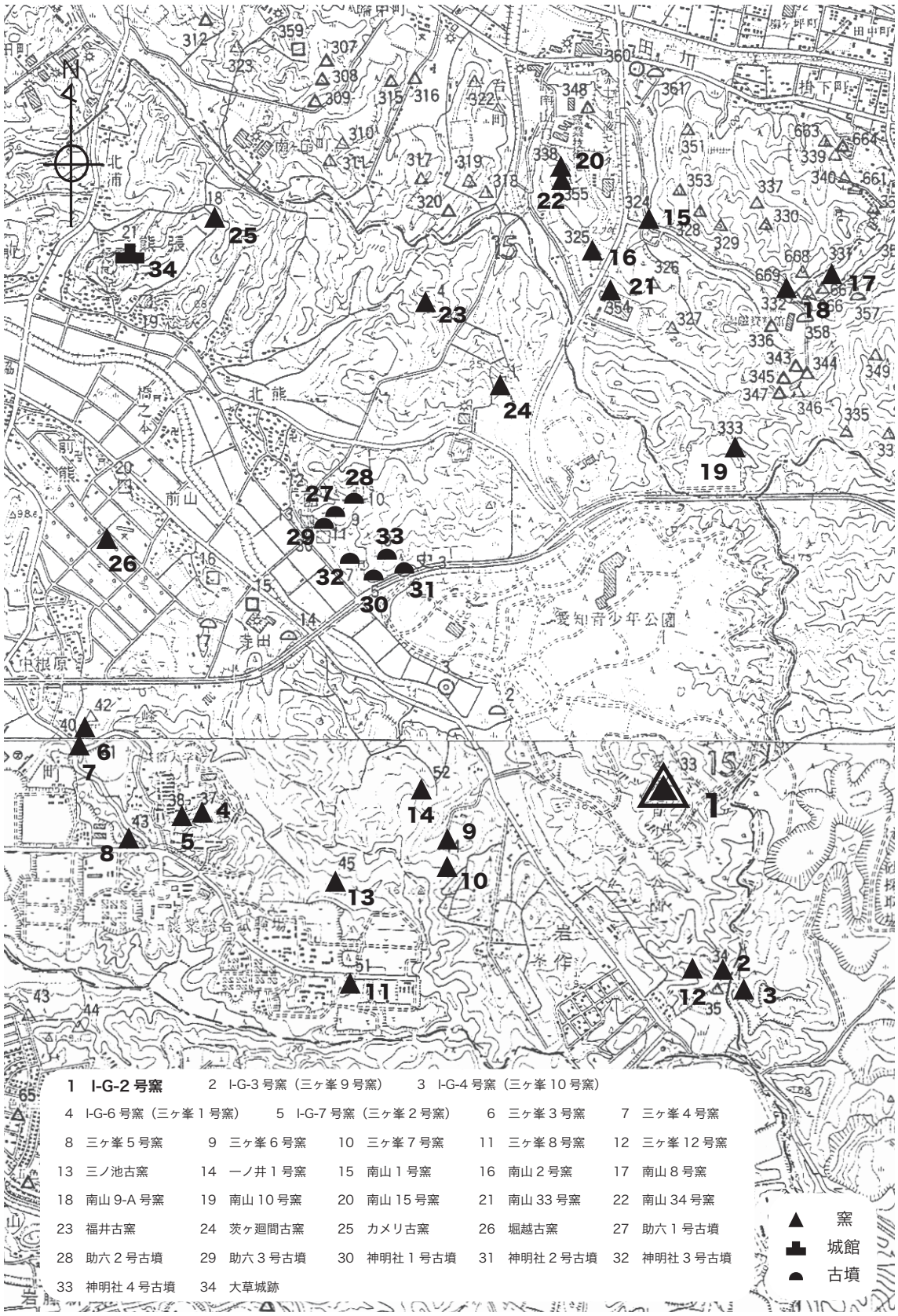
5世紀に東山窯（現名古屋市千種区・昭和区付近）で始まった須恵器生産は、奈良時代には周辺の丘陵一帯に広がり、猿投窯と呼ばれる一大窯業生産地へと成長した。町域はこのうち岩崎地区に属し、7世紀には西部の長湫丘陵を中心に丁子田古窯や、市ヶ洞古窯などが操業した。特に市ヶ洞古窯は7世紀末に操業し、「瓮（ほとぎ）五十戸」の刻書がある甕片の出土で知られる。8世紀後半には窯の分布が中央丘陵・岩作丘陵・三ヶ峯丘陵一帯に広がり、山越2号窯や三ヶ峯3号窯はこの時期の操業と考えられている。なおこの時期における町内の遺跡としては、奈良時代末期から平安時代初期にかけての土坑が確認された岩作城跡がある。

灰釉陶器

9世紀にはいると須恵器は灰釉陶器の生産へと転化し、日進市株山丘陵・岩藤丘陵を中心に生産が盛んとなった。9世紀後半から10世紀前半にかけて操業した山越1号窯では、大小三種類の灰釉碗や二種類の皿、段皿、手付瓶を生産したが、このうち灰釉碗には「羹坏」「大草當不□」銘を持つものがあり、注目されている。9世紀後半、窯の分布は周辺へ拡散する傾向を示し、数も減少する。山越1号窯にほど近い日進市金萩（かねはぎ）遺跡では、ロクロピットを含む工房跡や土器集積遺構が確認されている（池本、2004）。

山茶椀

平安時代末、灰釉陶器は施釉を省いた山茶椀に移行した。猿投窯では東山地区を中心に、山茶椀のほか花瓶・経筒外容器・四耳壺・三耳壺・瓦などが焼成され、京都や尾張国内の寺院などに供給されていたが、町内でこの時期の操業を確認することはできない。12世紀施釉陶器生産が瀬戸を中心に始まると、猿投窯では特殊品生産が衰退し、山茶椀専焼窯に移行した。13世紀前半には日進市岩崎地区をはじめ、三好町黒笹地区・名古屋市鳴海地区を中心に窯数はピークに達し（斎藤、1988）、町域でも三ヶ峯丘陵を中心に窯業生産が盛んになったことが明らかになりつつある。一方大草丘陵の茨ヶ廻間古窯では、山茶椀のほかに片口鉢・入子・瓦・四耳壺・陶硯・蓋などが焼成されており、近隣の瀬戸市幡山・南山口地区との関連性が指摘されている。猿投窯における山茶椀生産は13世紀後半には衰退し、三ヶ峯丘陵でもほぼ同じ時期に終末を迎える。



（「愛知県遺跡分布地図」と「長久手町史　本文編」を基本に作成）

図 3　周辺の主な遺跡（1：25000）

中世以後の長久手

中世の長久手町域については史料的制約が大きく、山田郡に属すること以外に文献からわかることは極めて少ない。ただしこの地域が尾張・三河両国の境に位置したことは、戦国期における岩作城・長久手城など城館の成立につながり、ひいては天正 12（1584）年に羽柴秀吉･徳川家康が争った小牧･長久手の戦いの主戦場となるのである。慶長 12（1607）年、徳川義直を初代藩主とする尾張藩が成立する。町域は北熊村・長久手村・岩作村・大草村・前熊村の 5 ヶ村に分かれ、水野代官所の支配下に置かれた。三ヶ峯丘陵一帯は岩作村に属し松山となっていたが、尾張藩は明和年間以降、土砂の田畑への流入を防ぐため松林を雑木林に変えていく方針を採ったといわれる。明治にはいると村の合併が進み、明治 39 年 5 月には上郷（旧北熊・前熊・大草の 3 ヶ村）・岩作・長湫の三村が合併して長久手村が誕生した。第二次大戦後三ヶ峯丘陵では開拓が進む一方、多くの県有林を利用して愛知県総合農業試験場、愛知県立芸術大学などが開設された。また昭和 45（1970）年 11 月には調査区を含む一帯に愛知青少年公園が開園し、多くの利用者で賑わっている。

愛知青少年公園

3 調査の経過

調査区には調査前の時点で園路に伴う休憩施設が構築されており、遺構の残存状況は不明であった。平成 15 年 3 月 20 日調査に先立って構造物の撤去に立会い、県試掘トレンチの位置と窯体 1 基の位置を確認した。この際、窯体 1 基の遺存を新たに確認した。

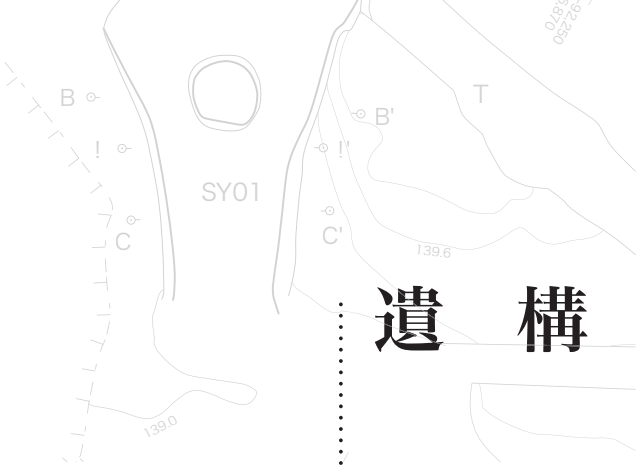
4 月 7 日、環境に対する配慮事項について説明を受けたうえで、4 月 10 日からトレンチ掘削作業を開始し、窯体 1 基の遺存を新たに確認した。調査は 4 月下旬に雨天が続いたため中止が続き、作業が本格化したのは 5 月に入ってからとなった。調査区東に設置したトレンチから遺物が多数出土したため、県試掘トレンチを東西に延長するとともに、調査区北端および南北方向にトレンチを新たに設けた。トレンチ掘削は 5 月 9 日に完了し、12 日から重機を投入して、盛土と認識した部分を掘り下げた。

窯体の検出後埋土の掘削を行い、6 月 4 日に空撮および個別遺構の写真撮影を行った。SY01・SY03 については窯体構造を確認するために 6 月 5 日から床面の断ち割りにはいり、SY02 については遺物・焼台の取上げを行った後に床面の断ち割りに入った。この間、盛土と認識した埋土が窯操業時の灰層・整地層であることが判明したため、北壁・東壁について土層断面図を測図し、遺物を層位ごとに取り上げた。6 月 20 日に熱残留磁気測定のための資料採取を行い、23 日には SY02 の断ち割り・写真撮影を完了し、27 日にかけて測量を行った。埋め戻しは 7 月 3 日から始め 7 月 7 日に完了し、調査を終了した。

表 1　調査工程表

	4月	5月	6月	7月
表土掘削				
発掘調査				
埋め戻し				

調査前の状況（南東より）



Chapter 2

遺　構

1　概　要

遺跡の立置

窯跡は三ヶ峯丘陵にいくつも伸びる支丘の一つに位置し、調査区の周辺には、公園利用者が気軽に散策できるよう園路が整備されている。調査は休憩施設の基礎を残した状態で開始した。

遺構検出の結果調査区内に3基の窯体を検出し、うち1基については前庭部に当たる位置に土坑1基と、排水を目的に構築されたと考えられる溝1条を確認した。ただし3基とも園路整備に伴う造成のために削平を受けており、遺構は燃焼室・分焔柱および焼成室の一部の検出に留まった。また壁面の土層を検討した結果、窯構築時の排土等を利用して前庭部を構築した可能性のあることが明らかとなった。したがって残る2基の前庭部に関しては、遺構を確認することができなかった。

窯体は3基とも窖窯である。窖窯は東海地方の瓷器系中世窯に通有な、分焔柱を持つ窯であり、猿投山麓の南西部を中心に、北は犬山市から南は知多半島にかけての丘陵地帯に広く分布する。窯体は北側に展開する谷に向かって開口し、灰原は谷の傾斜を埋めるように形成されていると考えられる。

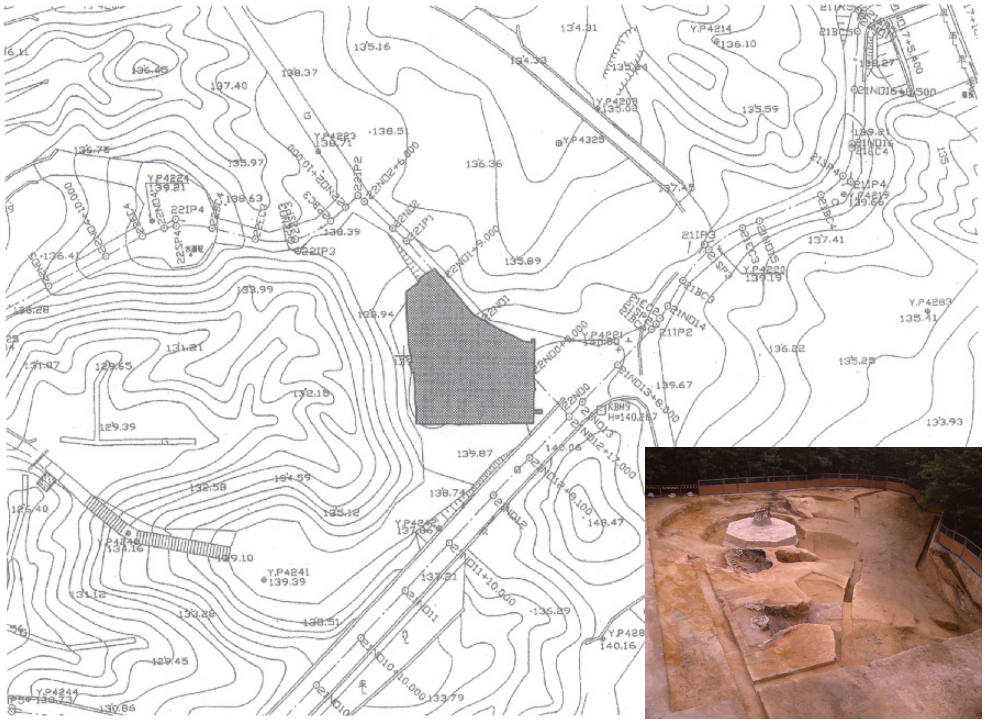


図4　調査区位置図（1：1000）

2 窯　体

(1) SY01

焚口から焼成室の一部まで約 4.05m が残存した。窯体は調査区外へ広がっていたと考えられるが、調査区の西側は急峻な崖であり、復元は不可能である。焚口の標高は 139m である。中軸線は N - 62° - W、傾斜は焚口から分焔柱まで 1°、焼成室の平均斜度は約 19° である。燃焼室は焚口から分焔柱の中心まで長さ 1.85m、焚口付近の幅 0.9m、燃焼室の中間からはゆるやかに広がり、分焔柱付近で約 1.6m を数える。分焔柱は床面から高さ 0.33m までが残り、直径 0.65m の円形の形状を持つ。断ち割りの結果、分焔柱は地山をくりぬいた状態で構築されており、周囲に粘土を貼り付けて補強している。焼成室は残存長 2.2m、床面は分焔柱から 1.25m までが残存する。

窯体の規模

分焔柱

表２　SY01 窯体断面観察表

番号	マンセル値	土　色	備　　考
1	5Y8/1	灰白色	還元層
2	2.5Y8/1	灰白色	分焔柱構築粘土
3	10YR7/8	黄橙色	分焔柱構築粘土
4	10R6/8	赤橙色	分焔柱構築土、地山
5	2.5YR6/8	橙色	分焔柱構築土、地山
6	10R5/8	赤色	分焔柱構築土、地山
7	10YR7/8	黄橙色	充填土
8	2.5Y7/1	灰白色	炭化物を含む、充填土
9	10Y2/1	黒色	粘土、炭化物を多量に含む
10	10YR6/6	明黄褐色	シルト、2.5Y8/1（灰白色）細粒砂、10YR7/2（にぶい黄橙色）粘土が斑入
11	10YR7/6	明黄褐色	シルト、焼土が混じる
12	10YR7/6	明黄褐色	細粒砂
13	10YR7/6	明黄褐色	細粒砂、焼土、炭化物を含む
14	10R5/8	赤色	酸化層
15	10R5/8	赤色	中粒砂、酸化層
16	10YR6/4	にぶい黄橙色	粘土、2.5Y7/2（灰黄色）細粒砂が斑入、充填土
17	10YR8/6	黄橙色	酸化層

表３　SY01 燃焼室埋土観察表

番号	マンセル値	土　色	備　　考
ア	10YR6/4	にぶい黄橙色	細粒砂、焼土をブロック状に含む
イ	2.5Y6/4	にぶい黄色	中粒砂、天井部焼土と互層状に混じる
ウ	10YR6/4	にぶい黄橙色	細粒砂、10YR7/8（黄橙色）細粒砂、10YR5/4（にぶい黄褐色）シルトとの斑土　焼土混じる
エ	2.5Y6/4	にぶい黄色	粘土、10YR3/1（黒褐色）シルトの斑土

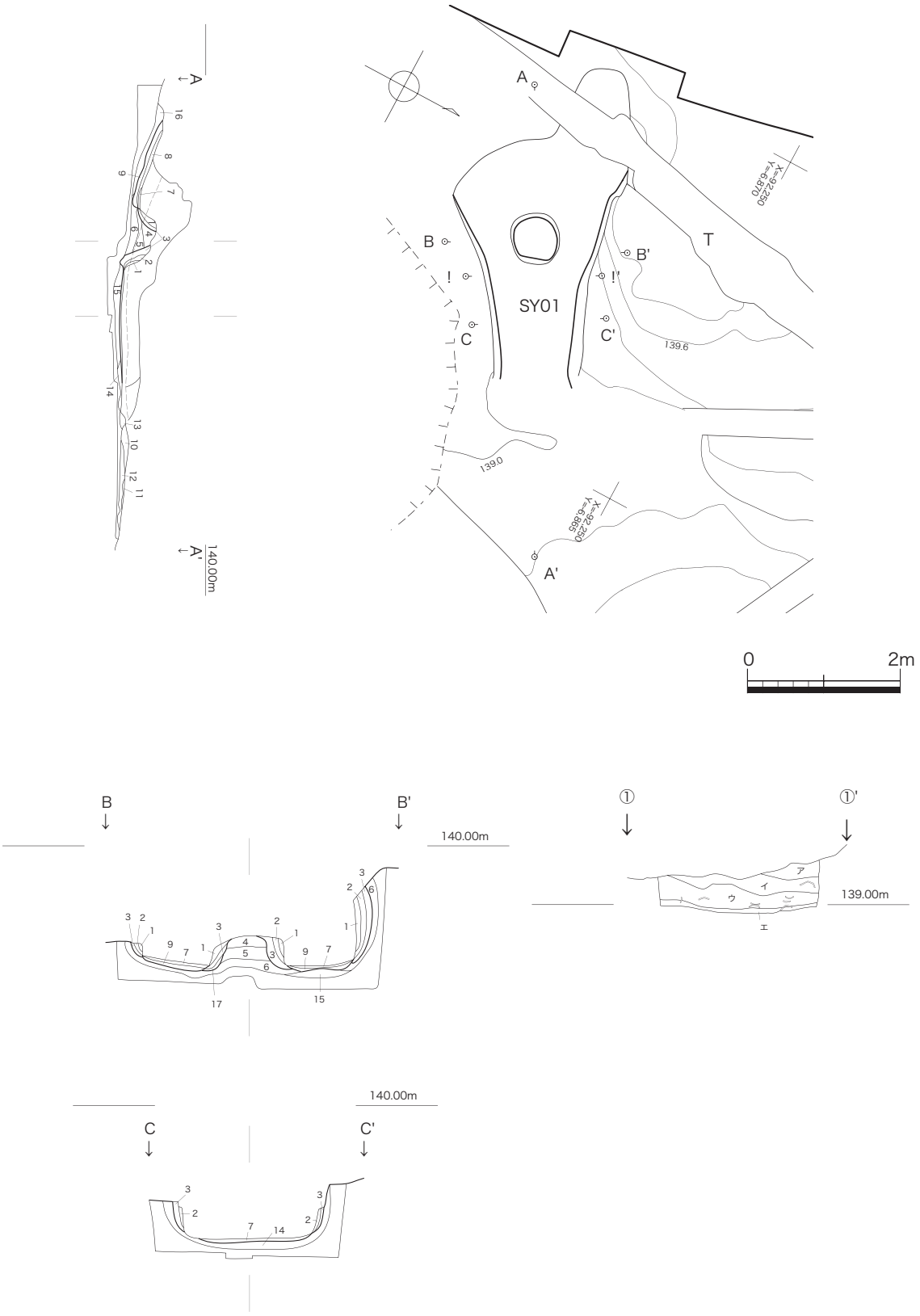


図５　SY01 窯体実測図（1：80，但し B-B'，C-C'，①-①' は 1：50）

(2) SY02

窯体の規模

焚口から焼成室の一部まで約 5.30m が残存した。焚口の標高は 138.4m である。中軸線は N - 4° - E、傾斜は焚口からやや落ちくぼみながらも分焔孔まではほぼ水平を保ち、分焔柱から焼成室にかけての平均斜度は 24°を保つ。燃焼室は焚口から分焔孔までの長さが 2.18m、焚口付近の幅 1.10m、分焔孔付近で 1.48m である。平面は焚口から分焔柱に向かって緩やかに広がり、分焔柱付近で張りが強くなる。また床面は硬く焼きしまっている。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、0.3m から 1m の高さまで残る。

分焔孔

分焔柱は長径 0.8m、短径 0.64m の楕円形であり、残存状況は良好であり、分焔孔を確認することができた。また構築状況を確認するために断ち割った結果、地山をくりぬいて構築されており、周囲を粘土により補強している。ただし一部は粘土が剥離していた。分焔孔は左が高さ 0.74m、幅 0.74m、右は高さ 0.78m、幅 0.68m のいずれも不正円形であり、左側が若干幅広い。

出土状況

焼成室は分焔孔より 2.60m までが残存した。平面は分焔孔付近から急速に幅広くなり、残存部の最大幅は 3.12m を測る。最終焼成時の床面は埋土の掘削過程で荒れが生じ、分焔孔付近では剥離している。床面には馬爪型焼台とともに山茶椀・小皿が出土したが、焼台のうち焼成時の位置を保っていたものは窯壁側の 19 個にとどまり、中央部では確認することができなかった。また断ち割りの結果、床面の補修が少なくとも 1 回以上行われている。壁面は分焔孔付近で高さ 0.72m までが残り、左側では粘土による補強が見られる。右側では補強を確認できなかったが、窯体構築時の工具の痕跡が見られた。

表 4　SY02 燃焼室埋土観察表

番号	マンセル値	土　色	備　　考
1	10YR6/6	明黄褐色	中粒砂に 5YR7/8（橙色）粘土が斑入　しまりなし
2	5YR7/8	橙色	粘土、10YR7/1（灰白色）粘土、10YR6/6（明黄褐色）中粒砂との斑土
3	5YR7/8	橙色	粘土に 10YR6/6（明黄褐色）中粒砂がブロック状に混じる
4	5YR7/8	橙色	粘土、10YR6/6（明黄褐色）中粒砂との斑土に 10YR6/8（明黄褐色）粗粒砂がブロック状に混じる
5	2.5Y6/3	にぶい黄色	細粒砂と 10YR5/3（にぶい黄褐色）中粒砂が互層に堆積、焼土が混じる、底部に 2.5Y6/1（黄灰色）粘土が堆積

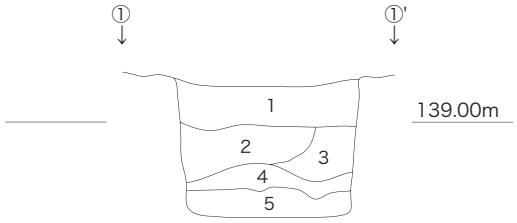


表５　SY02 窯体断面観察表

番号	マンセル値	土　色	備　　考
1	10YR5/8	黄褐色	シルト、酸化層
2	2.5YR5/8	明赤褐色	細粒砂、酸化層
3	2.5YR5/8	明赤褐色	中粒砂、酸化層
4	5YR6/6	橙色	中粒砂、酸化層
5	5Y4/1	灰色	分焔柱補修粘土
6	5Y7/1	灰白色	分焔柱補修粘土
7	10YR6/8	明黄褐色	分焔柱補修粘土
8	10YR7/6	明黄褐色	分焔柱補修粘土
9	5Y8/1	灰白色	中粒砂
10	2.5Y7/4	浅黄色	細粒砂
11	2.5Y4/6	オリーブ褐色	細粒砂
12	N-3	暗灰色	分焔柱構築粘土、風化著しい
13	2.5Y8/1	灰白色	還元層
14	5YR6/6	橙色	中粒砂、酸化層
15	2.5Y8/1	灰白色	中粒砂
16	10YR7/6	明黄褐色	床面
17	N-3	暗灰色	シルト、炭化物大量に含む
18	10R5/8	赤色	粘土
19	10YR6/1	褐灰色	シルト
20	10R5/8	赤色	中粒砂、酸化層
21	10YR7/2	にぶい黄橙色	中粒砂、10YR6/4（にぶい黄橙色）粘土がブロック状に混入
22	10YR7/6	明黄褐色	シルト
23	10YR6/8	明黄褐色	中粒砂、2.5Y7/6（明黄褐色）中粒砂が互層状に堆積
24	7.5YR6/8	橙色	粗粒砂
25	10YR7/2	にぶい黄橙色	粗粒砂、中礫を含む
26	10YR7/3	にぶい黄橙色	粘土
27	10YR7/3	にぶい黄橙色	粘土、2.5YR5/8（明赤褐色）粘土、N-3（暗灰色）中粒砂との斑土
28	10YR7/3	にぶい黄橙色	中粒砂、2.5Y6/4（にぶい黄色）粘土、2.5YR5/8（明赤褐色）中粒砂がブロック状に混入
29	10YR8/2	灰白色	中粒砂、7.5YR6/8（橙色）粗粒砂が互層状に堆積
30	10YR8/2	灰白色	粗粒砂
31	2.5Y5/6	黄褐色	中粒砂
32	N-2	黒色	炭化物
33	N-3	暗灰色	粘土、小礫混じる
34	2.5Y5/1	黄灰色	中粒砂
35	10YR5/6	黄褐色	細粒砂
36	10YR8/6	黄橙色	細粒砂
37	10YR7/6	明黄褐色	シルト粘質土
38	10R4/8	赤色	酸化層
39	2.5YR7/6	橙色	酸化層
40	10R4/8	赤色	酸化層

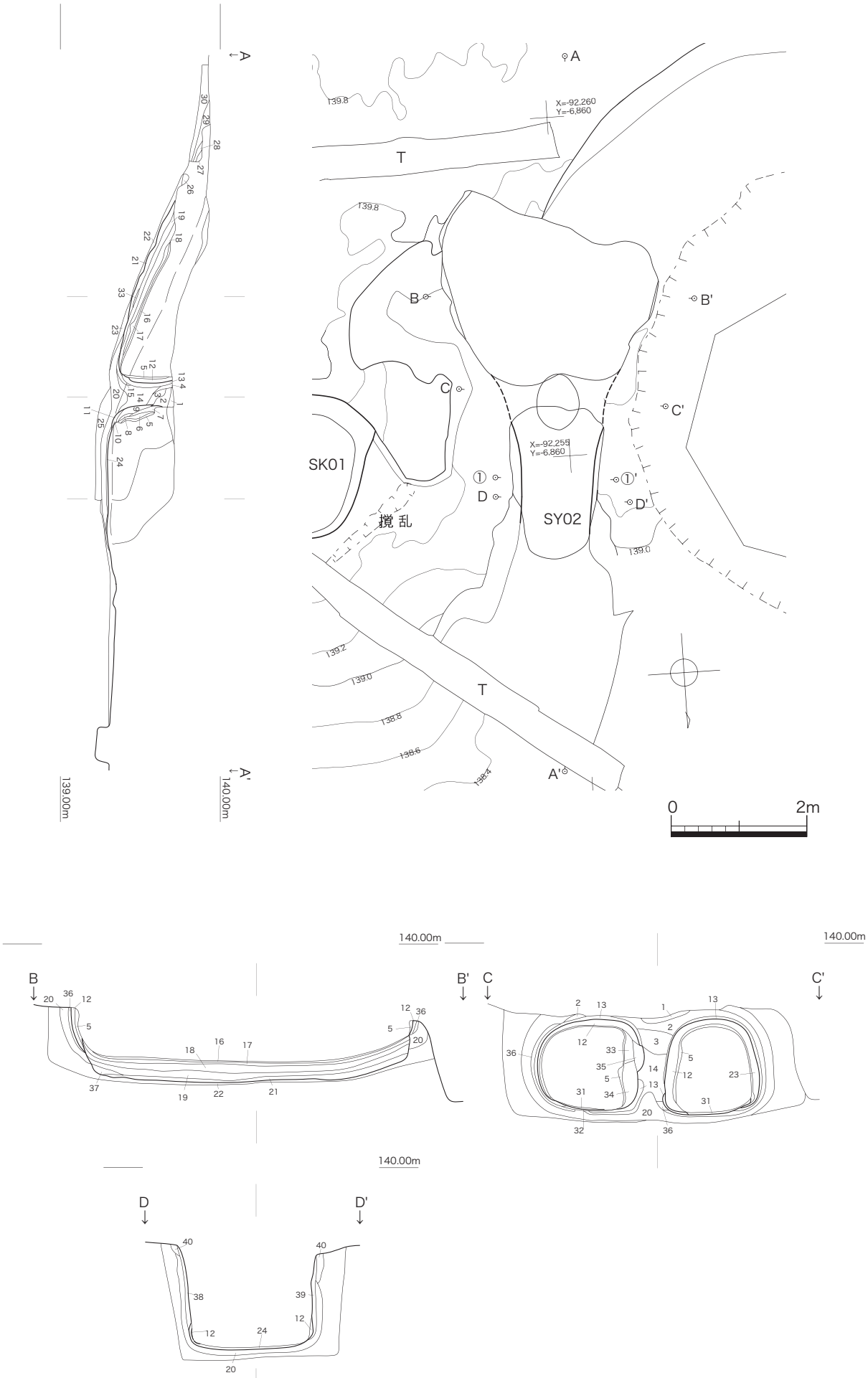


図 6　SY02 窯体実測図（1：80，但し B-B'，C-C'，D-D' は 1：50）

(3) SY03

窯体の規模

焚口から焼成室の一部、約 3.20m が残存していた。焚口の標高は 139.3m である。中軸線は N - 2° - W、傾斜は焚口からやや落ちくぼみ、燃焼室の半ばから約 16°で立ち上がり、焼成室までほぼ一定の傾斜を保つ。

前庭部

前庭部は正確な範囲を確認することができないが、焚口周辺約 3.9m の範囲に平坦な部分があり、少なくともここまでを前庭部と捉えることができる。焚口の右側に土坑 1 基（SK01）、焚口から伸びる溝 1 条（SD01）が確認できた。SK01 は直径 2.21m のほぼ円形のプランを持つ。深さは上部が削平されているため検出面からの確認となるが、山側で 0.3m、谷側で 0.2m を測る。炭化物を含む明黄褐色の埋土からは、山茶椀が出土した。

SK01

SD01

SD01 は北北東方向に伸び、末端は撹乱の影響を受けて確認できなかった。残存長は 2.60m、幅は焚口側で 0.14m、谷側で 0.18m である。なお焚口の左側は撹乱の影響を受けており、遺構を確認できなかった。

燃焼室は焚口から分焔柱の中心までの長さは 2.10m、焚口の標高は 139.3m である。焚口付近の幅は 1.00m、分焔柱との中間から次第に広がり、分焔柱で 2.12m を数える。壁

表 6　SY03 窯体断面観察表

番号	マンセル値	土　色	備　　考
1	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト、10YR6/1（褐灰色）粘土が斑入、炭化物、焼土が混じる、表土
2	7.5Y8/1	灰白色	気泡が入る、還元層
3	10YR7/8	黄橙色	2.5Y7/3（浅黄色）中粒砂がブロック状に混じる、炭化物を含む、充填土
4	10Y4/1	灰色	下層は 2.5Y8/1（灰白色）中粒砂、還元層
5	2.5YR6/8	橙色	充填土
6	10YR7/2	にぶい黄橙色	5YR6/8（橙色）粘土との斑土、充填土
7	5BG5/1	青灰色	分焔柱構築粘土
8	5Y5/1	灰色	分焔柱構築粘土
9	7.5GY6/1	緑灰色	分焔柱構築粘土
10	10YR8/6	黄橙色	下層は 2.5YR5/8（明赤褐色）、分焔柱構築土
11	10YR6/2	灰黄褐色	2.5Y8/1（灰白色）粘土がブロック状に混じる、窯壁を含む、充填土
12	7.5YR7/6	橙色	下層は 10YR8/2（灰白色）中粒砂、酸化層
13	10YR7/8	黄橙色	10YR6/1（褐灰色）細粒砂がブロック状に混じる、充填土
14	10YR8/4	浅黄橙色	分焔柱構築粘土
15	7.5YR7/6	橙色	分焔柱構築粘土
16	10R6/8	赤橙色	粗粒砂、酸化層
17	7.5YR5/3	にぶい褐色	焼土、炭化物が混じる
18	2.5YR6/8	橙色	酸化層
19	2.5YR6/8	橙色	酸化層
20	10YR7/6	明黄褐色	酸化層
21	10YR7/4	にぶい黄橙色	酸化層
22	5YR5/3	にぶい赤褐色	焼土、炭化物が混じる、酸化層
23	2.5YR5/8	明赤褐色	炭化物が混じる、充填土
24	10YR5/4	にぶい黄褐色	炭化物が混じる、充填土

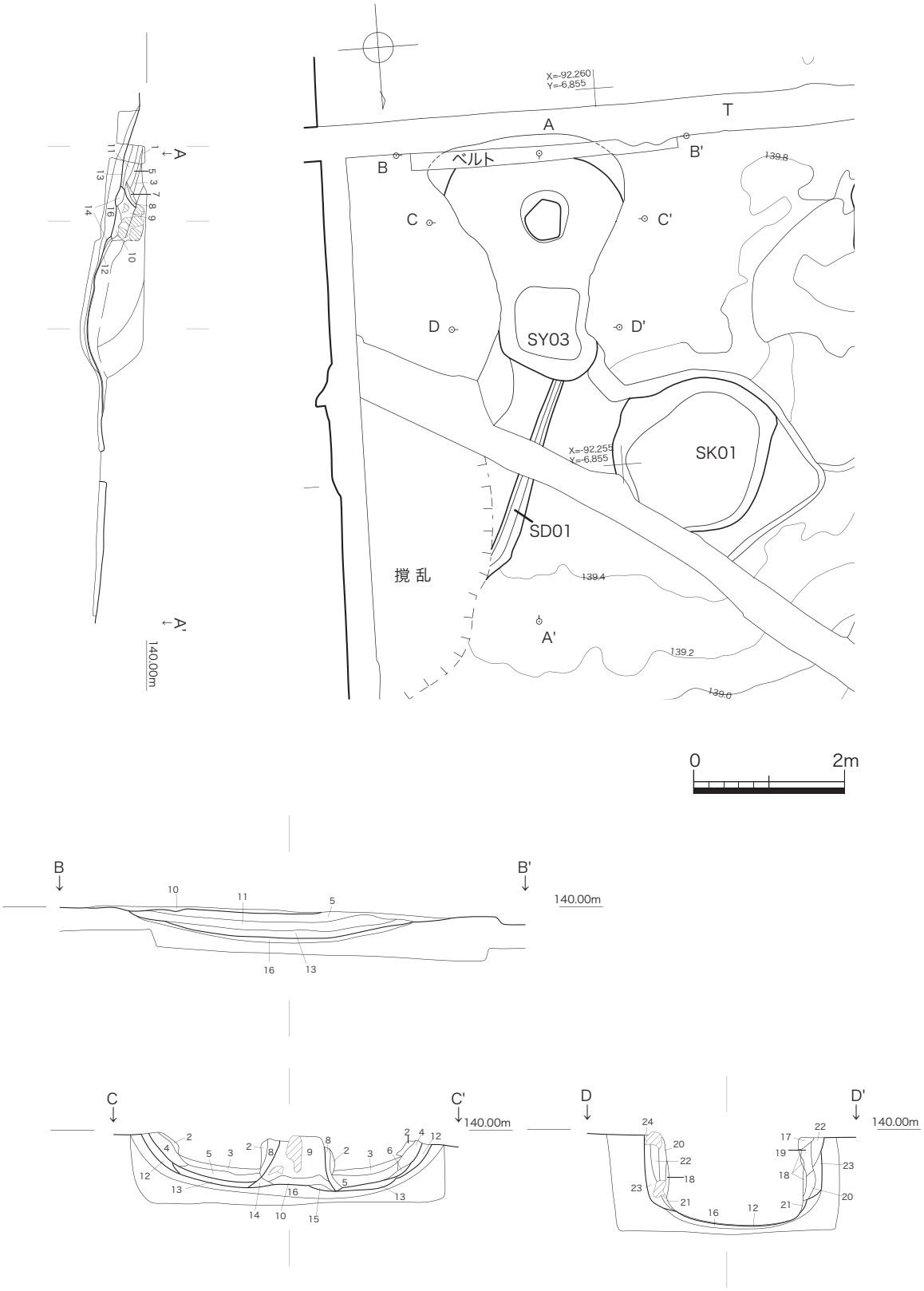


図 7　SY03 窯体実測図（1：80，但し B-B'，C-C'，D-D' は 1：50）

窯壁の補修

面は高さ 0.6m まで残り、垂直に立ち上がる。また断ち割りの結果、すさ入粘土を用いて補修し、いわゆる「重ね」を埋め込んでいることも確認できた。分焔柱は長径 0.7m、短径 0.67m の不整形の楕円形であり、床面から高さ 0.41m までが残る。山茶椀の「重ね」を芯にすさ入粘土で補修されている。

分焔柱の補修

焼成室は分焔柱の中心から 1.10m まで残存する。床面は荒れがひどく、残りは悪い。壁面は 0.3m の高さまで残り、壁面には粘土による補修が施されている。また断ち割りの結果、床面は少なくとも 1 回の補修を受けていることがわかった。

3 前庭部整地層・灰層

第 1 節にも述べたように、前庭部整地層および灰層の存在が調査終了後に判明した。このため、調査区北側（以下、北壁と記述する）及び東側（以下、東壁と記述する）の土層断面を検討する（図 8）。

宇野隆夫は上末釜谷 1 号窯の灰層を検討し、須恵器を大量に包含する層と窯壁・焼土が多く少量の須恵器を含む層が互層に堆積することから、両層を 1 回の操業単位として捉えた上で、都合 23 回の操業を明らかにした（富山大学人文学部考古学研究室、1989）。また、服部郁は瀬戸市穴田南 6 号窯の灰層について、大きく炭化物を多量に含む「灰層」と、炭化物をあまり含まずシルト・砂粒が主体となる「間層」に分かれることから灰層の形成過程を検討した（服部、1991）。

北壁の堆積状況

先に述べたように、窯体は北方向の谷に向かい構築されていたが、北壁の堆積状況からは以下の 5 群を想定することができる。

A 群　黄色の細粒砂を中心とする。窯灰絶後の自然堆積層と考えられる。

B 群　黄褐色・暗褐色の砂質土を中心とする。12・18 層焼土・遺物を包含し、灰層として捉えられる。また 14 層と 35 層の間を平坦面として捉えると、前庭部整地層の存在が推定できる。

C 群　赤みの強い黄色の砂質土を中心とする。45 層・46 層・47 層は遺物・炭化物を大量に包含し、灰層として捉えることができる。45 層は西側になるほど薄い炭化物の層に転化、D 群との間に平坦な部分があることから、前庭部整地層を想定することができる。

D 群　黄橙色の砂質土を中心とする。56 層は遺物を包含し、灰層として捉えることができる。

E 群　浅黄色の砂質土を中心とする。68 層は遺物とともに窯壁を包含する。

以上の検討結果から、B 群から E 群が窯操業時の堆積層として捉えることができる。

試掘トレンチの堆積状況

更に県教育委員会による試掘調査のトレンチを検討すると（図 9）、同じく 5 群を想定することができる。このうち Ⅰ 群は北壁 A 群に対応し、Ⅱ群とⅢ群の間、Ⅴ群に平坦面がみられることから、SY01・02 の前庭部に相当すると考えられる。

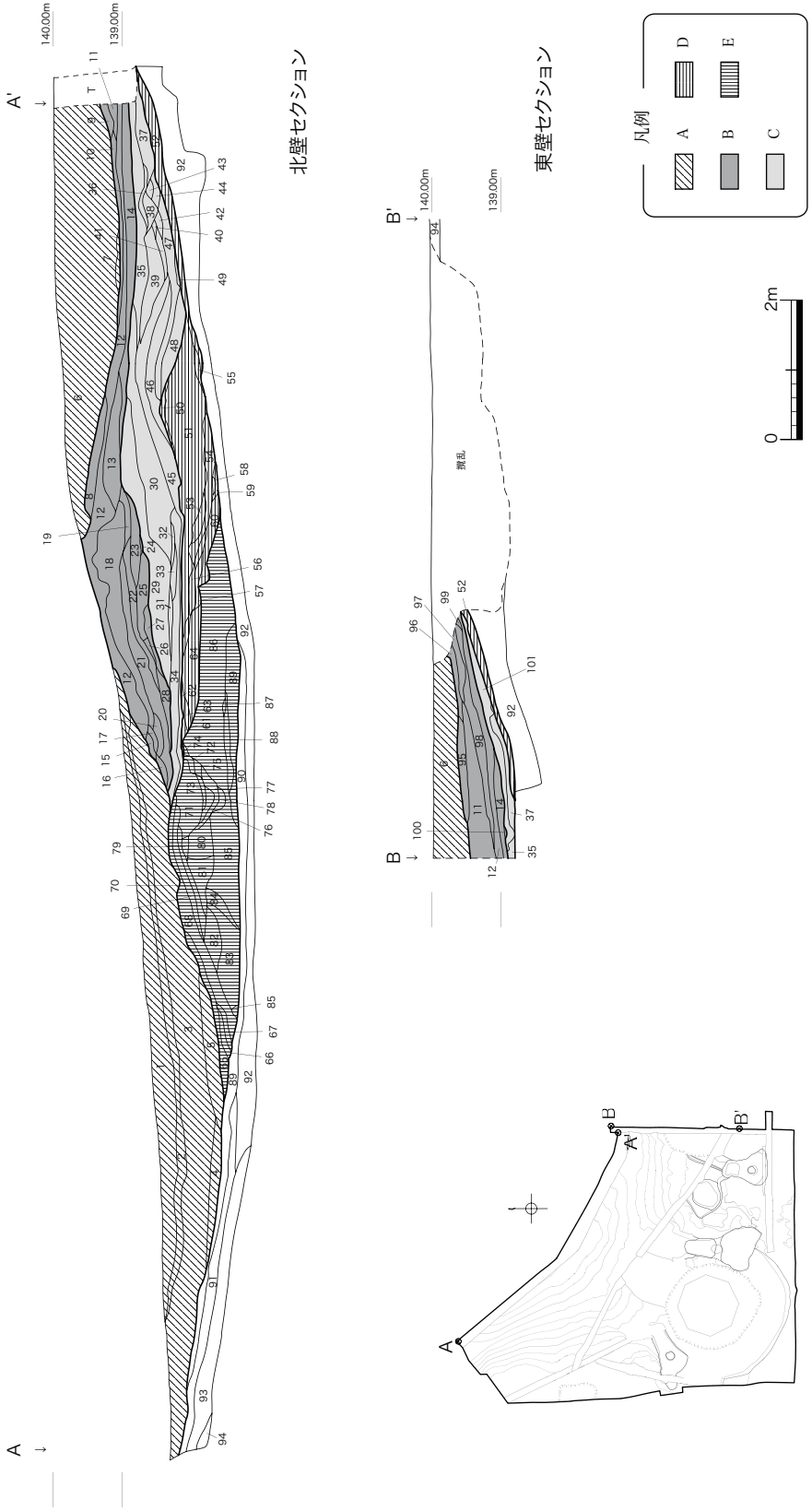


図８　調査区北壁・東壁埋土セクション図（1：100）

表７　調査区北壁・東壁土層観察表

番号	分類	マンセル値	土　　色	特　　色
1	A	10YR7/6	明黄褐色	細粒砂
2	A	2.5Y6/1	黄灰色	細粒砂
3	A	10YR6/4	にぶい黄橙色	細粒砂
4	A	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト
5	A	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂質シルト
6	A	10YR8/4	浅黄橙色	中粒砂、2.5Y8/1（灰白色）細粒砂と互層状に堆積
7	A	2.5Y6/1	黄灰色	細粒砂
8	B	7.5YR5/6	明褐色	中粒砂、窯壁・遺物を含む
9	B	10YR5/3	にぶい黄褐色	中粒砂、炭化物混じる、遺物を含む
10	B	10YR3/3	暗褐色	中粒砂、炭化物多く混じる
11	B	10YR5/4	にぶい黄褐色	中粒砂、7.5YR5/4（にぶい褐色）中粒砂が斑入、炭化物混じる、窯壁を含む
12	B	10YR4/1	褐灰色	細粒砂、焼土混じる
13	B	10YR5/3	にぶい黄褐色	中粒砂、10YR3/1（黒褐色）中粒砂が斑入
14	B	10YR7/1	灰白色	細粒砂、10YR7/6（明黄褐色）シルトとの斑土、底部に焼土を含む、炭化物が混じる
15	B	10YR6/2	灰黄褐色	細粒砂、炭化物混じる、窯壁を含む
16	B	10YR6/4	にぶい黄橙色	細粒砂、炭化物・焼土が混じる
17	B	10YR6/3	にぶい黄橙色	中粒砂、炭化物混じる
18	B	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂、焼土、遺物を含む
19	B	10R5/8	赤色	細粒砂、焼土
20	B	10YR5/3	にぶい黄褐色	中粒砂、窯壁を含む
21	B	10YR2/1	黒色	細粒砂、焼土が混じる
22	B	10YR5/4	にぶい黄褐色	中粒砂、窯壁を含む
23	B	2.5Y7/1	灰白色	中粒砂、10YR7/6（明黄褐色）砂質シルトが斑入
24	B	7.5YR7/8	黄橙色	シルト、10YR7/6（明黄褐色）シルトが斑入
25	B	10YR7/2	にぶい黄橙色	中粒砂、10YR8/6（黄橙色）細粒砂が斑入
26	B	10YR7/8	黄橙色	中粒砂
27	B	10YR7/6	明黄褐色	細粒砂、2.5Y8/1（灰白色）細粒砂、5YR6/8（橙色）細粒砂が斑入
28	B	10YR8/6	黄橙色	中粒砂、10YR6/6（明黄褐色）粘土が斑入
29	C	10YR8/6	黄橙色	細粒砂、2.5Y8/1（灰白色）細粒砂が斑入
30	C	7.5YR6/8	橙色	中粒砂、2.5Y7/1（灰白色）粘土が斑入
31	C	2.5YR6/8	橙色	細粒砂、10YR7/4（にぶい黄橙色）細粒砂が斑入
32	C	10YR7/4	にぶい黄橙色	細粒砂
33	C	2.5Y8/1	灰白色	中粒砂、10YR7/4（にぶい黄橙色）細粒砂と互層状に堆積
34	C	10YR7/6	明黄褐色	細粒砂、2.5Y6/8（明黄褐色）粘土が斑入
35	C	10YR8/4	浅黄橙色	細粒砂、7.5YR7/8（黄橙色）中粒砂が斑入
36	C	10YR8/4	浅黄橙色	砂質シルト、2.5Y8/1（灰白色）細粒砂が斑入
37	C	2.5Y8/4	淡黄色	砂質シルト、2.5Y8/1（灰白色）細粒砂が斑入、炭化物が少量混じる、しまりなし
38	C	2.5Y8/4	淡黄色	砂質シルト、2.5Y8/1（灰白色）細粒砂が互層状に堆積、炭化物が少量混じる
39	C	10YR7/6	明黄褐色	細粒砂、7.5YR7/8（黄橙色）粘土が斑入
40	C	2.5Y6/3	にぶい黄色	細粒砂、炭化物が少量混じる
41	C	2.5Y6/6	明黄褐色	細粒砂、2.5Y5/3（黄褐色）細粒砂との斑土、炭化物・焼土が少量混じる
42	C	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂、2.5Y7/1（灰白色）細粒砂との斑土
43	C	10YR6/4	にぶい黄橙色	中粒砂、10YR8/1（灰白色）細粒砂が斑入
44	C	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト、10YR8/6（黄橙色）細粒砂、10YR8/1（灰白色）細粒砂との斑土
45	C	10YR4/4	褐色	細粒砂、10YR8/4（浅黄橙色）細粒砂がブロック状に混じる、遺物・窯壁が混じる

番号	分類	マンセル値	土　　色	特　　色
46	C	7.5YR5/4	にぶい褐色	中粒砂、焼土
47	C	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂、炭化物が混じる、遺物を含む
48	C	10YR8/6	黄橙色	細粒砂、7.5YR7/8（黄橙色）シルトとの斑土、10YR7/1（灰白色）中粒砂を層状に含む
49	C	2.5Y6/1	黄灰色	細粒砂、10YR7/4（にぶい黄橙色）細粒砂が斑入、炭化物を含む
50	D	10YR7/4	にぶい黄橙色	細粒砂
51	D	7.5YR7/8	黄橙色	中粒砂、10YR8/1（灰白色）粘土が斑入
52	D	10YR6/4	にぶい黄橙色	シルト、炭化物が少量混じる
53	D	10YR7/8	黄橙色	中粒砂、10YR8/4（浅黄橙色）細粒砂、2.5Y7/1（灰白色）細粒砂との斑土、炭化物を含む
54	D	2.5Y7/4	浅黄色	細粒砂、2.5Y8/1（灰白色）細粒砂が斑入
55	D	10YR7/8	黄橙色	中粒砂、10YR8/1（灰白色）細粒砂、2.5Y7/1（灰白色）粘土との斑土
56	D	5YR5/6	明赤褐色	中粒砂
57	D	10YR8/1	灰白色	細粒砂、10YR7/8（黄橙色）細粒砂との斑土、焼土が混じる
58	D	10YR5/4	にぶい黄褐色	中粒砂
59	D	10YR7/2	にぶい黄橙色	砂質シルト、7.5YR7/6（橙色）中粒砂との斑土
60	D	10YR7/2	にぶい黄橙色	細粒砂、2.5Y8/1（灰白色）中粒砂が斑入
61	D	7.5YR7/8	黄橙色	中粒砂、2.5Y7/4（浅黄色）細粒砂が斑入、炭化物が混じる
62	D	7.5YR7/8	黄橙色	中粒砂、7.5YR7/3（にぶい橙色）粘土、5YR6/8（橙色）細粒砂が斑入
63	D	5YR6/8	橙色	細粒砂、炭化物を含む
64	D	7.5YR7/6	橙色	中粒砂、10YR8/1（灰白色）細粒砂が斑入、炭化物が混じる
65	E	10YR6/4	にぶい黄橙色	シルト
66	E	10YR7/6	明黄褐色	砂質シルト、窯壁を含む
67	E	10YR6/2	灰黄褐色	シルト、炭化物が混じる
68	E	10YR7/6	明黄褐色	シルト、窯壁・遺物を含む
69	E	7.5YR7/6	橙色	細粒砂、2.5YR7/3（淡赤橙色）細粒砂が斑入
70	E	2.5Y7/4	浅黄色	細粒砂、2.5Y8/2（灰白色）細粒砂との斑土、炭化物が混じる
71	E	7.5YR6/6	橙色	中粒砂、10YR8/1（灰白色）粘土が斑入
72	E	2.5Y7/3	浅黄色	細粒砂、7.5YR7/6（橙色）中粒砂が斑入
73	E	2.5Y7/3	浅黄色	砂質シルト
74	E	2.5Y7/2	灰黄色	細粒砂、7.5YR7/6（橙色）中粒砂が斑入
75	E	7.5YR7/6	橙色	中粒砂、2.5Y7/2（灰黄色）シルトが斑入、焼土が斑入
76	E	7.5YR7/6	橙色	中粒砂、2.5Y7/3（浅黄色）細粒砂、10YR6/4（にぶい黄橙色）細粒砂との斑土
77	E	2.5Y7/2	灰黄色	細粒砂、10YR8/1（灰白色）細粒砂が斑入
78	E	7.5YR6/8	橙色	中粒砂、2.5Y7/2（灰黄色）細粒砂、7.5YR5/6（明褐色）砂質シルトとの斑土
79	E	2.5Y7/2	灰黄色	中粒砂、斑土が斑入
80	E	7.5YR7/6	橙色	中粒砂、2.5Y5/6（黄褐色）細粒砂が斑入
81	E	7.5YR8/6	浅黄橙色	中粒砂、2.5Y7/2（灰黄色）細粒砂、10YR8/1（灰白色）中粒砂が斑入
82	E	2.5Y7/3	浅黄色	細粒砂、5YR6/8（橙色）粘土、10YR8/1（灰白色）細粒砂との斑土
83	E	2.5Y7/3	浅黄色	細粒砂、7.5YR6/8（橙色）中粒砂が斑入
84	E	7.5YR6/6	橙色	中粒砂、2.5Y7/3（浅黄色）細粒砂が斑入
85	E	2.5Y6/2	灰黄色	粘質シルト
86	E	7.5YR7/8	黄橙色	中粒砂、2.5Y7/4（浅黄色）シルト、5YR5/8（明赤褐色）中粒砂が斑入
87	E	7.5YR7/8	黄橙色	中粒砂、5YR6/8（橙色）砂粒砂がブロック状に斑入
88	E	2.5Y7/2	灰黄色	細粒砂、7.5YR7/8（黄橙色）中粒砂が斑入
89	E	7.5YR7/8	黄橙色	中粒砂、2.5Y7/3（浅黄色）細粒砂、5YR6/8（橙色）細粒砂との斑土
90		10YR6/4	にぶい黄橙色	粘質シルト、しまりなし
91		2.5Y6/4	にぶい黄色	シルト、しまりなし

番号	分類	マンセル値	土　　色	特　　色
92		10YR6/6	明黄褐色	砂質シルト、炭化物が少量混じる
93		2.5Y6/4	にぶい黄色	砂質シルト
94		5YR6/6	橙色	粘土
95	B	10YR6/6	明黄褐色	粘土
96	B	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト、炭化物を多く含む
97	B	10YR5/2	灰黄褐色	中粒砂、7.5YR6/8（橙色）砂質シルトが斑入
98	B	10YR6/3	にぶい黄橙色	中粒砂、7.5YR6/8（橙色）砂質シルトが斑入、上層に炭化物を多く含む
99	B	5YR6/6	橙色	中粒砂、焼土を含む
100	B	7.5YR6/2	灰褐色	細粒砂
101		10YR7/8	黄橙色	シルト

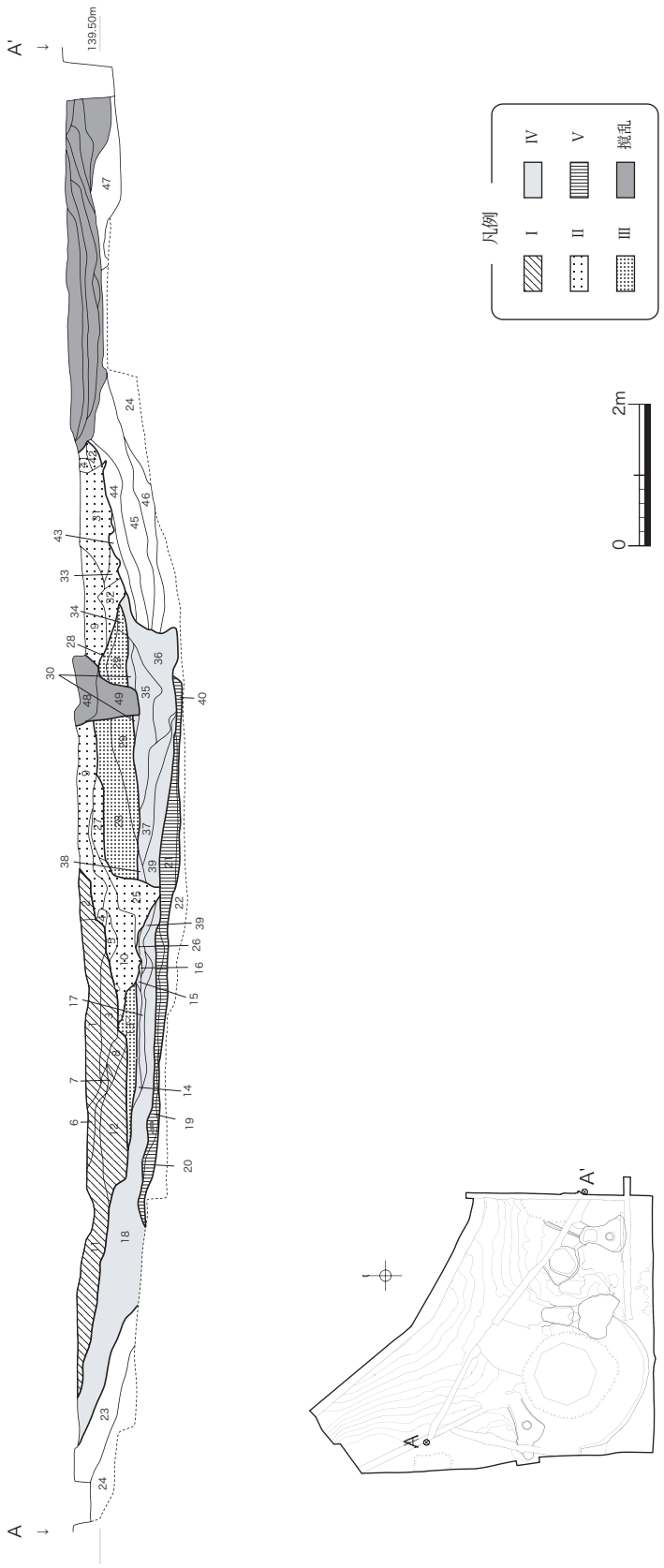


図９　県試掘トレンチ埋土セクション図（1：100）

表８　県試掘トレンチ土層観察表

番号	分類	マンセル値	土　　色	種　　別	特　　色
1	Ⅰ	2.5Y7/1	灰白色	細粒砂	
2	Ⅰ	2.5Y5/6	黄褐色	細粒砂	
3	Ⅰ	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂	
4	Ⅱ	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂	10YR5/1 細粒砂が少量混じる
5	Ⅱ	10YR5/4	にぶい黄褐色	細粒砂	10YR6/6 細粒砂ブロック状に混じる、炭化物・遺物混じる
6	Ⅰ	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂	7.5YR7/8 中粒砂との斑土
7	Ⅰ	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂	7.5YR7/8 シルトが少量混じる
8	Ⅰ	7.5Y7/1	灰白色	細粒砂	10YR6/6 細粒砂、7.5YR7/1 細粒砂との斑土
9	Ⅱ	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂	底部に窯壁混じる
10	Ⅱ	7.5Y7/1	灰白色	細粒砂	10YR6/6 細粒砂、7.5YR7/1 細粒砂との斑土、底部に窯壁混じる
11	Ⅰ	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂	
12	Ⅰ	10YR7/6	明黄褐色	シルト	
13	Ⅲ	10YR5/8	黄褐色	シルト	
14	Ⅳ	10YR4/4	褐色	細粒砂	炭化物混じる
15	Ⅳ	10YR6/6	明黄褐色	シルト	
16	Ⅳ	2.5Y6/4	にぶい黄色	砂質シルト	10YR5/2 シルトが混じる、炭化物混じる
17	Ⅳ	7.5YR7/8	黄橙色	粘土	10YR6/6 細粒砂との斑土
18	Ⅳ	2.5Y7/1	灰白色	中粒砂	7.5YR7/8 粘土との斑土
19	Ⅴ	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂	遺物を含む
20	Ⅴ	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト	7.5YR7/8 粘土との斑土
21	Ⅴ	2.5YR5/8	明赤褐色	粘土	底部に炭化物
22	–	10YR6/6	明黄褐色	砂質シルト	7.5YR6/8 粘土との斑土
23	–	2.5Y6/1	黄灰色	砂質シルト	締まりなし
24	–	5YR6/6	橙色	粘土	2.5Y7/4 粘土が混じる
25	Ⅱ	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	7.5YR7/8 砂質シルト、7.5Y7/4 中粒砂との斑土、窯壁混じる
26	Ⅳ	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	
27	Ⅱ	2.5Y7/3	浅黄色	中粒砂	10YR7/8 中粒砂との斑土
28	Ⅲ	2.5Y7/3	浅黄色	中粒砂	10YR7/8 粘土が斑入
29	Ⅲ	2.5Y7/8	黄色	中粒砂	2.5Y7/2 粘土が斑入
30	Ⅳ	2.5Y7/2	灰黄色	中粒砂	10YR7/8 中粒砂が斑入
31	Ⅱ	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂	炭化物、窯壁、遺物混じる
32	Ⅱ	10YR4/3	にぶい黄褐色	細粒砂	7.5Y6/4 中粒砂、7.5YR7/8 中粒砂との斑土
33	Ⅱ	10YR7/4	にぶい黄橙色	細粒砂	7.5YR7/6 砂質シルトが混じる
34	Ⅲ	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂	10YR7/8 粘土との斑土、炭化物少量混じる
35	Ⅳ	7.5YR7/6	橙色	粘土	10YR7/8 粘土、7.5Y7/2 中粒砂との斑土
36	Ⅳ	7.5YR7/6	橙色	粘土	10YR7/8 粘土との斑土
37	Ⅳ	10YR7/1	灰白色	中粒砂	10YR7/8 粘土がブロック状に混じる
38	Ⅳ	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	下層に 10YR7/1 中粒砂と 10YR7/1 粘土が斑入
39	Ⅳ	7.5YR7/6	橙色	粘土	10YR7/8 粘土、7.5Y7/2 中粒砂との斑土
40	Ⅴ	10YR7/1	灰白色	細粒砂	下層に炭化物、遺物混じる
41	Ⅱ	10YR4/4	褐色	中粒砂	2.5YR5/8 粘土、5YR6/6 中粒砂との斑土、炭化物混じる
42	Ⅱ	2.5Y6/4	にぶい黄色	細粒砂	
43	–	2.5Y7/2	灰黄色	中粒砂	10YR7/8 中粒砂が斑入
44	–	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	締まりなし
45	–	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂	締まりなし
46	–	2.5Y6/4	にぶい黄色	砂質シルト	
47	–	2.5YR5/8	明赤褐色	粘土	2.5Y8/1 中粒砂との斑土、炭化物混じる
48	撹乱	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂	10YR7/3 細粒砂、7.5Y6/8 中粒砂との斑土
49	撹乱	10YR4/3	にぶい黄褐色	細粒砂	10YR7/8 粘土、7.5Y7/2 中粒砂がブロック状に混じる、炭化物多く混じる

遺　物

Chapter 3

1　概　要

調査区内で出土した遺物のほとんどが無釉の碗・皿、いわゆる「山茶椀」及びそのセット関係で出土する「小皿」である。山茶椀は灰釉陶器生産の系譜を引く無釉の陶器で、瓷器系陶器第Ⅱ類に分類される（楢崎、1977）。このほか陶丸、焼台・蓋などの窯道具、土師質の鍋、陶質の甕、施釉陶器の破片が出土した。山茶椀および小皿について底部が 1/2 以上残存したものを 1 個体として数えたところ、山茶椀が 2790 個体、小皿が 260 個体出土した。遺物は調査区北側を中心に出土したが、遺構内の出土遺物のほか、休憩施設の建造あるいは取り壊しなどにより撹乱を受けた状態で出土した遺物がある。また前庭部及び灰層の分布が想定される範囲では層位を分けて取り上げなかったため、トレンチから出土した遺物とともに一括して扱うことにする。

山茶椀

出土個体数

2　形態分類

山茶椀・小皿それぞれについて、3 基の窯体内から出土した遺物をもとに形態分類を試みる。

（1）山茶椀

きめの荒い胎土をもつ、いわゆる東海地方南部系山茶椀であり、焼成時に生じた長石粒の吹き出しが顕著である。窯体内から出土した遺物を観察したところ、底部内面から体部にかけての整形上の差異に特徴が見られることがわかったため、底部内面の整形技法、および底部外面の切り離し痕についてそれぞれ分類した。

南部系山茶椀

底部内面…整形技法上、3 類に分けることができる。

底部内部の整形

Ａ類　底部内面の押圧は中心部に施され、浅く窪む。ヌタぬぐいの痕跡（いわゆる「殺し」）は押圧部に見られるが、一部不明瞭なものがある。鏝の整形痕は観察できるものと観察できないものとがある。体部内面との境目には同心円状の窪みが観察できる（図 10−A）。

図 10−A　Ａ類底部内面

B類　底部内面の押圧は中心部に強く加えられ、深く窪む。「殺し」が残り、鏝の整形痕が明瞭に観察できる。体部内面との境目は不明瞭なものが多い（図10 - B）。

図10−B　B類底部内面

C類　底部は平坦であり、「殺し」が明瞭に観察できる。鏝の整形痕は明瞭なものと不明瞭なものがある。体部との境目は角張る（図10 - C）。

図10−C　C類底部内面

このほか底部内面に鏝の整形により生じた中心部の突起が残り、「殺し」がみられないもの（D類）や、自然釉のため不明瞭なものがある。

底面外部の整形

底部外面…糸切り痕の形状から2類に分類が可能である。ただし技法上の違いについては伊藤正人氏の分析にあるように、定説がないのが現状である（名古屋市、1998）。

1類　糸の撚り目が明瞭に観察できるもの。

2類　糸の撚り目が観察できず、砂の移動痕が2～3本観察されるもの。

山茶椀の形態分類

以上の検討結果をもとに体部および口縁の形状、高台の整形技法を加味すると、以下の3類に分類される。なお法量は平均値を表す。

A類　器高5.5cm、口径14.2cm、底径5.7cm前後。ただし器高の高く、口径の狭いものが一部見られる。体部は底部から緩やかに湾曲して立ち上がるものと、直線的に立ち上がるものがある。口縁は直下で施された締めナデのため外反し、端部は肥厚する。底部内面には浅く押圧を施し、体部との境目には同心円状の窪みが観察できる。底部外面の整形は1類が多い。高台は内面を強くなでつけ断面三角形を呈するが、台形に潰れるものも見られる。籾殻痕が明瞭に観察される。

B類　器高5.7cm、口径14.0cm、底径5.8cm前後。A類同様、器高の高く、口径の狭いものが一部見られる。体部は直線的に立ち上がるものが多いが、緩やかに湾曲するものも見られる。口縁は外反し、端部は肥厚するがA類に比べて小さい。底部内面は押圧を強く施し、窪むものが多い。底部と内面の境は不明瞭

である。底部外面は 1 類が多いが、高台貼り付けの際生じた押圧により部分的に消失する。高台は内面を強くなでつけ断面三角形を呈するが、一部は台形に潰れたものも見られる。籾殻痕が観察されるが、一部に剥離が見られる。

C 類　器高 5.2cm、口径 13.9cm、底径 6.0cm 前後。体部は直線的に立ち上がるが、一部は弱く湾曲するものも見られる。口縁の締めナデは弱く、端部は尖る。底部は平坦となり、中心に強い「殺し」を施す。体部との境目は角張り、立ち上がりも直線的である。底部外面の整形は 2 類が多数を占める。高台は台形につぶれ、籾殻痕が明瞭に観察される。

(2) 小皿

底部外面の調整法、および体部の立ち上がりに着目すると、それぞれ 2 種に分類可能である。底部内面についても分類を試みたが、明確に区分することは難しい。

底面外部の整形

底部外面

a 類　底部の直径が4.2cm前後のもの。糸切り痕は山茶椀1類同様、明瞭に観察できる。

b 類　底部の直径が5.5cm前後のもの。糸切り痕は山茶椀2類同様、明瞭に観察できない。

体部外面の整形

体部外面

1 類　底部から湾曲して立ち上がる。また途中に稜線が生ずるものがあるが、形態的に区別が難しいため、このなかに含める。

2 類　底部からの立ち上がりが直線的なもの。

小皿の形態分類

以上の分類をもとにまとめると、a 類と 1 類、b 類と 2 類に強い相関関係が見られることが判明した。したがって、以下の 2 類に分類可能である。

a 類　底部の直径が 4.2cm 前後と小さく、糸切り痕が明瞭に観察できる。外面は底部から湾曲して立ち上がり、口縁は締めナデ調整が甘く、端部が尖る。また外面の途中に稜線が生ずるものもある。

b 類　底部の直径が 5.5cm 前後あり、a 類に比べ大きい。糸切り痕は不明瞭である。外面は底部から直線的に立ち上がり、口縁は締めナデ調整が甘く、端部が尖る。

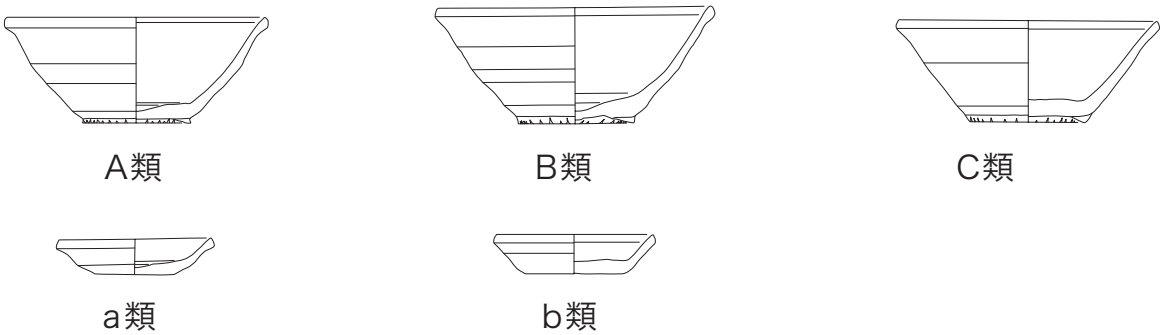


図 11　山茶椀・小皿の形態分類

3 遺構別出土状況

次に遺構別の出土状況を検討する。表9は、窯体内から出土した山茶椀・小皿の個体数を、形態別にまとめたものである。

SY01　SY01　山茶椀は129点を数え、B類が123点と最も多く、ついでA類が6点、C類は確認できなかった。小皿は93点を数え、すべてa類であった。

SY02　SY02　山茶椀は280点を数え、A類が162点と最も多く、ついでB類が81点、C類が37点であった。小皿は31点を数え、底部のみ残る1点を含め、すべてa類であった。

SY03　SY03　山茶椀はSY03が131点、SK01が33点を数える。SY03ではC類が105点と大半を占め、A類が12点、B類が11点、その他3点である。またSK01ではC類が30点、A類が2点、B類が1点である。小皿はSY03から8点出土したが、a類が1点、b類は7点を数えた。

表9　遺構別出土遺物形態分類表

山　茶　椀							
遺　構	個体数	見込み		外　面		外面計	
SY01	129	A	6	1	6	1	128
				2	0		
		B	123	1	122		
				2	1		
		C	0	1	0	2	1
				2	0		
		D	0	1	0		
				2	0		
SY02	280	A	162	1	150	1	259
				2	12		
		B	81	1	76		
				2	5		
		C	37	1	33	2	21
				2	4		
		D	0	1	0		
				2	0		
SY03	131	A	12	1	2	1	36
				2	10		
		B	11	1	9		
				2	2		
		C	105	1	24	2	95
				2	81		
		D	3	1	1		
				2	2		
SK01	33	A	2	1	2	1	3
				2	0		
		B	1	1	1		
				2	0		
		C	30	1	0	2	30
				2	30		
		D	0	1	0		
				2	0		
遺構全体	573	A	182	1	160	1	426
				2	22		
		B	216	1	208		
				2	8		
		C	172	1	57	2	147
				2	115		
		D	3	1	1		
				2	2		

小　皿							
遺　構	個体数	底　部		外　面		外面計	
SY01	93	a	93	1	92	1	92
				2	1		
		b	0	1	0		
				2	0	2	1
		その他	0	1	0		
				2	0		
SY02	31	a	30	1	30	1	31
				2	0		
		b	0	1	0		
				2	0	2	0
		その他	1	1	1		
				2	0		
SY03	11	a	1	1	1	1	2
				2	0		
		b	7	1	0		
				2	7	2	9
		その他	3	1	1		
				2	2		
遺構全体	135	a	124	1	123	1	125
				2	1		
		b	7	1	0		
				2	7	2	10
		その他	4	1	2		
				2	2		

4　陶丸・窯道具・その他の遺物

(1) 陶　丸

球形、胎土は比較的細かい。369 は蓋に転用されたと考えられる山茶椀に付着する。また 372 は 2 個体分にあたる山茶椀の口縁に付着しているため、山茶椀を利用して焼成された可能性がある。

(2) 窯道具

焼　台　いわゆる馬爪型焼台である。ただし SY02 床面から出土したもの以外は廃棄したため、窯体ごとの検討はできない。ただし一部の焼台には、高台部分に指圧痕が残るものが見られる。図示した 2 点（367･368）は山茶椀底部が釉着する。なお、小皿用焼台は調査時点で確認されていないこと、小皿の内面全体に降灰したものがあることから、小皿は山茶椀の上に重ねて焼成したと考えられる。

馬爪型焼台

障焔棒　釉着した山茶椀の中には、窯体・分焔柱の補修に再利用されたものと、障焔棒として再利用されたものがある。調査区では SY03 を中心に出土している。図示したものは後者として利用された可能性がある。いずれも二次的に火を受けているため、自然釉が付着し、硬く焼き締まる。

蓋　出土した山茶椀のうち、外面全体および内面に自然釉が付着したものは蓋として使用した可能性が高い。調査区内からは有台・無高台の 2 種類が出土しており、前者は 371 のように焼成済みのものを転用したもの、後者は蓋に使用することを目的に作られたと考えられる。底部が 1/2 以上残ったものを 1 個体と

有台・無台の比率

して数えたところ、2790 個体中有台は 80 点、無台は 32 点であった。池本正明氏の教示によると、NA311 窯の場合無台椀 250 点のうち蓋は 71 点であり、多くは転用したものであることを考えると、単純な比較は難しいが I - G - 2 号窯では蓋として焼成した無台椀の比率が高いといえる。370 は無台の椀。整形時に径 6mm の孔を開けており、最初から蓋として使用するために作られたと考えられる。整形時に底部・腰部に穿孔する事例は多治見市内の窯跡から出土しており、なかでも小名田西ヶ洞 2 号・3 号窯から出土した無高台の椀に類似するものがある（多治見市、1985）。

底部穿孔

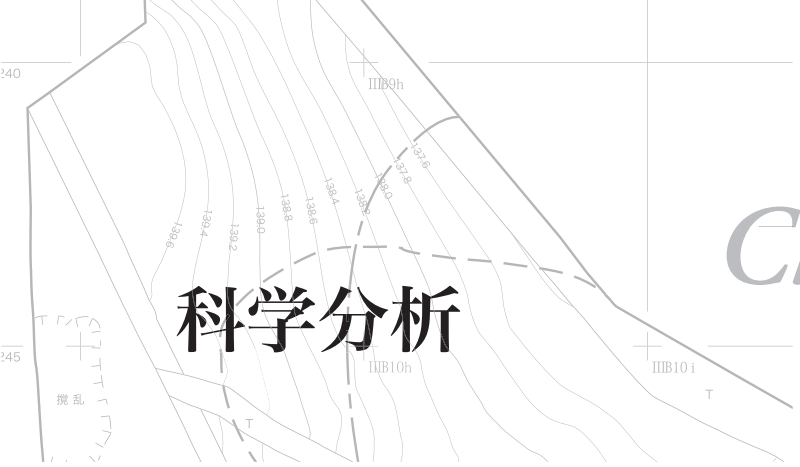
無台碗　調査区内から 2 点出土した。器厚は厚い。胎土は灰白色に近く、長石粒の吹き出しが見られる。373 は北壁 45 層から出土、口縁部を欠く。体部は内湾して立ち上がる。底部内面は窪むが中心部は隆起し、「殺し」が施される。体部との境目に段を有し、内湾して立ち上がる。底部外面には糸切痕が明瞭に観察できる。374 は底部から口縁まで残存する。外面は内湾して立ち上がり、口縁にかけてわずかに外反する。口縁端部の調整は甘く、尖る。底部内面から体部にかけての境目は不明瞭、鏝の痕跡が残る。底部外面に糸切り痕が明瞭に観察できる。内面に自然釉がかかり、あるいは蓋として利用された可能性がある。

（3）その他の遺物

伊勢型鍋　遺構の検出過程で出土した。頸部から口縁部が残存するもの 1 点（375）、肩から頸部の一部が残るもの 1 点、口縁端部のみ残るものが 1 点あり、底部・体部はいずれも失われている。これらが 1 個体か、あるいは複数の個体かは不明である。図示したものは頸部がほぼ直立し、口縁は折り返されて肥厚する。内面にナデ調整が見られる。

甕　胴部の破片 1 点が出土した（376）。胎土は濃い灰色であり、粘土紐積み上げの痕跡が観察される。外面にヘラ削り調整、内面にはナデ調整が施される。搬入品の可能性が高い。

施釉陶器　口縁部のみが残存する。古瀬戸後期の擂鉢である。搬入品の可能性が高い。



Chapter 4

科学分析

1 考古地磁気測定

(1) はじめに

ここでは3基の窯跡について床面焼土の熱残留磁化を測定し、その磁化方向から各窯跡の焼成年代を推定した結果を記す。なお、測定は株式会社パレオ・ラボが実施した。以下の文章は、藤根久・Zauri Lomtatize両氏執筆による報告書を、編集者の責任の下に要約したものである。

(2) 考古地磁気年代推定の原理

地球上の地磁気は真北からの角度である偏角（Declination）と水平面からの角度である伏角（Inclination）、および強度（全磁力）によって表される。これら地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は観測する地点によって異なった値になり、現在の地磁気の分布は全世界地磁気三要素の観測データの解析から、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。現在、この付近の偏角は約6.84° W、伏角は約48.40°、全磁力（水平分力）は約30843.5（nT）である（理科年表、1993；いずれも1990年値）。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

地磁気の三要素

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などに残る強磁性鉱（磁鉄鉱など）の残留磁化測定から知ることができる。地磁気の方向は少しずつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。考古地磁気では、焼土の残留磁化（熱残留磁化）が、焼かれた当時の地磁気の方向を記録していることを利用する。過去2,000年については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化測定から、その変化が詳しく調べられている（広岡、1977、Shibuya、1980）。一方、地磁気には地域差が認められることから、東海地方の地磁気永年変化曲線も求められている（広岡・藤澤、1998）。

考古地磁気

こうした年代のよく分かっている窯跡焼土や火山岩の熱残留磁化測定などから地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土などの残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較することによって、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている窯跡焼土などについても、土器とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。

（3）試料採取と残留磁化測定

考古地磁気による年代推定は、a）測定用試料の採取および整形、b）残留磁化測定および統計計算を行い、c）地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認するために、段階交流消磁も行った。

a）測定用試料の採取および整形

整形試料は、床焼土面において、①一辺約 4cm の立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーなどを用いて、対象とする部分（良く焼けた部分）の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや固め（練りハミガキ程度）の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺 5cm の正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス（考古地磁気用に改良したクリノメータ）で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺 3.5cm・厚さ 2cm 程度の立方体に切断する。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。採取した試料は、SY01 が 16 試料（2 個破損）、SY02 が 13 試料、SY03 が 14 試料である。

採取資料

b）段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算の結果

熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計（SMM-85: ㈱夏原技研製）を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意 1 試料（SY01 が No.4、SY02 が No.12、SY03 が No.7）について交流消磁装置（DEM-8601：㈱夏原技研製）を用いて段階的に消磁を行い、その都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した。その結果、試料の磁化強度は 10-2 ～ 10-4emu と強いことが分かった。NRM（自然残留磁化）に対する 150 Oe 消磁の相対強度は、SY01 の No.4 が 93.2%、SY02 の No.12 が 97.7%、SY03 の No.7 が 79.7％であった。さらに、磁化方向は、中心に向かって直線的に変化し、安定した方向を記録していることが分かった。

以上の理由から、150 Oe で消磁した際の残留磁化方向が焼成時の磁化方向であると判断した。そこで、これ以外の段階交流消磁を行っていない試料も、150 Oe 消磁した後に残留磁化を測定した。複数試料の測定から得た偏角〔Di〕・伏角〔Ii〕を用いて、Fisher（1953）の統計法により平均値（Dm、Im）を求めた。一部の集合から外れた試料を除いた後の信頼度計数は、SY01 が 1219.71、SY02 が 1871.70、SY03 が 2574.92 と大きな値であり、伏角および偏角の各誤差は小さな値であった（表 10）。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地理院の 1990.0 年の磁気偏角近似式から計算した 6.84° W を使用した。その結果は、広岡による地磁気変化曲線（広岡、1977）とともにプロットした（図 10）。図中測定点に示した楕円は、フッシャー（1953）の 95% 信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。

表 10　残留磁化測定結果

遺　構　名	試料 No.	偏　角 (°E)	伏　角 (°)	強　度 (×10⁻³emu)	備　考	統計処理項目	統計値
SY01 150 O e 消磁	1	13.5	60.9	0.627	計算から除外	試料数（n）	10
	2	23.8	55.0	66.920	計算から除外		
	3	11.0	60.8	19.020		平均偏角 D m（°E）	7.12
	4	7.9	61.2	61.200	段階交流消磁		
	5	0.3	61.4	0.948		平均伏角 Im（°）	61.64
	6	0.2	63.6	0.746			
	7	-0.7	62.8	1.426	計算から除外	誤差角 δ D（°）	2.91
	8	6.1	61.4	0.323			
	9	8.5	63.9	0.925		誤差角 δ I（°）	1.38
	10	8.3	63.1	0.527			
	11	10.4	60.8	0.548		信頼度計数（k）	1219.71
	12				破　損		
	13				破　損	平均磁化強度 (×10⁻³emu)	9.95
	14	9.0	59.9	1.009			
	15	8.8	59.8	14.270			
	16	4.0	60.0	15.910			

遺　構　名	試料 No.	偏　角 (°E)	伏　角 (°)	強　度 (×10⁻³emu)	備　考	統計処理項目	統計値
SY02 150 O e 消磁	1	6.7	63.7	0.543	計算から除外	試料数（n）	11
	2	10.7	62.3	0.363			
	3	14.8	61.7	0.332		平均偏角 D m（°E）	10.81
	4	11.7	61.4	0.460			
	5	8.0	62.0	0.297		平均伏角 Im（°）	61.07
	6	10.4	59.0	0.290			
	7	11.7	58.4	0.272		誤差角 δ D（°）	2.19
	8	7.7	60.0	0.407			
	9	12.4	62.9	5.648		誤差角 δ I（°）	1.06
	10	12.5	62.8	6.760			
	11	7.5	61.1	6.760	段階交流消磁	信頼度計数（k）	1871.70
	12	27.7	66.7	4.438	計算から除外		
	13	11.7	60.0	0.499		平均磁化強度 (×10⁻³emu)	2.01
	14						

遺　構　名	試料 No.	偏　角 (°E)	伏　角 (°)	強　度 (×10⁻³emu)	備　考	統計処理項目	統計値
SY03 150 O e 消磁	1	12.1	58.4	2.974		試料数（n）	9
	2	8.9	55.6	1.193	計算から除外		
	3	10.8	60.0	2.368		平均偏角 D m（°E）	10.34
	4	12.1	59.1	2.577			
	5	3.5	59.6	1.753	計算から除外	平均伏角 Im（°）	59.73
	6	8.9	58.6	1.165			
	7	5.8	60.3	3.152	段階交流消磁	誤差角 δ D（°）	2.00
	8	8.9	61.3	0.647			
	9	9.0	60.2	5.894		誤差角 δ I（°）	1.01
	10	10.6	60.4	1.120			
	11	15.6	63.8	5.250	計算から除外	信頼度計数（k）	2574.92
	12	14.6	59.1	1.441			
	13	17.4	56.6	1.009	計算から除外	平均磁化強度 (×10⁻³emu)	2.37
	14	17.3	56.5	1.383	計算から除外		

(4) 焼成年代値の推定

焼成推定年代

図 10 は広岡公夫・藤澤良祐による地磁気永年変化の一部曲線（広岡・藤澤、1998）とともに、窯跡の床面焼土の磁化方向を示したものであり、3 基の窯跡の磁化方向は、1,100 ～ 1,300 年間の曲線付近に位置した。年代は最も近い標準曲線上に移動して推定し、その結果は表 11 に示した通りである。

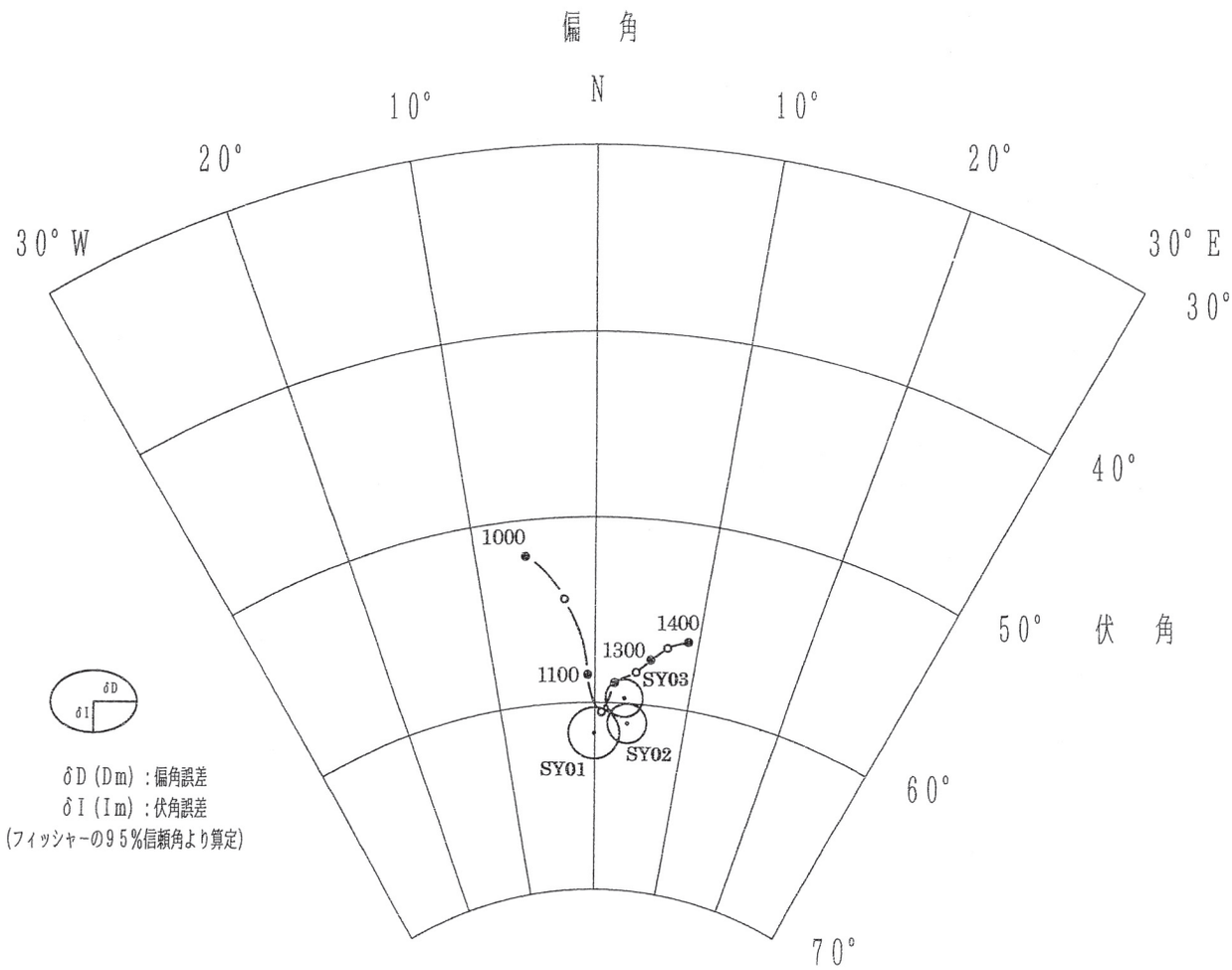


図 12　考古地磁気永年変化曲線

表 11　窯跡焼土の焼成年代推定値

遺　　構	遺物による年代	残留磁化による推定年代
SY01	13 世紀	A.D.1,150 $^{+40}_{-30}$年
SY02	13 世紀	A.D.1,160 ± 35 年
SY03	13 世紀	A.D.1,190 ± 30 年

引用文献

Fisher. R. A.（1953）Disparsion on a sphere. Proc. Roy. Soc. London. A. 217. 295-305
広岡公夫（1977）考古学地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15、200-203
広岡公夫・藤澤良祐（1998）東海地方の地磁気永年変化、日本文化財科学会第 15 回大会研究発表要旨集、20-21
理科年表（1993）国立天文台編、丸善、952P
Shibuya, H.（1980）Geomagnefic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文、54P

Chapter 5 考察とまとめ

1 I−G−2 号窯における窯業生産の特徴

第 3 章では I−G−2 号窯から出土した山茶椀・小皿について形態分類を試みたが、ここでは形態と法量の 2 点について検討し、それぞれの前後関係を明らかにする。次に窯体ごとの遺物出土状況を比較し、3 基の操業状況を検討する。

(1) 形態変化

まず形態に着目すると、三類には次のような特徴を指摘することができる。

①体部外面　　体部の立ち上がり

A 類・B 類とも底部から湾曲して立ち上がるもの、直線的に立ち上がるものの 2 種類がある。この傾向は A 類よりも B 類により多く見られる。また立ち上がりが急であり、器高の高いものも見られる。これに対し C 類は底部からの立ち上がりが直線的である。

②口縁端部の調整　　口縁端部

A 類の口縁端部は大きく肥厚するが、B 類・C 類は肥厚が小さく、尖る傾向にある。

③底部内面・体部内面の境　　底部・体部内面の境

A 類は底部中央の窪みは弱く、底部と体部の境は浅く窪む。これに対し B 類は底部中央が強く窪み、底部内面と体部内面の境は滑らかにつながる。さらに C 類の底部中央は平滑であり、底部と体部の境は角張ってつながる。

④高台の形状　　高台

A 類・B 類では断面形状は低く潰れながらも三角形を保ち、籾殻痕も浅く残る。これに対し C 類では断面形状が台形に潰れ、籾殻痕が強く圧着する。

⑤底部外面　　底部糸切り痕

A 類・B 類では糸切り痕 1 類が多数を占めるのに対し、C 類では糸切り痕 2 類が圧倒的になる。

これらの要素を比較すると、まず A・B 類と C 類の間には②を除き明らかな差異が認められ、形式的変化として捉えることができる。また A 類と B 類には底部内面の押圧、底部及び体部内面の境に差異を認めることができるものの、共通点が多く見られる。

(2) 法量の分析

表 12 は山茶椀・小皿の器高・口径・底径・径高指数・口径と底径の比率について形態別に平均値を求めたものである。山茶椀について要素を比較すると、　　法量の比較

①器高は A 類に較べ B 類が高くなるが、C 類は逆に低くなる。このことは径高指数

にも同様の特徴として表れる。

②口径はA類・B類・C類の順に狭くなる

③底径はA類・B類・C類の順に広がる

といった特徴を指摘することができる。

表12　形態別計測平均値

	形　態	器高平均	口径平均	底径平均	径高平均	口径 / 底径
山茶椀	A類	5.5	14.2	5.7	39.2	2.48
	B類	5.8	14.0	5.8	41.3	2.44
	C類	5.2	13.9	6.0	37.6	2.33
小　皿	a類	1.8	8.0	4.4	23.2	1.79
	b類	1.9	8.4	5.5	22.1	1.56

また表13は口径と器高、口径と底径についてそれぞれ分布を表したものである。三類はほぼ同じ範囲に分布するが、C類はA類・B類にくらべ器高はやや低く、底径はやや高く分布する傾向が見られる。また口径の分布も、A類・B類に較べ集中する傾向を示す。これに対してA類・B類は分布の重なる部分が大きく、その違いを形式差として捉えるにはわずかである。強いて特徴を挙げるならば、A類は口径の分布に分散傾向が見られるが、B類では口径・器高の分布ともに分散傾向が見られる。

以上の検討結果から、A・B類とC類の間には器高の減少、底径の増加に見られるような法量の変化を見出すことができるが、A類・B類の間における法量の変化はごくわずかであり、同一形式内のわずかな変化として捉えることができる。なお小皿については、a類に対しb類は口径・底径ともに広くなる。

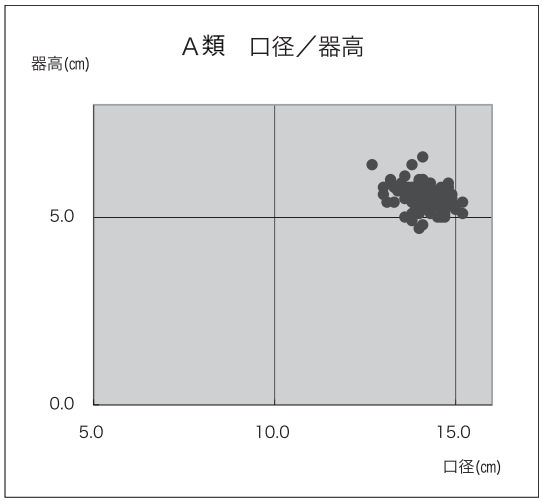
(3) 形態の前後関係と操業段階

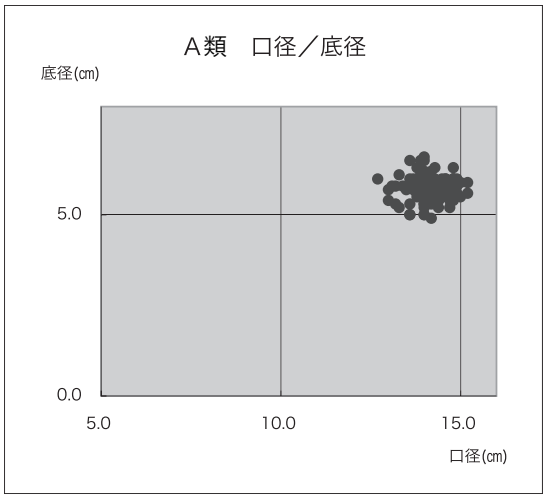
形態の新旧

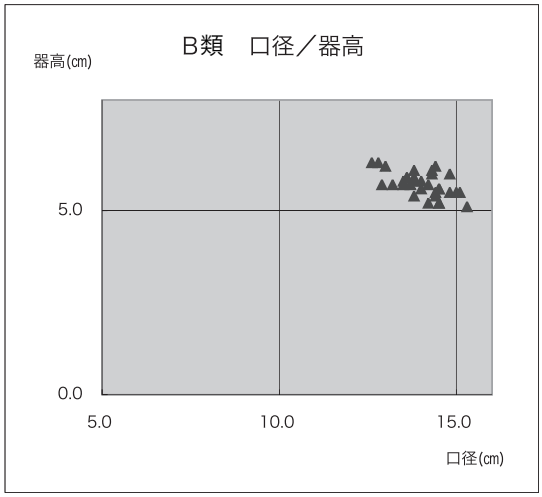
以上の検討結果をもとに山茶椀の形態について前後関係を検討すると、まずC類はA類・B類より器高・口径が小型化すること、形態面でも体部の直線化が認められることから、A類・B類がC類より先行することは明らかである。次に問題となるのは、A類及びB類の前後関係である。法量から見るとA類に対してB類は器高が高く、口径が狭いことが挙げられる。形態面でも底部内面と体部内面の境や口縁端部の整形に省力化の傾向が見られることから、A類がB類に先行すると考えられる。ただし腰部に直線的なものと張りを持つものが双方に見られるなど、同一形式内での変化として捉えることが可能である。藤沢良祐氏による尾張型山茶椀の編年（藤澤、1994）をもとに年代観を与えるならば、A類・B類は第6型式、C類は第7型式に相当すると考えられる。絶対年代としては13世紀の前葉から中葉に位置づけられる。また、小皿a類は山茶椀A類・B類、b類はC類と対応関係にあることが表9から指摘できる。

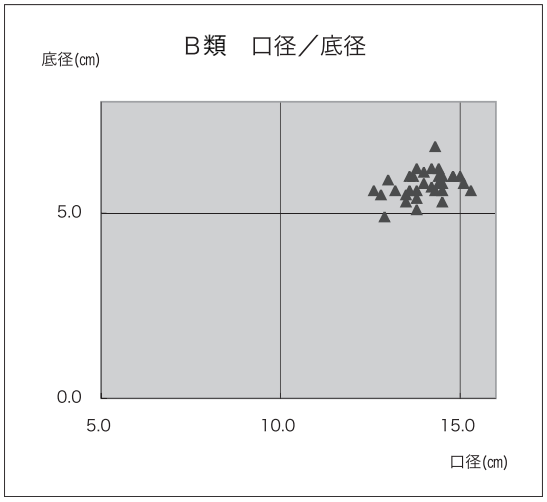
底径の変化

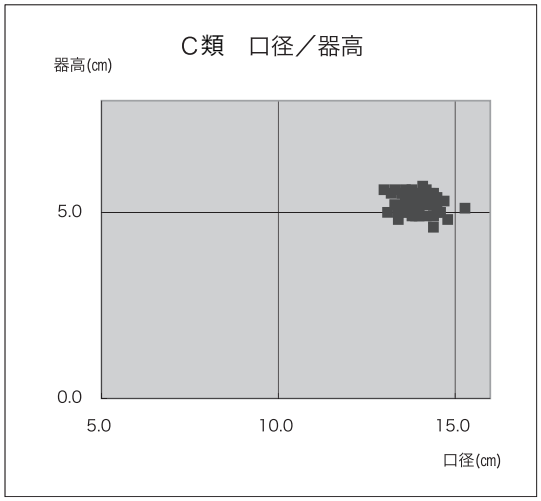
なおここで、底径の変化について補足を加える。C類はA類・B類に較べ口径・器高が小型となるが、底径はむしろ大きくなる。このことは小皿の底径についても同様の指摘ができる。b類は個体数が少ないものの、a類に較べ平均1cm程度大きく、山茶椀C類とほぼ同じ大きさである。底部外面の糸切り痕も2類が大勢を占めることから、小皿a類とb











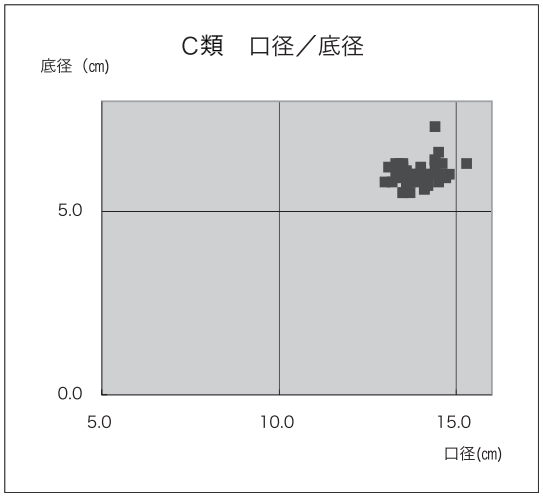


表 13　山茶椀形態別法量分布表

類の間には、山茶椀A・B類とC類と同様の変化が起きたと考えられる。

窯体別出土状況

次に窯の操業順序を推定するために窯体別の出土状況を再度検討すると、SY01ではB類、SY02ではA類とB類、SY03とC類の対応関係が考えられる。山茶椀の形態がA類からB類へ変化すること、またSY02の焚口がSY01よりやや低い位置にあることを考えると、SY02の操業がSY01の操業に先行した可能性が高い。またSY03ではC類を多く焼成している点、焚口の標高が他の2基よりも高い点を考えると、3基のうちでは最も新しいことになる。したがって3基の窯はSY02・SY01・SY03の順に操業したと考えられる。ただし3基の窯で複数の形態が見られることを勘案すると、窯が継続的に操業したと考えることができる。

2 猿投窯におけるI-G-2号窯の位置づけ

猿投窯岩崎地区

I-G-2号窯は猿投窯岩崎地区に位置づけられており、三ヶ峯丘陵周辺で確認された窯跡を含めた検討が必要になる。三ヶ峯丘陵では現在14基の古窯跡が確認されている。このうちNN-32号窯式期からO-10号窯式期に比定される三ヶ峯11号窯、IG-78号窯式期に比定される三ヶ峯3号窯を除き、いわゆる山茶椀・小皿を焼成した窯である。このうち昭和47年に三ヶ峯1号窯・2号窯（宮石、1974年）、平成4年に三ヶ峯8号窯、平成10年に三ヶ峯9号窯・10号窯・12号窯（七原、1999年）についてそれぞれ発掘調査が行われている。また一ノ井1号窯については、平成5年に範囲確認調査が行われている。ただし窯体が確認されたのは燃焼室から焼成室が残存した三ヶ峯1号窯・2号窯と、焼成室上部の床面がわずかに残存した9号窯の3基であり、残る3基は窯体が未確認か、あるいは滅失している。したがって窯体構造から比較できる資料に乏しく、出土遺物の検討に留まる。なお検討資料として、丘陵の末端に位置する堀越古窯の採集資料を加えることにする。

周辺古窯の編年的位置付け

比較的最近調査された三ヶ峯9・10・12号窯および堀越古窯では、山茶椀が藤澤編年第6型式から第7型式、三ヶ峯8号窯は第6型式に位置づけられている。また三ヶ峯1・2号窯は編年確立以前の調査ではあるが、1号窯が13世紀前葉から中葉、2号窯が13世紀後葉に位置づけられており(『長久手町史本文編』)、他と同じ形式に属すると考えられる。さらに遺物の組成も三ヶ峯1・2号窯では蓋・小碗・陶丸が出土しているものの、全体に山茶椀・小皿以外の出土が見られず、猿投窯におけるこの時期の焼成品と一致する。以上のことから、I-G-2号窯は13世紀前半における、三ヶ峯の山茶椀専焼窯の1つとして位置づけることができる。

3 まとめ

I−G−2 号窯は今回の調査の結果、窯体を 3 基確認することができた。窯はいずれも中世東海地方では通有の分焔柱を有する窖窯であり、北方向の谷に向かい構築されている。残存状況は決して良好とは言えないものの、床面の状況から複数回の補修が考えられ、このうち 1 基では焼成室壁面及び分焔柱についても補修が施されていた。前庭部・灰層について平面的に確認できたことは限られるが、灰層の分布が調査区北側へ広がる可能性が高い。

焼成された器種は東海地方南部系山茶椀およびセット関係で焼成された小皿が大半を占め、このほか陶丸の焼成も確認された。山茶椀は 13 世紀前葉から中葉の年代観が与えられる。三ヶ峯丘陵で過去に調査・確認された山茶椀の窯跡もほぼ同時期の焼成とされることから、猿投窯岩崎地区における生産活動の一環として捉えられる内容である。遺物の変遷は漸進的であり、また 1 つの窯で複数の形態が見られることから、継続的な操業を想定することができる。

最後に、調査時における反省点について触れておきたい。今回の調査中、県の試掘トレンチで確認した薄い炭化物層を最近の整地層と誤認し、特に SY01・02 の前庭部から灰層の存在が推定できる区域を重機により掘削した。その結果多くの貴重な情報が失われる形となり、遺構検出にも不自由をもたらすこととなった。今回報告できた事柄はあくまで残された情報をもとに判明した分であり、もとより十全な内容を持つ報告書とは編集者自身考えていない。多くの人々のご叱正が賜れれば幸いである。

参考文献

斎藤　孝正　1988「中世猿投窯の研究―編年に関する一考察―」『名古屋大学文学部研究論集　CI　史学 34』

藤澤　良祐　1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要　Ⅰ』

1995「土に生きる「職人」―東海の山茶椀生産者について」網野善彦・石井進編『中世の風景を読む―3　境界と鄙に生きる人々』新人物往来社

1994「山茶椀研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要　第 3 号』

松澤　和人　1993「広久手古窯跡群の出土遺物―瀬戸窯南部系山茶椀第 7 形式の細分」『(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要　第 1 輯』

岡本　直久　2004「猿投・瀬戸窯山茶椀の編年について」『中世土器・陶器編年研究会記録　東海地方山茶椀研究の現在と課題』科研費・「中世土器・陶器編年研究と流通様相の年代的解明」班

富山大学人文学部考古学研究室　1989『越中上末窯』富山大学考古学研究報告　第 3 冊

服部　　郁　1991『穴田南第 6 号窯跡』瀬戸市教育委員会

伊藤　正人ほか　1998『大高南地区遺跡発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会

七原　惠史　1999『三ヶ峯古窯発掘調査報告書―三ヶ峯第 9 号窯・第 10 号窯・第 12 号窯―』 三ヶ峯第 9 号窯・第 10 号窯・第 12 号窯発掘調査会

長久手町史編纂委員会　1997『長久手町史　資料編五　考古』

2003『長久手町史　本文編』

山下　峰司　1992『穴田南古窯跡群Ⅳ―第 4・5・7 窯跡発掘調査報告』瀬戸市教育委員会

池本　正明　2004『金萩遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター

宮石　宗弘ほか　1974「愛知県立芸術大学三ヶ峯第 1 号・第 2 号古窯発掘調査報告」『愛知県立芸術大学紀要　No.5』

楢崎　彰一　1977「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集 3』小学館

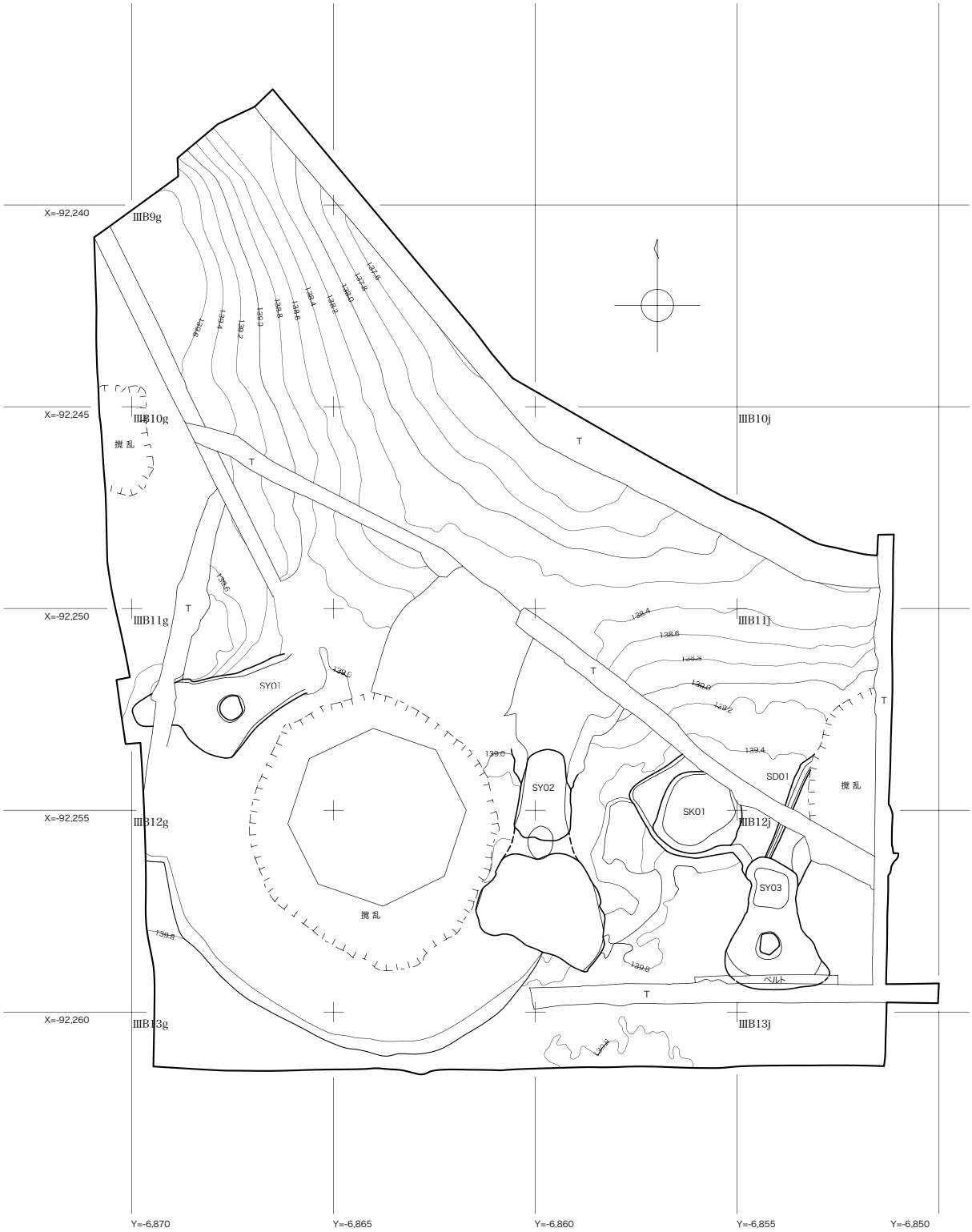
付　表

作業風景

SY02・03 の位置関係

SY03　炭化物

北壁


X=-92,240
X=-92,245
X=-92,250
X=-92,255
X=-92,260
ⅢB9g
ⅢB10g
ⅢB10j
ⅢB11g
ⅢB11j
ⅢB12g
ⅢB12j
ⅢB13g
ⅢB13j
SY01
SY02
SY03
SK01
SD01
攪乱
ベルト
Y=-6,870
Y=-6,865
Y=-6,860
Y=-6,855
Y=-6,850

遺構平面図（1：150）

遺物観察表

図版番号		種　類		出　土　地　点			法　　量					調　整　等				備　　考	登録番号
実測図	写真図版	器種	分類	グリッド	遺構	地点層位	器高	口径	底径	径高指数	口径／底径	マンセル値	色調	底内面	底外面		
1	4	山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	分焔孔	6.1	13.8	6.2	44.2	2.2	5Y7/1	灰白色	B	1		E-001
2		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	分焔孔	5.5	14.8	6.0	37.2	2.5	5Y7/1	灰白色	B	1		E-002
3	4	山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	分焔孔	6.2	14.4	6.2	43.1	2.3	5Y7/1	灰白色	B	1		E-003
4	4	山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	分焔孔	5.5	15.0	6.0	36.7	2.5	5Y7/1	灰白色	B	1		E-004
5	4	山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	分焔孔	5.9	13.8	5.4	42.8	2.6	5Y7/1	灰白色	B	1		E-005
6		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	分焔孔	6.2	13.0	5.9	47.7	2.2	5Y7/1	灰白色	B	1		E-006
7		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	分焔孔	5.7	13.7	6.0	41.6	2.3	N8/	灰白色	B	1	体部内面に降灰	E-007
8		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	分焔孔	6.3	12.6	5.6	50.0	2.3	5Y7/1	灰白色	B	1	体部内面に降灰	E-008
9	4	山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	5.8	13.5	5.3	43.0	2.5	5Y7/1	灰白色	B	1		E-009
10	4	山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	6.3	12.8	5.5	49.2	2.3	5Y7/1	灰白色	B	1		E-010
11		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	5.7	13.5	5.5	42.2	2.5	5Y7/1	灰白色	B	1		E-011
12		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	6.0	14.8	6.0	40.5	2.5	5Y7/1	灰白色	B	1		E-012
13		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	5.9	13.6	6.0	43.4	2.3	5Y7/1	灰白色	B	1		E-013
14		山茶椀	*	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	*	14.8	*	*	*	5Y7/1	灰白色	*	*	体部内面に降灰	E-014
15		山茶椀	*	Ⅲ B11g	SY01	分焔孔	*	13.8	*	*	*	N8/	灰白色	*	*		E-015
16	4	小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	1.7	8.0	4.8	21.3	1.7	5Y7/1	灰白色	a	1	内面全面に降灰	E-016
17	4	小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	2.0	7.9	4.8	25.3	1.6	N8/	灰白色	a	1		E-017
18	4	小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	1.9	8.0	4.2	23.8	1.9	10Y8/1	灰白色	a	1		E-018
19		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	2.0	7.9	4.4	25.3	1.8	7.5Y7/1	灰白色	a	1	内面全面に降灰	E-019
20		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	1.7	8.0	4.6	21.3	1.7	7.5Y7/1	灰白色	a	1	内面全面に降灰	E-020
21	4	小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	1.6	7.8	4.2	20.5	1.9	N8/	灰白色	a	1	内面全面に降灰	E-021
22		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	1.8	7.8	5.0	23.1	1.6	7.5Y7/1	灰白色	a	2		E-022
23	4	小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	2.1	8.1	4.4	25.9	1.8	7.5Y7/1	灰白色	a	1		E-023
24		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	1.9	8.3	4.4	22.9	1.9	7.5Y7/1	灰白色	a	1		E-024
25		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	2.1	8.2	4.5	25.6	1.8	N8/	灰白色	a	1		E-025
26		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	1.7	8.3	4.4	20.5	1.9	5Y8/1	灰白色	a	1		E-026
27		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	1.7	8.2	5.2	20.7	1.6	5Y7/1	灰白色	a	1		E-027
28		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	5.6	14.0	5.8	40.0	2.4	5Y8/1	灰白色	B	1		E-028
29	4	山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	6.0	14.3	6.8	42.0	2.1	5Y7/1	灰白色	B	1		E-029
30		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	5.1	15.3	5.6	33.3	2.7	7.5Y7/1	灰白色	B	1		E-030
31		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	*	13.9	*	*	*	5Y7/1	灰白色	B	1		E-031
32	4	山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	焼成室	5.7	14.2	5.7	40.1	2.5	5Y7/1	灰白色	B	1		E-032
33		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	5.5	15.1	5.8	36.4	2.6	7.5Y7/1	灰白色	B	1		E-033
34	4	山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	5.8	13.8	5.1	42.0	2.7	5Y6/1	灰色	B	1	体部内面に降灰	E-034
35		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	*	14.2	*	*	*	5Y7/1	灰白色	B	1		E-035
36		山茶椀	*	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	5.5	13.8	5.5	39.9	2.5	5Y6/1	灰色	*	*		E-036
37		山茶椀	*	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	5.5	15.8	6.2	34.8	2.5	5Y7/1	灰白色	*	*		E-037
38		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	6.1	14.3	5.6	42.7	2.6	5Y7/1	灰白色	B	1		E-038
39	4	山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	5.7	12.9	4.9	44.2	2.6	7.5Y7/1	灰白色	B	1	体部内面に降灰	E-039
40		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	5.5	14.4	6.0	38.2	2.4	10Y7/1	灰白色	B	1		E-040
41		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	5.6	14.5	5.6	38.6	2.6	10Y8/1	灰白色	B	1		E-041
42		山茶椀	*	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	*	14.4	*	*	*	5Y7/1	灰白色	*	*		E-042
43		山茶椀	*	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	*	14.5	*	*	*	5Y8/1	灰白色	*	*	体部内面に降灰	E-043
44		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	*	*	6.0	*	*	5Y6/1	灰色	B	1	体部内面に降灰	E-044
45		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	*	*	5.6	*	*	10Y7/1	灰白色	B	1	体部内面に降灰	E-045
46		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	*	*	5.6	*	*	7.5Y7/1	灰白色	B	1		E-046
47		山茶椀	B類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	*	*	5.8	*	*	10Y7/1	灰白色	B	1		E-047
48		山茶椀	*	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	5.6	13.7	5.6	40.9	2.4	5Y8/1	灰白色	*	*		E-048
49		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	2.1	8.2	4.9	25.6	1.7	5Y7/1	灰白色	a	1	体部内面に降灰	E-049
50		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	1.9	7.8	4.6	24.4	1.7	5Y7/1	灰白色	a	1	内面全面に降灰	E-050
51	4	小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	1.7	8.5	4.9	20.0	1.7	5Y7/1	灰白色	a	1	内面全面に降灰	E-051
52		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	1.7	7.9	4.7	21.5	1.7	5Y7/1	灰白色	a	1		E-052
53		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	2.0	8.3	5.2	24.1	1.6	10Y7/1	灰白色	a	1		E-053
54	4	小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	2.2	7.8	4.4	28.2	1.8	7.5Y7/1	灰白色	a	1		E-054
55		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	2.0	8.0	4.8	25.0	1.7	10Y7/1	灰白色	a	1		E-055
56	4	小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	1.9	7.9	5.1	24.1	1.5	10Y7/1	灰白色	a	1		E-056
57		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	1.8	8.4	4.6	21.4	1.8	5Y7/1	灰白色	a	1		E-057
58		小皿	a類	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	1.8	7.8	4.8	23.1	1.6	5Y7/1	灰白色	a	1		E-058
59	5	山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.8	14.1	5.4	41.1	2.6	10Y7/1	灰白色	A	1	内面全面に降灰	E-059

図版番号		種　類		出　土　地　点			法　　量					調　整　等				備　　考	登録番号
実測図	写真図版	器種	分類	グリッド	遺構	地点層位	器高	口径	底径	径高指数	口径/底径	マンセル値	色調	底内面	底外面		
60	5	山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.4	14.4	5.4	37.5	2.7	10Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-060
61		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.6	14.8	6.0	37.8	2.5	10Y6/1	灰色	A	1		E-061
62		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	6.0	14.0	5.2	42.9	2.7	10Y7/1	灰白色	A	2	体部内面に降灰、外面に焼台痕	E-062
63		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.9	14.1	6.0	41.8	2.4	5Y8/1	灰白色	A	1	外面に焼台痕	E-063
64		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.5	13.6	5.8	40.4	2.3	10Y7/1	灰白色	A	1		E-064
65		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.7	14.0	5.5	40.7	2.5	7.5Y7/1	灰白色	A	1		E-065
66		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.2	13.9	6.2	37.4	2.2	5Y6/1	灰色	A	1	体部内面に降灰	E-066
67	5	山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.4	14.8	6.0	36.5	2.5	5Y7/1	灰白色	A	1		E-067
68		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.3	14.5	5.6	36.6	2.6	5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-068
69		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.4	14.7	5.2	36.7	2.8	5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-069
70		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.5	14.6	5.8	37.7	2.5	5Y7/1	灰白色	A	2	外面に焼台痕	E-070
71	5	山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.7	14.2	5.5	40.1	2.6	5Y7/1	灰白色	A	1		E-071
72		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.5	14.9	5.6	36.9	2.7	5Y7/1	灰白色	A	1	外面に焼台痕	E-072
73		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.3	14.4	5.5	36.8	2.6	5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰、外面に焼台痕	E-073
74		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.5	14.5	5.5	37.9	2.6	5Y7/1	灰白色	A	1		E-074
75		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.3	14.4	5.5	36.8	2.6	7.5Y7/1	灰白色	A	1		E-075
76		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.6	14.1	5.5	39.7	2.6	7.5Y7/1	灰白色	A	1		E-076
77		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.9	14.0	5.8	42.1	2.4	5Y7/1	灰白色	A	1		E-077
78		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.7	14.0	5.3	40.7	2.6	5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰、外面に焼台痕	E-078
79		山茶椀	*	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	6.2	13.2	5.7	47.0	2.3	5Y7/1	灰白色	*	*		E-079
80		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.2	15.0	5.5	34.7	2.7	5Y7/1	灰白色	A	1		E-080
81		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.5	14.6	5.9	37.7	2.5	5Y7/1	灰白色	A	1	外面に焼台痕	E-081
82		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.2	14.2	5.5	36.6	2.6	7.5Y6/1	灰色	A	1		E-082
83		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.9	14.2	5.8	41.5	2.4	7.5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-083
84		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.4	14.7	5.5	36.7	2.7	5Y7/1	灰白色	A	1	外面に焼台痕	E-084
85	5	小皿	a類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	1.9	7.8	3.9	24.4	2.0	5Y7/1	灰白色	a	1		E-085
86	5	小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	2.1	7.7	4.4	27.3	1.8	5Y7/1	灰白色	a	1		E-086
87		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.7	14.0	5.3	40.7	2.6	5Y7/1	灰白色	A	1		E-087
88	5	山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	6.0	14.1	5.6	42.6	2.5	5Y7/1	灰白色	A	1		E-088
89		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.0	14.6	5.8	34.2	2.5	5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰、外面に焼台痕	E-089
90	5	山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	6.0	14.1	5.5	42.6	2.6	5Y7/1	灰白色	A	1		E-090
91		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.7	13.7	6.0	41.6	2.3	5Y7/1	灰白色	A	2		E-091
92		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.5	14.0	5.0	39.3	2.8	5Y7/1	灰白色	A	2	外面に焼台痕	E-092
93		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.7	14.3	6.0	39.9	2.4	5Y6/1	灰色	A	1	体部内面に降灰	E-093
94		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.4	14.1	6.0	38.3	2.4	5Y6/1	灰色	A	1	体部内面に降灰	E-094
95		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.3	14.3	5.8	37.1	2.5	5Y6/1	灰色	A	1		E-095
96		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.7	14.0	6.0	40.7	2.3	5Y6/1	灰色	A	1		E-096
97		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.7	14.4	5.4	39.6	2.7	5Y7/1	灰白色	A	1		E-097
98		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.4	14.2	5.7	38.0	2.5	5Y6/1	灰色	A	1		E-098
99		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.4	14.4	5.4	37.5	2.7	5Y7/1	灰白色	A	1		E-099
100		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.1	13.9	6.0	36.7	2.3	5Y7/1	灰白色	A	1		E-100
101	5	山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.6	14.9	6.0	37.6	2.5	5Y6/1	灰色	A	1		E-101
102		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.4	14.3	5.8	37.8	2.5	5Y6/1	灰色	A	1	体部内面に降灰	E-102
103		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.6	14.1	5.5	39.7	2.6	N7/	灰白色	A	1		E-103
104		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.4	14.5	5.6	37.2	2.6	5Y8/1	灰白色	A	1		E-104
105		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.7	14.4	5.6	39.6	2.6	N7/	灰白色	A	1		E-105
106		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.9	14.8	5.9	39.9	2.5	5Y8/1	灰白色	A	1		E-106
107		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.4	14.3	6.3	37.8	2.3	5Y8/1	灰白色	A	2		E-107
108		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.9	14.2	5.6	41.5	2.5	5Y8/1	灰白色	A	1	外面に焼台痕	E-108
109		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.7	14.6	5.9	39.0	2.5	N6/	灰色	A	1	体部内面に降灰	E-109
110		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.8	14.8	5.8	39.2	2.6	N6/	灰色	A	1		E-110
111		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	燃焼室	5.2	14.6	6.0	35.6	2.4	7.5Y7/1	灰白色	A	1		E-111
112		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	燃焼室	5.8	14.2	5.7	40.8	2.5	7.5Y7/1	灰白色	A	1		E-112
113		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.3	14.3	5.4	37.1	2.6	7.5Y7/1	灰白色	A	1		E-113
114		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.6	14.0	5.8	40.0	2.4	7.5Y7/1	灰白色	A	1	外面に焼台痕	E-114
115		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	6.0	13.2	5.8	45.5	2.3	5Y8/1	灰白色	A	1	外面に焼台痕	E-115
116		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.5	13.9	6.2	39.6	2.2	5Y6/1	灰色	A	1	体部内面に降灰	E-116

図版番号		種　類		出　土　地　点			法　　量					調　整　等				備　　考	登録番号
実測図	写真図版	器種	分類	グリッド	遺構	地点層位	器高	口径	底径	径高指数	口径／底径	マンセル値	色調	底内面	底外面		
117		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.4	14.9	5.8	36.2	2.6	7.5Y8/1	灰白色	A	1		E-117
118		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.5	13.9	6.2	39.6	2.2	5Y6/1	灰色	A	1		E-118
119		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	5.6	14.2	6.2	39.4	2.3	7.5Y6/1	灰色	A	1	体部内面に降灰	E-119
120	5	小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	2.1	7.8	4.5	26.9	1.7	5Y7/1	灰白色	a	1	内面全面に降灰	E-120
121		小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	1.9	8.3	4.1	22.9	2.0	5Y7/1	灰白色	a	1		E-121
122	5	小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	1.6	7.3	4.2	21.9	1.7	7.5Y7/1	灰白色	a	1		E-122
123		小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	2.0	8.5	4.6	23.5	1.8	5Y7/1	灰白色	a	1	内面全面に降灰	E-123
124		小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	1.8	7.6	4.6	23.7	1.7	5Y7/1	灰白色	a	1		E-124
125		小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	1.9	7.6	4.2	25.0	1.8	5Y7/1	灰白色	a	1		E-125
126	5	小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	1.9	8.0	4.5	23.8	1.8	5Y7/1	灰白色	a	1		E-126
127		小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	1.9	8.6	4.2	22.1	2.0	5Y7/1	灰白色	a	1		E-127
128		小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	2.0	8.1	4.2	24.7	1.9	5Y7/1	灰白色	a	1	内面全面に降灰	E-128
129	5	小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	1.9	8.1	4.8	23.5	1.7	5Y7/1	灰白色	a	1		E-129
130		小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	1.7	7.9	4.5	21.5	1.8	5Y7/1	灰白色	a	1		E-130
131		小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	2.0	8.6	4.2	23.3	2.0	5Y7/1	灰白色	a	1		E-131
132		小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	1.7	7.5	4.2	22.7	1.8	5Y7/1	灰白色	a	1		E-132
133		小皿	a類	Ⅲ B11i	SY02	燃焼室	1.8	7.9	4.8	22.8	1.6	5Y7/1	灰白色	a	1	内面全面に降灰	E-133
134		小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	1.7	8.0	4.0	21.3	2.0	5Y7/1	灰白色	a	1		E-134
135	5	小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	1.6	8.0	4.0	20.0	2.0	5Y7/1	灰白色	a	1	内面全面に降灰	E-135
136		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.1	15.2	5.6	33.6	2.7	5Y7/1	灰白色	A	1		E-136
137		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.4	13.9	6.0	38.8	2.3	5Y7/1	灰白色	A	1		E-137
138		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.7	13.6	6.0	41.9	2.3	10Y7/1	灰白色	A	1		E-138
139		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.8	13.6	5.3	42.6	2.6	7.5Y7/1	灰白色	A	1		E-139
140	5	山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.5	14.0	5.5	39.3	2.5	10Y7/1	灰白色	A	1		E-140
141		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.9	14.3	5.7	41.3	2.5	5Y8/1	灰白色	A	1	外面に焼台痕	E-141
142		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.0	14.5	6.0	34.5	2.4	5Y8/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-142
143		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.9	13.2	5.3	44.7	2.5	N7/	灰白色	A	1	内面全面に降灰	E-143
144		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.6	14.6	5.7	38.4	2.6	N7/	灰白色	A	1		E-144
145		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.6	14.3	5.8	39.2	2.5	5Y7/1	灰白色	A	1		E-145
146		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.9	14.0	6.5	42.1	2.2	5Y8/1	灰白色	A	1		E-146
147		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.3	14.8	6.0	35.8	2.5	5Y7/1	灰白色	A	2	体部内面に降灰	E-147
148		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.6	14.4	5.8	38.9	2.5	5Y7/1	灰白色	A	1		E-148
149		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.8	14.2	5.8	40.8	2.4	5Y8/1	灰白色	A	1	外面に焼台痕	E-149
150		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.1	14.7	5.4	34.7	2.7	5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-150
151		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	5.6	14.0	5.0	40.0	2.8	5Y7/1	灰白色	A	1		E-151
152		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.4	14.4	5.2	37.5	2.8	5Y8/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-152
153		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	4.9	13.8	5.7	35.5	2.4	5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-153
154		山茶椀	A類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	*	13.8	*	*	*	5Y6/1	灰色	A	1	体部内面に降灰	E-154
155	5	山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.6	14.2	5.3	39.4	2.7	10Y6/1	灰色	A	1	体部内面に降灰	E-155
156		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	6.1	13.6	5.0	44.9	2.7	7.5Y7/1	灰白色	A	1	外面に焼台痕	E-156
157		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.1	14.3	5.7	35.7	2.5	5Y8/1	灰白色	A	1		E-157
158		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.4	14.8	6.3	36.5	2.3	5Y8/1	灰白色	A	1		E-158
159		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.5	13.8	5.6	39.9	2.5	10Y6/1	灰色	A	1		E-159
160		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.4	15.2	5.9	35.5	2.6	7.5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-160
161	5	山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.5	13.7	5.7	40.1	2.4	7.5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-161
162		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.5	14.1	5.9	39.0	2.4	7.5Y6/1	灰色	A	1		E-162
163		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.8	13.9	5.7	41.7	2.4	7.5Y7/1	灰白色	A	1		E-163
164		山茶椀	A類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	5.4	14.5	5.7	37.2	2.5	10Y6/1	灰色	A	1		E-164
165		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.5	14.2	6.0	38.7	2.4	10Y7/1	灰白色	A	1		E-165
166		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.8	14.2	5.8	40.8	2.4	10Y6/1	灰色	A	1		E-166
167		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.5	14.2	4.9	38.7	2.9	10Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-167
168		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.8	13.0	5.4	44.6	2.4	10Y7/1	灰白色	A	1	体部内面と底部内面一部に降灰	E-168
169		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.8	14.6	5.6	39.7	2.6	7.5Y7/1	灰白色	A	1		E-169
170		山茶椀	A類	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	5.7	14.5	5.5	39.3	2.6	10Y7/1	灰白色	A	1		E-170
171	5	小皿	a類	Ⅲ B12i	SY02	焼成室	1.8	8.4	4.2	21.4	2.0	5Y6/1	灰色	a	1		E-171
172		小皿	a類	Ⅲ B12h	SY02	焼成室	1.7	7.4	4.2	23.0	1.8	5Y6/1	灰色	a	1		E-172
173	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.5	14.4	6.0	38.2	2.4	7.5Y6/1	灰色	C	2		E-173
174	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.0	14.5	5.8	34.5	2.5	10Y7/1	灰白色	C	2		E-174
175		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	4.9	14.0	6.2	35.0	2.3	7.5Y7/1	灰白色	C	2	外面に焼台痕	E-175
176		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.4	14.1	5.6	38.3	2.5	10Y7/1	灰白色	C	2		E-176

図版番号		種　類		出　土　地　点			法　　量					調　整　等				備　　考	登録番号
実測図	写真図版	器種	分類	グリッド	遺構	地点層位	器高	口径	底径	径高指数	口径／底径	マンセル値	色調	底内面	底外面		
177		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.3	13.7	5.8	38.7	2.4	5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面上半のみ降灰	E-177
178		山茶椀	A類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.2	13.9	6.5	37.4	2.1	7.5Y7/1	灰白色	A	2	体部内面に降灰	E-178
179		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.6	13.8	5.9	40.6	2.3	5Y8/1	灰白色	C	2		E-179
180		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.3	13.7	6.0	38.7	2.3	5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰、外面に焼台痕	E-180
181		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.5	13.9	5.8	39.6	2.4	7.5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面上半のみ降灰	E-181
182		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.2	13.9	6.0	37.4	2.3	7.5Y7/1	灰白色	C	2	外面に焼台痕	E-182
183		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.1	15.3	6.3	33.3	2.4	5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面上半のみ降灰	E-183
184		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.5	14.4	6.0	38.2	2.4	5Y7/1	灰白色	C	2		E-184
185		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	4.9	14.4	6.4	34.0	2.3	7.5Y6/1	灰色	C	2		E-185
186		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.7	14.1	5.9	40.4	2.4	5Y6/1	灰色	C	2		E-186
187		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.1	14.5	6.6	35.2	2.2	5Y6/1	灰色	C	2		E-187
188	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.5	13.5	5.5	40.7	2.5	5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面上半のみ降灰	E-188
189		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	4.9	13.9	6.0	35.3	2.3	5Y7/1	灰白色	C	2		E-189
190		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.6	14.2	5.8	39.4	2.4	5Y7/1	灰白色	C	2		E-190
191		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	4.9	13.8	6.0	35.5	2.3	5Y7/1	灰白色	C	2	外面に焼台痕	E-191
192		山茶椀	D2	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	4.8	14.4	6.0	33.3	2.4	5Y7/1	灰白色	D	2	体部内面に降灰、外面に焼台痕	E-192
193		山茶椀	*	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.7	13.0	5.6	43.8	2.3	7.5Y7/1	灰白色	*	*	体部内面に降灰、外面に焼台痕	E-193
194		山茶椀	A類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.2	14.6	5.7	35.6	2.6	5Y7/1	灰白色	A	2		E-194
195		山茶椀	*	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	4.4	13.7	6.9	32.1	2.0	7.5Y7/1	灰白色	*	*	外面に焼台痕	E-195
196		山茶椀	A類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	4.8	14.1	6.0	34.0	2.4	7.5Y7/1	灰白色	A	2	外面に焼台痕	E-196
197		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.3	13.6	5.9	39.0	2.3	7.5Y7/1	灰白色	C	2		E-197
198		山茶椀	*	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.3	13.5	6.6	39.3	2.0	7.5Y8/1	灰白色	*	*	体部内面に降灰	E-198
199		山茶椀	A類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.8	13.3	6.1	43.6	2.2	7.5Y7/1	灰白色	A	2	体部内面に降灰	E-199
200		山茶椀	A類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.4	13.1	5.8	41.2	2.3	7.5Y7/1	灰白色	A	2	外面に焼台痕	E-200
201		山茶椀	*	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	*	14.6	*	*	*	7.5Y7/1	灰白色	*	*		E-201
202		山茶椀	*	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	*	14.6	*	*	*	2.5Y8/1	灰白色	*	*	体部内面に降灰	E-202
203		山茶椀	*	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	*	14.5	*	*	*	5Y7/1	灰白色	*	*		E-203
204		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	*	*	6.3	*	*	5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰	E-204
205		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	*	*	6.0	*	*	7.5Y7/1	灰白色	C	2		E-205
206		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	*	*	5.7	*	*	5Y8/1	灰白色	C	2		E-206
207		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	*	*	5.7	*	*	7.5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰	E-207
208	6	小皿	b類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	1.8	8.5	5.4	21.2	1.6	5Y7/1	灰白色	b	2		E-208
209	6	小皿	b類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	2.1	8.3	5.2	25.3	1.6	7.5Y7/1	灰白色	b	2		E-209
210	6	小皿	b類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	1.8	8.3	5.9	21.7	1.4	7.5Y7/1	灰白色	b	2	内面全面に降灰	E-210
211		小皿	*	Ⅲ B12j	SY03	分焔孔	1.4	7.6	4.7	18.4	1.6	7.5Y7/1	灰白色	*	*		E-211
212		小皿	*	Ⅲ B12j	SY03	分焔孔	1.3	8.2	6.0	15.9	1.4	7.5Y7/1	灰白色	*	*		E-212
213		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.1	13.4	6.0	38.1	2.2	7.5Y7/1	灰白色	C	2	外面に焼台痕	E-213
214	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.3	13.6	5.6	39.0	2.4	7.5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面上半のみ降灰	E-214
215		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.6	13.6	6.0	41.2	2.3	5Y7/1	灰白色	C	2		E-215
216	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.0	13.4	6.3	37.3	2.1	5Y7/1	灰白色	C	2	外面に焼台痕	E-216
217		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.5	13.5	5.5	40.7	2.5	5Y7/1	灰白色	C	2		E-217
218		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.3	13.6	5.8	39.0	2.3	5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面上半のみ降灰	E-218
219		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.2	14.4	6.4	36.1	2.3	5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰	E-219
220	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.2	13.7	5.8	38.0	2.4	5Y7/1	灰白色	C	2		E-220
221	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.5	14.1	6.0	39.0	2.4	5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰	E-221
222		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.5	14.1	5.6	39.0	2.5	5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰	E-222
223		山茶椀	A類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	4.7	14.0	6.2	33.6	2.3	5Y7/1	灰白色	A	2		E-223
224		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.2	13.6	6.1	38.2	2.2	5Y7/1	灰白色	C	2	内面全面に降灰	E-224
225		山茶椀	C類	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	5.0	13.1	6.2	38.2	2.1	5Y7/1	灰白色	C	2		E-225
226		山茶椀	*	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	4.9	13.0	5.6	37.7	2.3	5Y6/1	灰色	*	*		E-226
227		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.0	13.5	6.3	37.0	2.1	5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰	E-227
228		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.3	14.4	6.0	36.8	2.4	5Y7/1	灰白色	C	2		E-228
229	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.4	13.7	5.5	39.4	2.5	5Y6/1	灰色	C	2		E-229

図版番号		種　類		出　土　地　点			法　　量					調　整　等				備　　考	登録番号
実測図	写真図版	器種	分類	グリッド	遺構	地点層位	器高	口径	底径	径高指数	口径／底径	マンセル値	色調	底内面	底外面		
230	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.2	13.3	6.3	39.1	2.1	5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰	E-230
231		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.3	14.1	5.9	37.6	2.4	10Y6/1	灰色	C	2		E-231
232		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.0	14.0	6.0	35.7	2.3	10Y6/1	灰色	C	2		E-232
233		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.1	13.4	6.0	38.1	2.2	10Y6/1	灰色	C	2		E-233
234		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.2	14.2	5.7	36.6	2.5	10Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰	E-234
235	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.1	13.6	5.7	37.5	2.4	10Y7/1	灰白色	C	2	体部内面上半のみ降灰	E-235
236		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		4.8	13.4	5.9	35.8	2.3	5Y6/1	灰色	C	2		E-236
237		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.2	14.1	6.0	36.9	2.4	7.5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面上半のみ降灰	E-237
238	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		4.9	14.2	5.8	34.5	2.4	10Y7/1	灰白色	C	2		E-238
239		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.4	14.5	6.0	37.2	2.4	7.5Y6/1	灰色	C	2		E-239
240		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		4.9	14.4	6.2	34.0	2.3	5Y6/1	灰色	C	2		E-240
241	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.0	13.8	5.9	36.2	2.3	7.5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰	E-241
242		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.6	13.3	6.0	42.1	2.2	5Y7/1	灰白色	C	2		E-242
243		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.5	14.3	6.0	38.5	2.4	7.5YR7/1	明褐灰色	C	2		E-243
244	6	山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.4	14.0	6.0	38.6	2.3	5Y8/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰、外面に焼台痕	E-244
245		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		5.3	14.7	5.9	36.1	2.5	7.5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面上半のみ降灰	E-245
246		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		4.6	14.4	7.3	31.9	2.0	7.5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰	E-246
247		山茶椀	*	Ⅲ B12i	SK01		*	14.4	*	*	*	7.5Y7/1	灰白色	*	*		E-247
248		山茶椀	*	Ⅲ B12i	SK01		*	13.8	*	*	*	7.5YR7/1	明褐灰色	*	*		E-248
249		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		*	*	6.0	*	*	7.5Y7/1	灰白色	C	2		E-249
250		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		*	*	6.1	*	*	7.5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰	E-250
251		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		*	*	5.9	*	*	7.5Y7/1	灰白色	C	2		E-251
252		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		*	*	6.0	*	*	2.5Y7/1	灰白色	C	2		E-252
253		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		*	*	5.8	*	*	7.5Y7/1	灰白色	C	2	体部内面に降灰	E-253
254		山茶椀	C類	Ⅲ B12i	SK01		*	*	5.8	*	*	7.5Y7/1	灰白色	C	2		E-254
255	5	山茶椀	B類	Ⅲ B10i		北壁53層	5.2	14.2	6.2	36.6	2.3	5Y7/1	灰白色	B	1		E-255
256		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁53層	6.1	13.4	5.4	45.5	2.5	5Y7/1	灰白色	*	*		E-256
257		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁53層	*	14.0	*	*	*	10BG7/1	明青灰色	*	*		E-257
258		山茶椀	A類			北壁53層	5.8	13.7	5.8	42.3	2.4	N7/	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-258
259	5	山茶椀	B類			北壁53層	5.6	14.5	5.3	38.6	2.7	N7/	灰白色	B	1	体部内面に降灰	E-259
260	5	山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁53層	5.8	14.2	5.8	40.8	2.4	10Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-260
261		山茶椀	B類	Ⅲ B10i		北壁53層	*	*	6.4	*	*	10BG7/1	明青灰色	B	1	体部内面に降灰	E-261
262		小皿	*	Ⅲ B10i		北壁53層	*	*	*	*	*	5GY8/1	灰白色	*	*		E-262
263		山茶椀	*	Ⅲ B9g		北壁64層	5.7	12.6	5.0	45.2	2.5	5GY8/1	灰白色	*	*		E-263
264		山茶椀	B類	Ⅲ B9g		北壁64層	*	*	5.4	0.0	*	10Y7/1	灰白色	B	1	内面全面に降灰	E-264
265		山茶椀	A類	Ⅲ B9g		北壁64層	*	*	5.0	0.0	*	7.5Y7/1	灰白色	A	1		E-265
266		小皿	a類	Ⅲ B9g		北壁64層	1.6	7.4	4.0	21.6	1.9	5Y7/1	灰白色	a	1		E-266
267	5	小皿	a類	Ⅲ B9g		北壁64層	1.5	6.7	3.5	22.4	1.9	7.5Y7/1	灰白色	a	1		E-267
268		小皿	a類	Ⅲ B9g		北壁64層	1.6	6.0	3.3	26.7	1.8	7.5Y7/1	灰白色	a	2		E-268
269		山茶椀	*	Ⅲ B10h		北壁67層	*	15.4	*	*	*	7.5Y7/1	灰白色	*	*		E-269
270		山茶椀	*	Ⅲ B10h		北壁67層	*	13.1	*	*	*	10Y7/1	灰白色	*	*		E-270
271		山茶椀	*	Ⅲ B9g		北壁67層	*	14.2	*	*	*	10BG7/1	明青灰色	*	*		E-271
272		山茶椀	*	Ⅲ B10h		北壁67層	*	14.8	*	*	*	7.5Y7/1	灰白色	*	*		E-272
273		山茶椀	*	Ⅲ B10h		北壁67層	*	14.8	*	*	*	2.5GY7/1	明オリーブ灰色	*	*		E-273
274		山茶椀	A類	Ⅲ B10h		北壁67層	*	*	6.3	*	*	10G7/1	明緑灰色	A	2		E-274
275	5	小皿	a類	Ⅲ B10h		北壁67層	1.8	8.2	4.5	22.0	1.8	N7/	灰白色	a	1		E-275
276		小皿	a類	Ⅲ B10h		北壁67層	1.6	7.6	3.9	21.1	1.9	N7/	灰白色	a	1		E-276
277		山茶椀	B類	Ⅲ B9g		北壁82層	5.8	14.0	6.1	41.4	2.3	5BG7/1	明青灰色	B	1		E-277
278	4	山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁45層	5.7	13.4	5.8	42.5	2.3	5Y7/1	灰白色	A	1	内面全面に降灰	E-278
279		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁45層	5.5	14.6	6.0	37.7	2.4	5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-279
280		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁45層	5.2	14.0	6.0	37.1	2.3	5Y7/1	灰白色	A	2	外面に焼台痕	E-280
281		山茶椀	B類	Ⅲ B10i		北壁45層	5.2	14.5	5.8	35.9	2.5	5Y7/1	灰白色	B	1		E-281
282		山茶椀	B類	Ⅲ B10i		北壁45層	*	*	6.0	*	*	5Y8/1	灰白色	B	1	体部内面に降灰	E-282
283		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁45層	*	*	6.0	*	*	5Y8/1	灰白色	A	1	内面全面に降灰	E-283
284		小皿	a類	Ⅲ B10i		北壁45層	1.8	8.2	4.5	22.0	1.8	5Y7/1	灰白色	a	1		E-284
285		小皿	a類	Ⅲ B10i		北壁45層	1.7	8.4	4.8	20.2	1.8	5Y7/1	灰白色	a	1	外面に焼台痕	E-285

図版番号		種　類		出　土　地　点			法　　量					調　整　等				備　　考	登録番号
実測図	写真図版	器種	分類	グリッド	遺構	地点層位	器高	口径	底径	径高指数	口径／底径	マンセル値	色調	底内面	底外面		
286		小皿	a類	Ⅲ B10i		北壁45層	1.7	7.8	4.2	21.8	1.9	10Y7/1	灰白色	a	1	外面に焼台痕	E-286
287		小皿	a類	Ⅲ B10i		北壁45層	1.6	8.6	5.0	18.6	1.7	5Y7/1	灰白色	a	1	外面に焼台痕	E-287
288	4	山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁46層	5.6	13.0	5.7	43.1	2.3	10Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-288
289		山茶椀	B類	Ⅲ B10i		北壁46層	5.9	13.6	5.6	43.4	2.4	5Y7/1	灰白色	B	1	体部内面に降灰、外面に焼台痕	E-289
290		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁46層	5.1	13.8	5.6	37.0	2.5	5Y7/1	灰白色	A	1		E-290
291		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁46層	5.9	13.5	5.7	43.7	2.4	5Y7/1	灰白色	A	1		E-291
292		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁46層	5.4	13.3	5.2	40.6	2.6	5Y8/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-292
293		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁46層	6.6	14.1	6.0	46.8	2.4	5Y7/1	灰白色	A	1		E-293
294		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁46層	6.4	13.8	6.3	46.4	2.2	5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-294
295		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁46層	5.2	14.0	5.6	37.1	2.5	5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-295
296		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁46層	5.9	14.0	5.9	42.1	2.4	5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-296
297		山茶椀	B類	Ⅲ B10i		北壁46層	5.4	13.8	5.6	39.1	2.5	5Y7/1	灰白色	B	2	外面に焼台痕	E-297
298		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	5.3	15.2	6.0	34.9	2.5	10Y7/1	灰白色	*	*	外面に焼台痕	E-298
299		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	*	14.5	*	*	*	10Y7/1	灰白色	*	*		E-299
300		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	*	14.6	*	*	*	5Y7/1	灰白色	*	*	体部内面に降灰	E-300
301		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	*	13.6	*	*	*	5Y8/1	灰白色	*	*	体部内面に降灰	E-301
302		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	*	14.9	*	*	*	10Y8/1	灰白色	*	*	体部内面に降灰	E-302
303		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	*	14.7	*	*	*	5Y7/1	灰白色	*	*		E-303
304		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	*	13.8	*	*	*	5Y7/1	灰白色	*	*		E-304
305		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	*	14.0	*	*	*	N8/	灰白色	*	*	体部内面に降灰	E-305
306		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	*	14.9	*	*	*	10Y7/1	灰白色	*	*	体部内面に降灰	E-306
307		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	*	15.5	*	*	*	10Y8/1	灰白色	*	*	体部内面に降灰	E-307
308		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	5.2	13.9	5.0	37.4	2.8	5Y7/1	灰白色	*	*		E-308
309		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	*	14.8	*	*	*	10Y7/1	灰白色	*	*		E-309
310		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁46層	*	*	5.8	*	*	10Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-310
311		山茶椀	B類	Ⅲ B10i		北壁46層	*	*	5.8	*	*	5Y7/1	灰白色	B	1		E-311
312		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	*	14.8	*	*	*	10Y7/1	灰白色	*	*	外面に焼台痕	E-312
313		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁46層	*	*	5.8	*	*	5Y7/1	灰白色	A	1		E-313
314		山茶椀	B類	Ⅲ B10i		北壁46層	*	*	5.8	*	*	5Y7/1	灰白色	B	1		E-314
315		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁46層	*	*	5.6	*	*	5Y8/1	灰白色	A	1		E-315
316		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁46層	*	14.8	*	*	*	10Y7/1	灰白色	*	*	体部内面に降灰	E-316
317		小皿	a類	Ⅲ B10i		北壁46層	2.2	7.2	3.9	30.6	1.8	5Y7/1	灰白色	a	1		E-317
318		小皿	a類	Ⅲ B10i		北壁46層	2.1	8.1	4.2	25.9	1.9	5Y7/1	灰白色	a	1		E-318
319	4	小皿	a類	Ⅲ B10i		北壁46層	1.8	8.1	4.5	22.2	1.8	5Y7/1	灰白色	a	1		E-319
320		小皿	a類	Ⅲ B10i		北壁46層	1.6	7.7	4.4	20.8	1.8	5Y7/1	灰白色	a	1	体部内面に降灰	E-320
321		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁47層	5.4	14.3	5.7	37.8	2.5	5Y7/1	灰白色	A	1		E-321
322		山茶椀	B類	Ⅲ B10i		北壁47層	5.2	14.5	6.0	35.9	2.4	5Y7/1	灰白色	B	1	体部内面に降灰	E-322
323		山茶椀	B類	Ⅲ B10i		北壁47層	5.7	13.2	5.6	43.2	2.4	5Y7/1	灰白色	B	1	外面に焼台痕	E-323
324		山茶椀	B類	Ⅲ B10i		北壁47層	5.4	14.4	5.8	37.5	2.5	5B7/1	明青灰色	B	1	体部内面に降灰、外面に焼台痕	E-324
325		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁47層	6.4	12.7	6.0	50.4	2.1	5Y8/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-325
326		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁47層	5.4	13.8	5.9	39.1	2.3	5Y7/1	灰白色	A	1		E-326
327	4	山茶椀	C類	Ⅲ B10i		北壁47層	5.6	13.0	5.8	43.1	2.2	5Y7/1	灰白色	C	2	外面に焼台痕	E-327
328		山茶椀	D類	Ⅲ B10i		北壁47層	5.7	13.4	5.8	42.5	2.3	10Y7/1	灰白色	D	1	体部内面に降灰	E-328
329		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁91層	*	14.2	*	*	*	7.5Y7/1	灰白色	*	*	体部内外面に降灰	E-329
330	4	小皿	a類	Ⅲ B10i		北壁47層	1.8	7.9	4.0	22.8	2.0	10Y7/1	灰白色	a	1	体部内面に降灰	E-330
331		小皿	a類	Ⅲ B10i		北壁47層	2.0	8.0	4.5	25.0	1.8	10Y7/1	灰白色	a	1	体部内面に降灰	E-331
332		小皿	a類	Ⅲ B10i		北壁47層	1.9	7.8	4.5	24.4	1.7	10Y7/1	灰白色	a	1		E-332
333		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁8層	5.2	14.0	6.4	37.1	2.2	10Y7/1	灰白色	*	*		E-333
334		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁8層	5.2	14.6	6.7	35.6	2.2	10Y7/1	灰白色	*	*		E-334
335		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁8層	5.1	13.9	6.0	36.7	2.3	7.5Y7/1	灰白色	*	*		E-335
336		小皿	b類	Ⅲ B10i		北壁8層	1.8	8.6	5.8	20.9	1.5	7.5Y7/1	灰白色	b	2	内面全面に降灰	E-336
337		山茶椀	A類	Ⅲ B11j		東壁12層	5.1	14.0	6.6	36.4	2.1	10Y7/1	灰白色	A	2	体部内面に降灰	E-337
338		山茶椀	A類	Ⅲ B11j		東壁12層	*	*	6.8	*	*	10Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-338
339	6	山茶椀	D類	Ⅲ B11j		東壁12層	*	*	6.3	*	*	7.5Y7/1	灰白色	D	2	体部内面に降灰	E-339
340		山茶椀	A類	Ⅲ B11j		東壁12層	*	*	6.0	*	*	10Y7/1	灰白色	A	2	内面全面に降灰	E-340
341		山茶椀	A類	Ⅲ B11j		東壁12層	*	*	6.8	*	*	7.5Y7/1	灰白色	A	2	体部内面に降灰	E-341
342		山茶椀	*	Ⅲ B11j		東壁12層	*	14.0	*	*	*	10Y7/1	灰白色	*	*		E-342
343		山茶椀	*	Ⅲ B10h		北壁18層	*	16.6	*	*	*	7.5Y7/1	灰白色	*	*		E-343
344		山茶椀	C類	Ⅲ B10h		北壁18層	*	14.5	*	*	*	7.5Y7/1	灰白色	C	2	外面に焼台痕	E-344

図版番号		種　類		出　土　地　点			法　　量					調　整　等				備　　考	登録番号
実測図	写真図版	器種	分類	グリッド	遺構	地点層位	器高	口径	底径	径高指数	口径／底径	マンセル値	色調	底内面	底外面		
345		山茶椀	C類	Ⅲ B10h		北壁18層	5.5	13.2	5.8	41.7	2.3	7.5Y7/1	灰白色	C	2	外面に焼台痕	E-345
346		山茶椀	*	Ⅲ B10h		北壁18層	4.7	14.0	6.0	33.6	2.3	10Y8/1	灰白色	*	*		E-346
347		山茶椀	*	Ⅲ B10h		北壁18層	*	13.2	*	*	*	10Y7/1	灰白色	*	*		E-347
348		山茶椀	*	Ⅲ B10h		北壁21層	5.2	14.3	6.0	36.4	2.4	7.5Y7/1	灰白色	*	*		E-348
349		山茶椀	A類	Ⅲ B10h		北壁21層	5.0	13.6	6.5	36.8	2.1	7.5Y7/1	灰白色	A	2		E-349
350		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁21層	*	15.9	*	*	*	10Y7/1	灰白色	*	*	外面に焼台痕	E-350
351		山茶椀	*	Ⅲ B10h		北壁21層	*	14.0	*	*	*	7.5Y7/1	灰白色	*	*		E-351
352		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁21層	*	14.3	*	*	*	7.5Y7/1	灰白色	*	*		E-352
353		小皿	b類	Ⅲ B10h		北壁21層	1.8	8.5	5.1	21.2	1.7	7.5Y7/1	灰白色	b	2	体部内面に降灰	E-353
354	6	小皿	a類	Ⅲ B10h		北壁21層	1.8	8.0	4.7	22.5	1.7	7.5Y7/1	灰白色	a	1		E-354
355		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁30層	5.8	13.8	5.5	42.0	2.5	7.5Y6/1	灰色	A	1	体部内面に降灰	E-355
356		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁30層	5.3	15.0	5.9	35.3	2.5	10Y7/1	灰白色	A	1	外面に焼台痕	E-356
357		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁30層	5.7	13.6	5.0	41.9	2.7	10Y7/1	灰白色	A	2		E-357
358		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁30層	5.0	14.7	5.6	34.0	2.6	10Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-358
359		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁30層	5.2	13.9	5.5	37.4	2.5	7.5Y6/1	灰色	A	1		E-359
360		山茶椀	A類	Ⅲ B10i		北壁30層	*	*	5.6	*	*	7.5Y7/1	灰白色	A	1	体部内面に降灰	E-360
361		釉着		Ⅲ B11g	SY01	燃焼室											E-361
362		釉着		Ⅲ B12j	SY03	燃焼室											E-362
363	7	釉着	*	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	*	*	*	*	*			*	*		E-363
364	7	釉着	*	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	*	*	*	*	*			*	*		E-364
365		釉着		Ⅲ B10i		T04											E-365
366		釉着		Ⅲ B11h		機械掘削											E-366
367	7	焼　台・山茶椀	*	Ⅲ B12i	SY02	燃焼室	*	*	*	*	*	2.5Y8/1	灰白色	*	*	体部内面に降灰	E-367
368		焼　台・山茶椀	*	Ⅲ B11i	SY02	焼成室	*	*	*	*	*	2.5Y8/1	灰白色	*	*	体部外面に降灰	E-368
369	7	蓋・陶丸	*	Ⅲ B11g	SY01	燃焼室	*	*	*	*	*	5Y8/1	灰白色	B	*	外面全面と体部内面に降灰	E-369
370	7	蓋	*	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室						7.5Y7/1	灰白色	*	*	内外面全面に降灰	E-370
371	7	山茶椀・蓋	*	Ⅲ B12j	SY03	燃焼室	6.4	14.5	6.3	*	*	2.5Y8/1	灰白色	C	*	外面全面に降灰	E-371
372	7	陶丸	*	Ⅲ B11j		東壁12層	*	*	*	*	*	N8/	灰白色	*	*		E-372
373		山茶椀	*	Ⅲ B10i		北壁45層	6.1	15.4	5.8	39.6	2.7	5Y7/1	灰白色	*	*		E-373
374	7	無台椀	*	Ⅲ B10i		機械掘削	*	*	8.0	*	*	5Y7/1	灰白色	*	*		E-374
375	7	伊勢型鍋	*	Ⅲ B11g		検出Ⅱ	*	*23.2	*	*	*	7.5YR8/6	浅黄橙色	*	*		E-375
376	7	甕	*	Ⅲ B11j		T03	*	*	*	*	*	5B5/1	青灰色	*	*		E-376

遺構一覧表

窯体（SY）

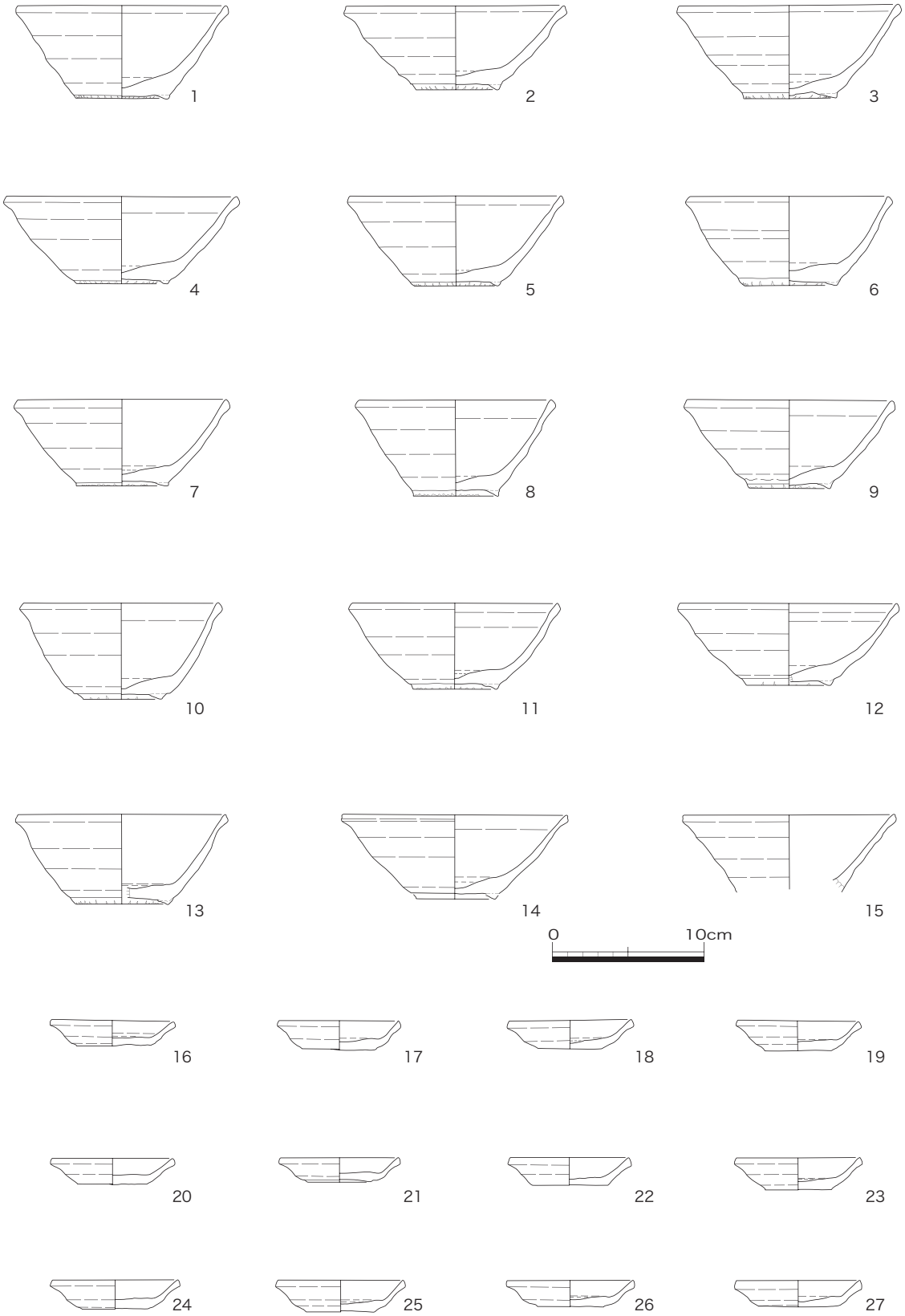
遺構番号	長（m）	最大幅（m）
SY01	4.05	2.16
SY02	5.30	3.12
SY03	3.20	2.48

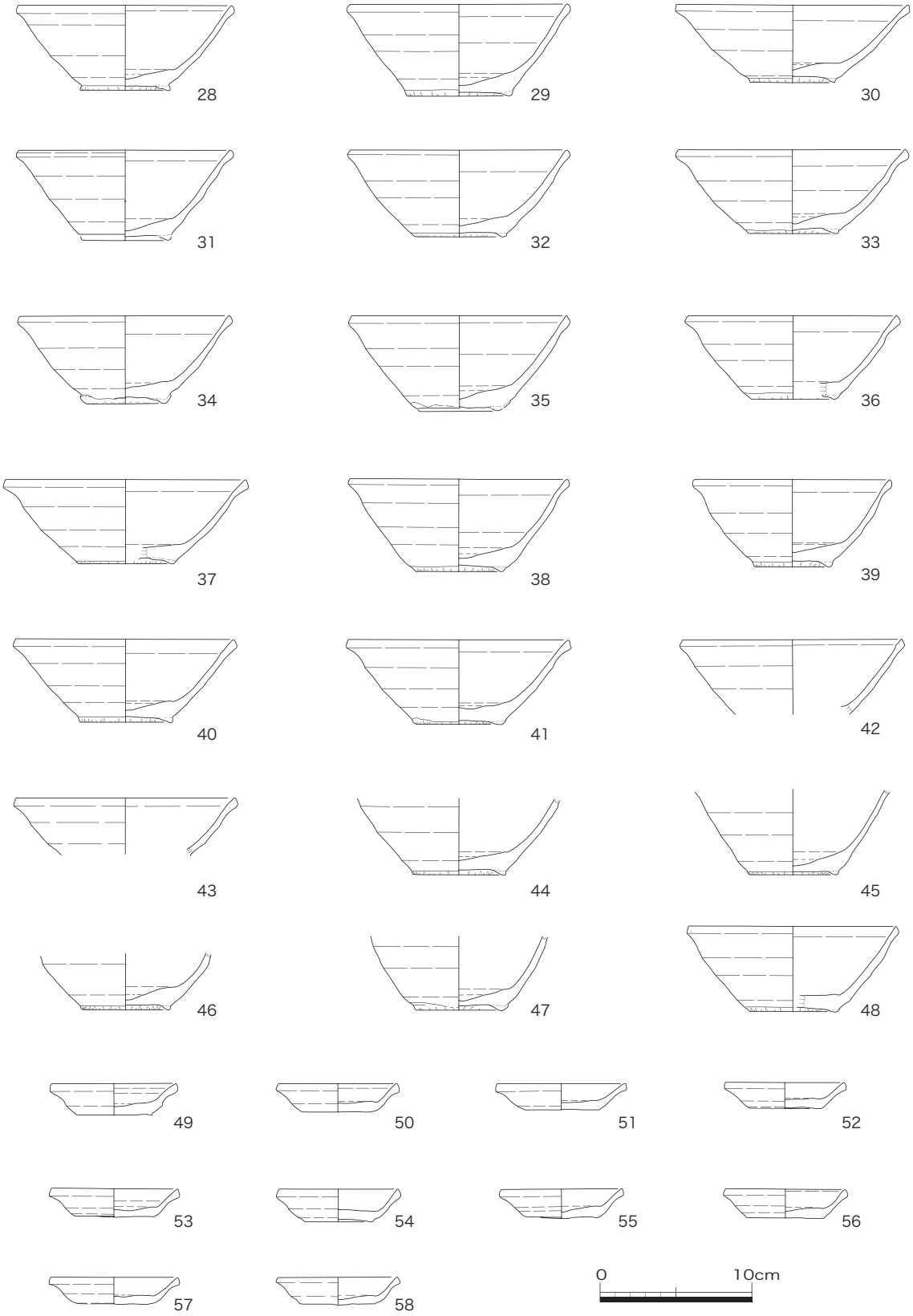
溝（SD）

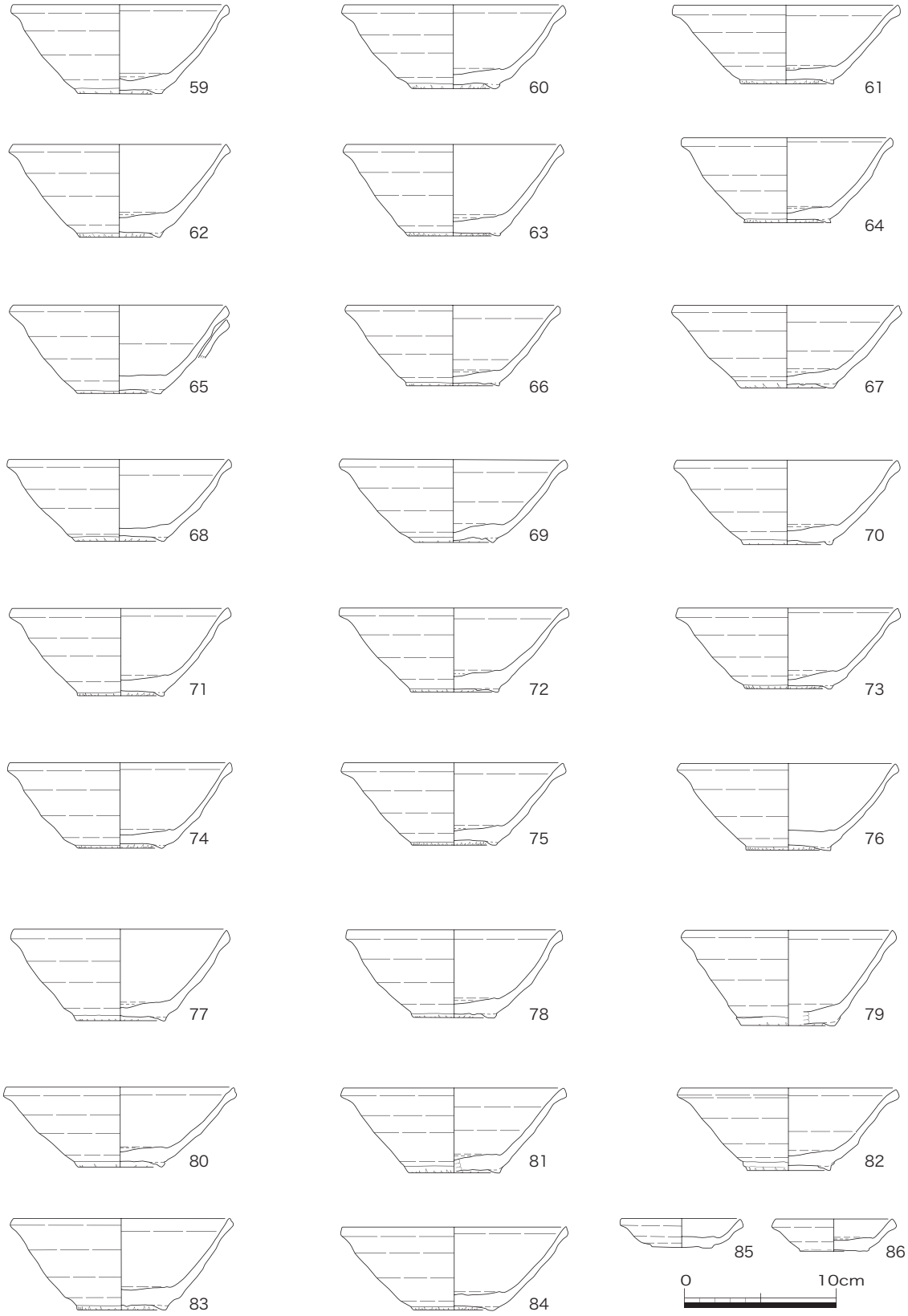
遺構番号	長（m）	最大幅（m）
SD01	2.60	0.18

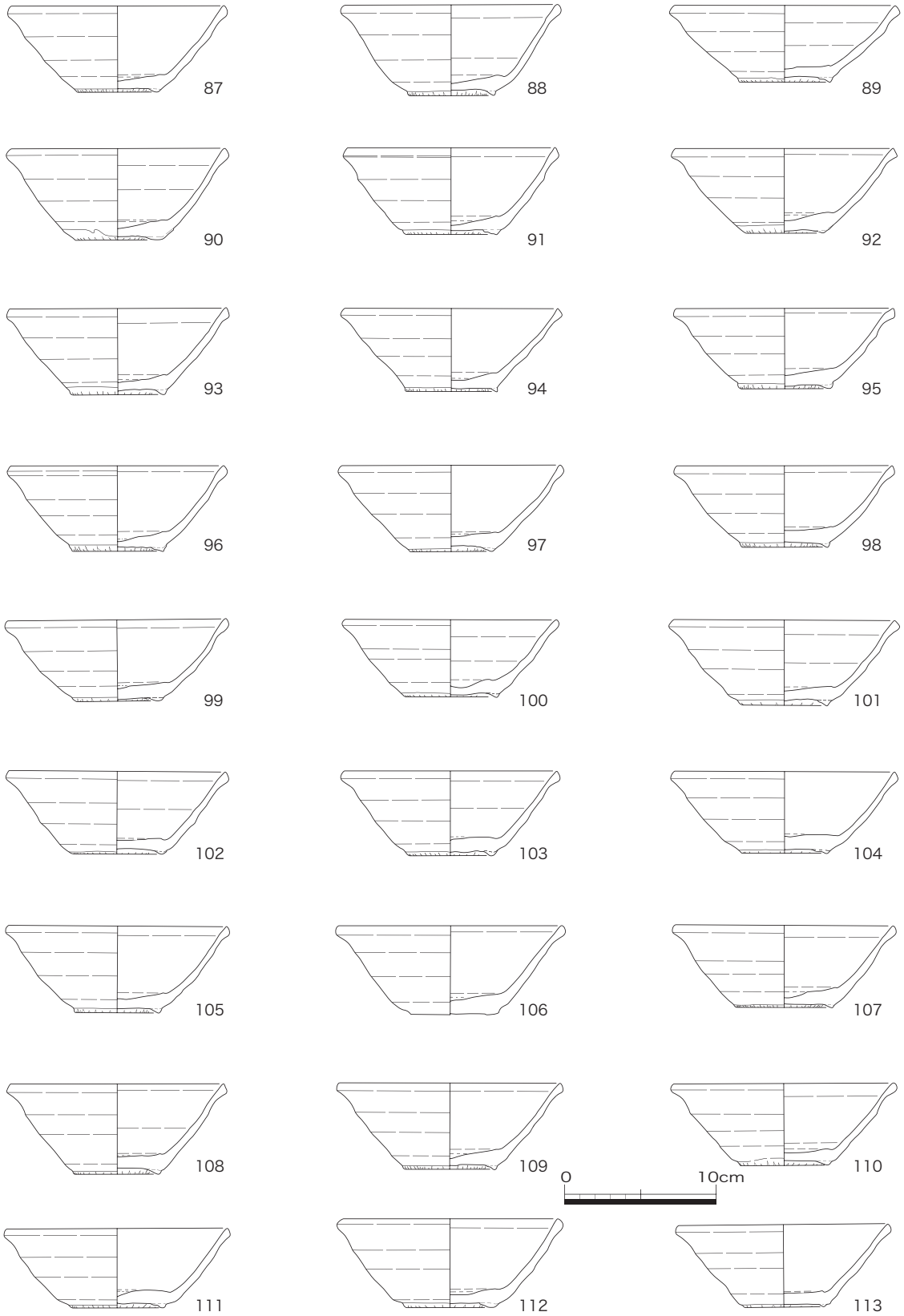
土坑（SK）

遺構番号	直径（m）	深さ（m）
SK01	2.21	0.2

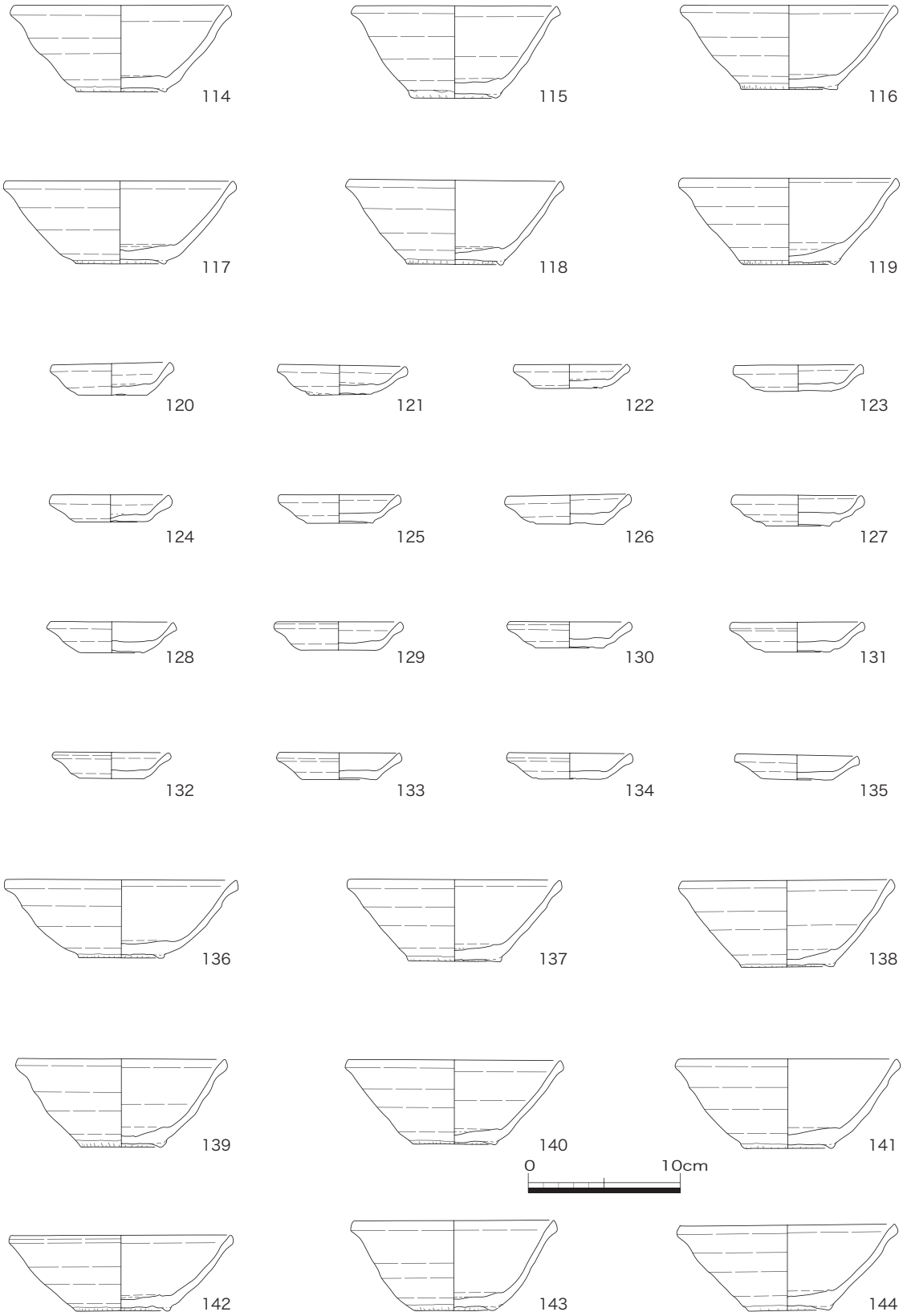

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
0
10cm
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

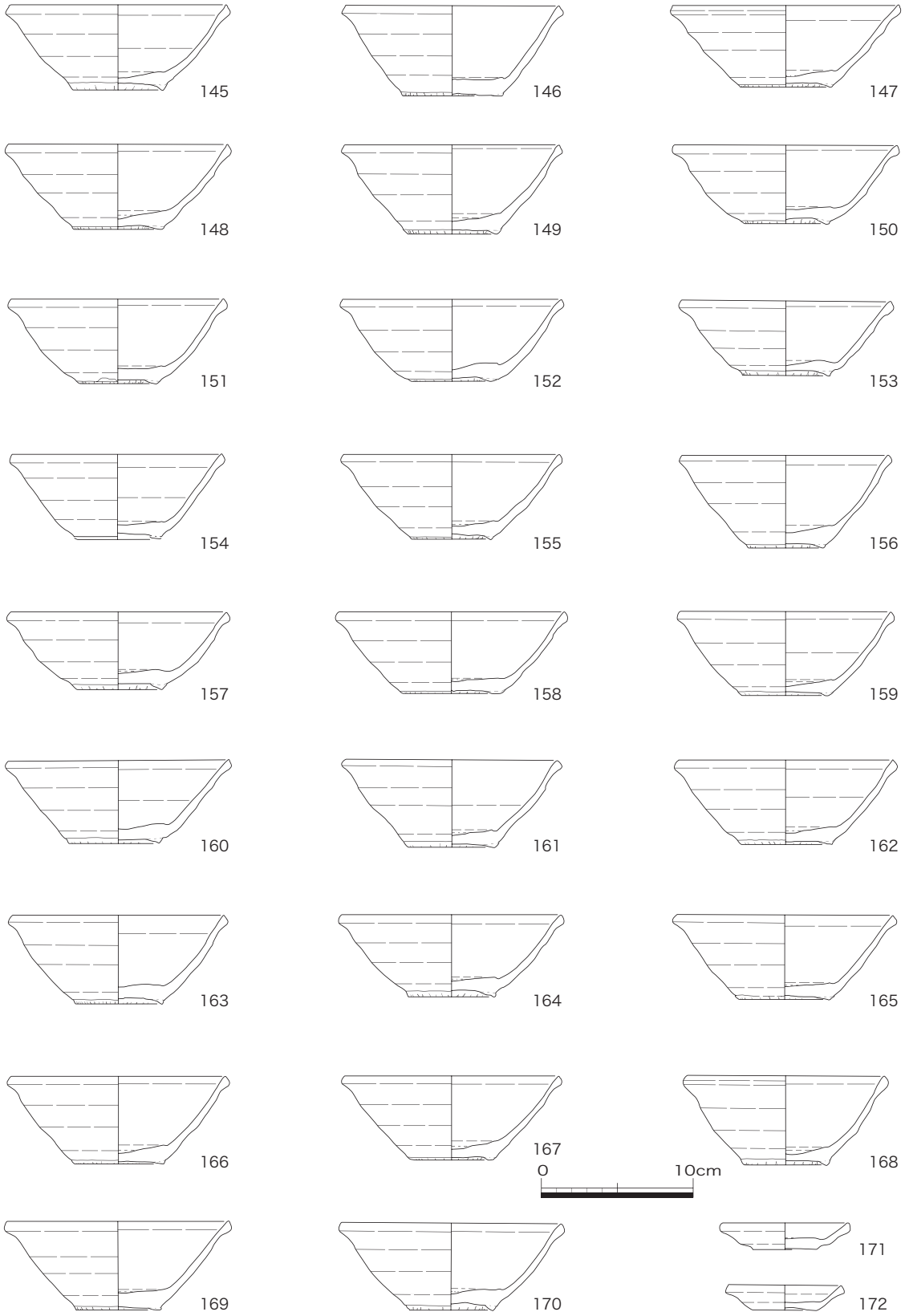

28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
0
10cm

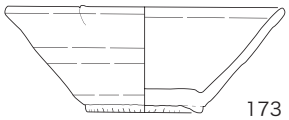

59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
0
10cm

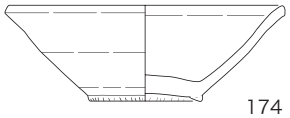

87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
0
10cm
111
112
113

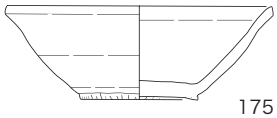
SY02

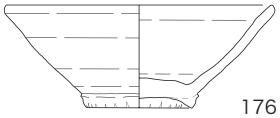

114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
0
10cm
142
143
144

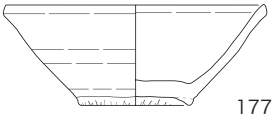

145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
0
10cm
169
170
171
172

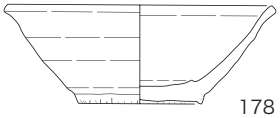

173

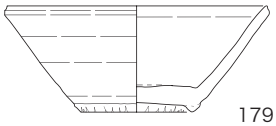

174


175

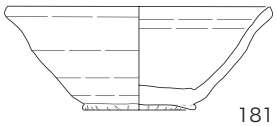

176

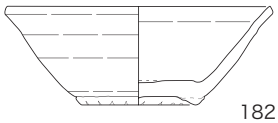

177

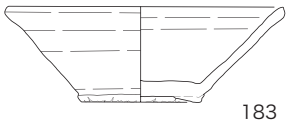

178

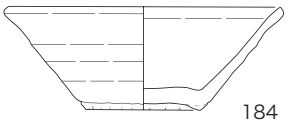

179

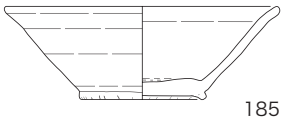

180

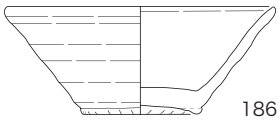

181

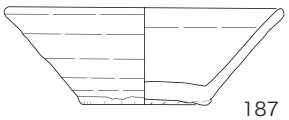

182

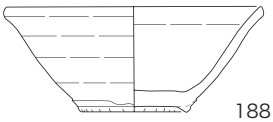

183

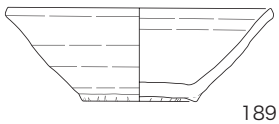

184

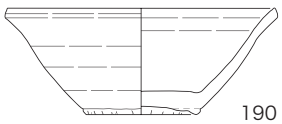

185

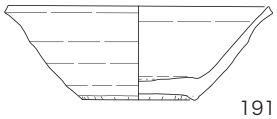

186

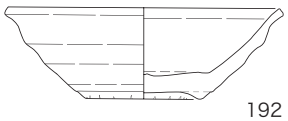

187

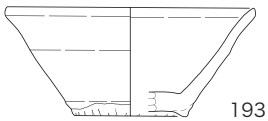

188

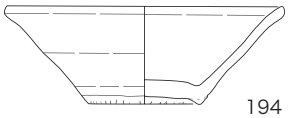

189

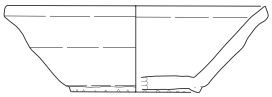

190

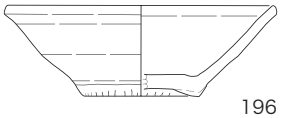

191

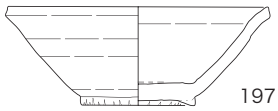

192

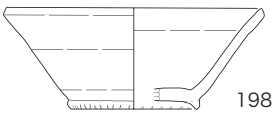

193

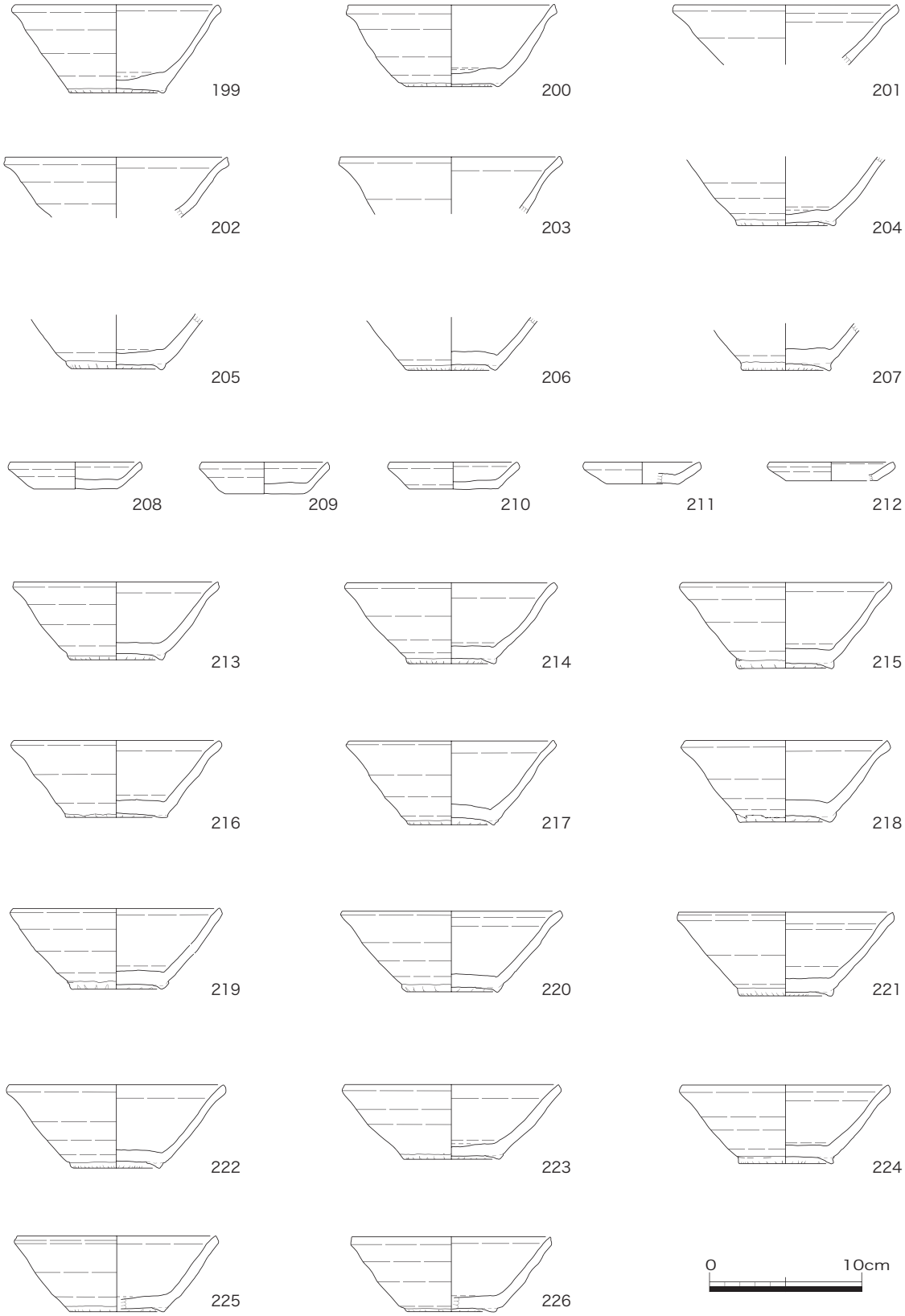

194


195


196


197


198

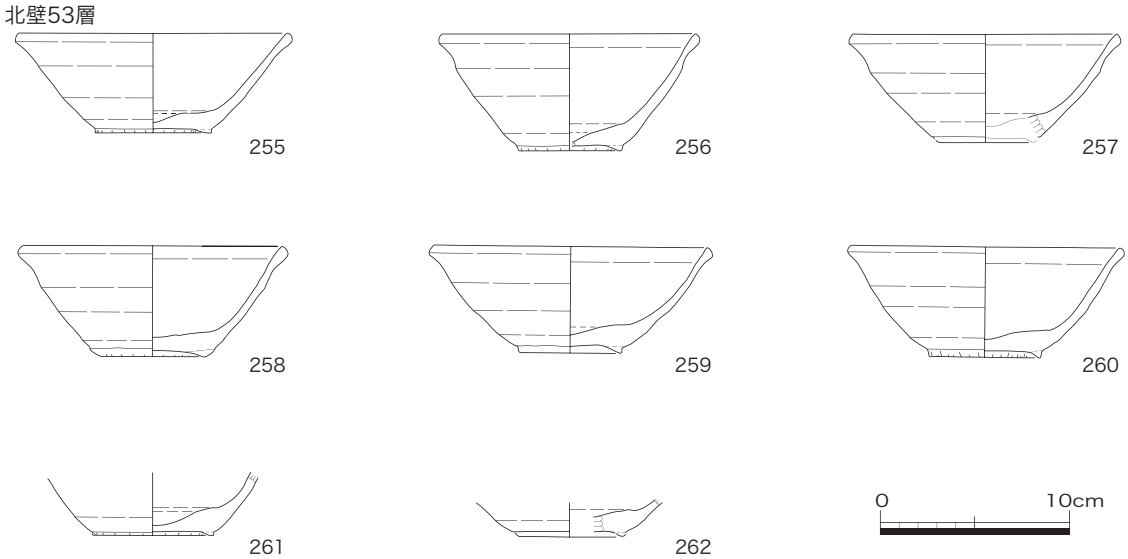

199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
0
10cm

SK01

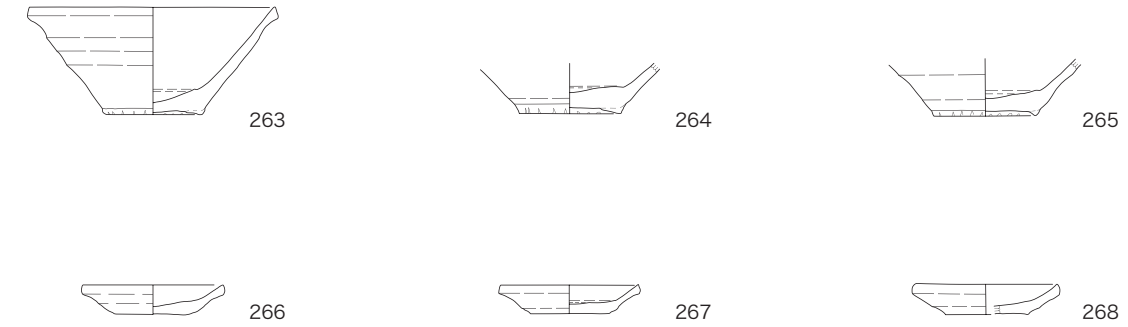

227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
0
10cm

北壁・東壁採集遺物 1

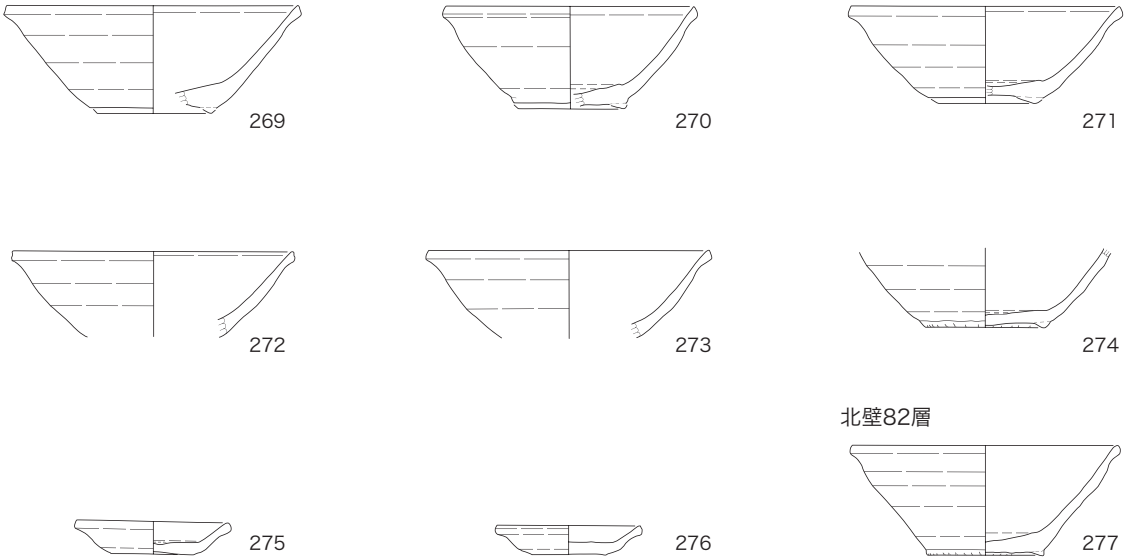
北壁53層



北壁64層



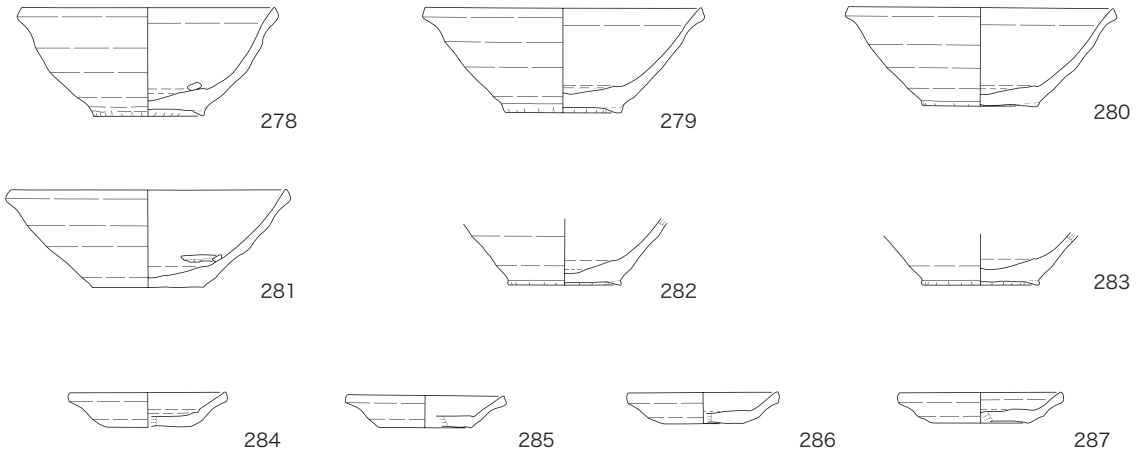
北壁67層



北壁82層

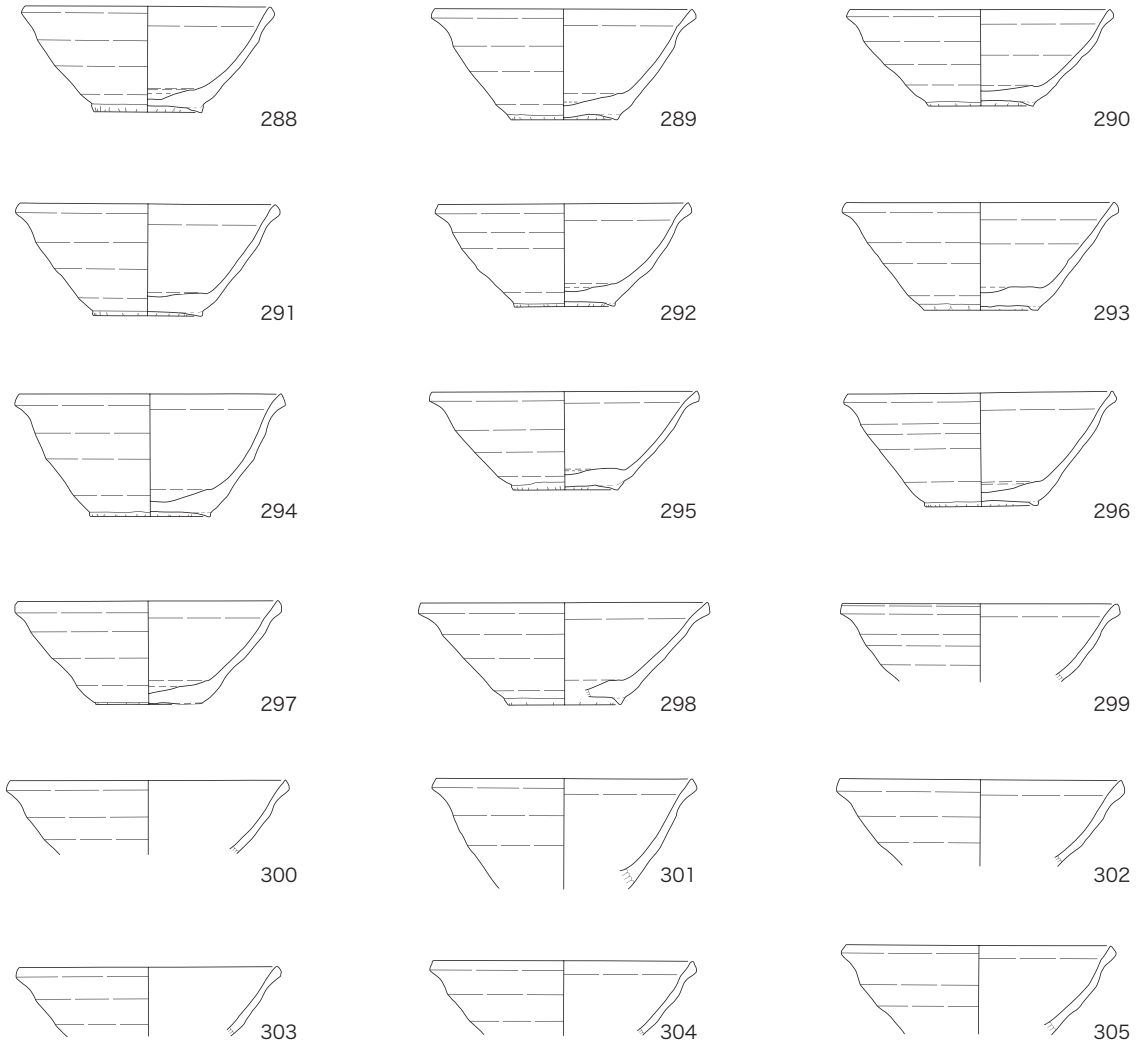
北壁・東壁採集遺物 2

北壁45層

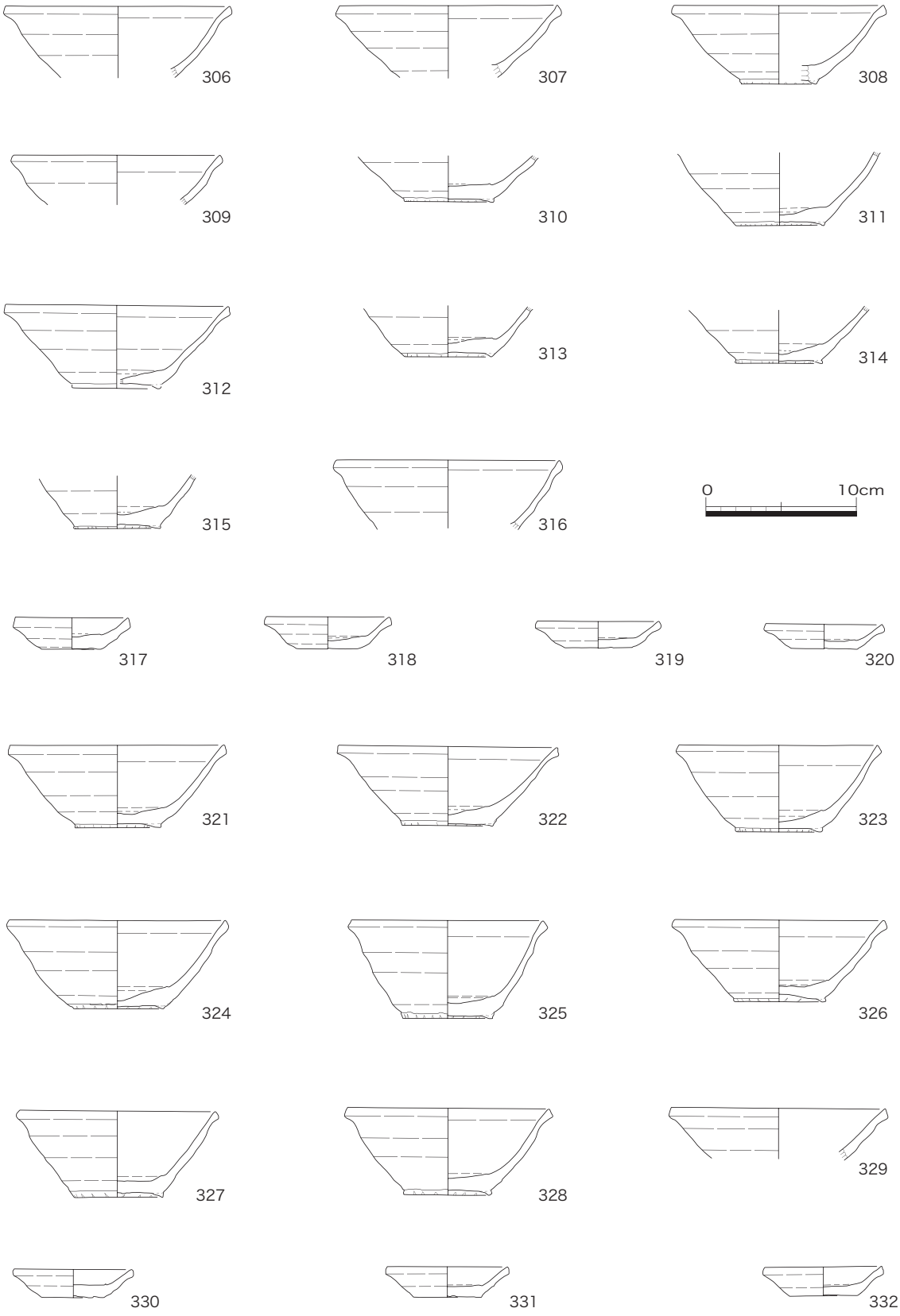


0 10cm

北壁46層

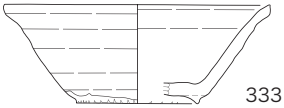


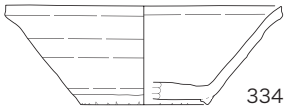
北壁・東壁採集遺物３

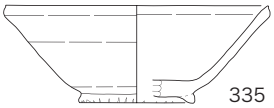

306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
0
10cm
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332

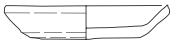
北壁・東壁採集遺物４

北壁8層

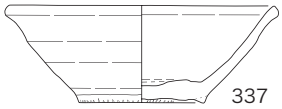

333

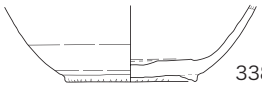

334

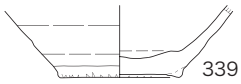

335

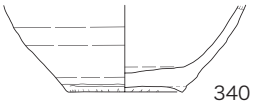

336

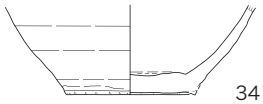
東壁12層

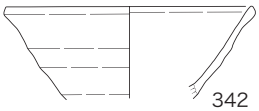

337


338

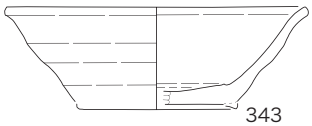

339

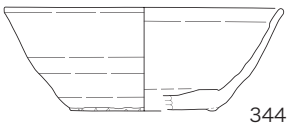

340

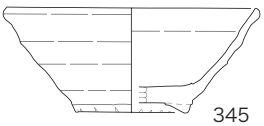

341

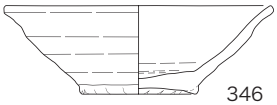

342

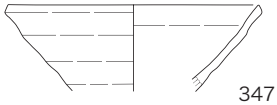
北壁14層


343

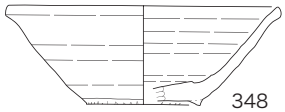

344

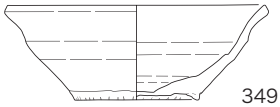

345

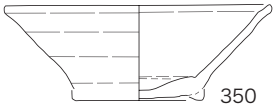

346

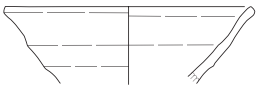

347

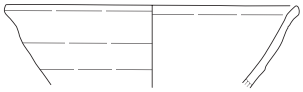
北壁18層

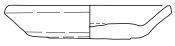

348

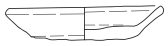

349


350

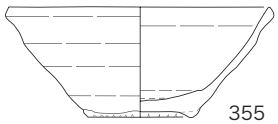

351

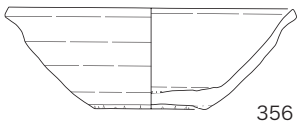

352


353

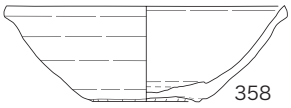

354

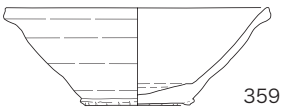
北壁29層

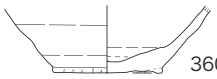

355

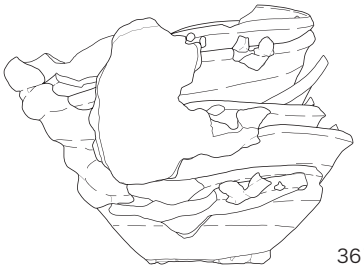

356

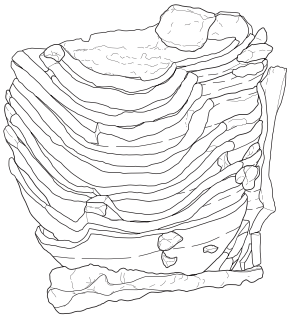

357

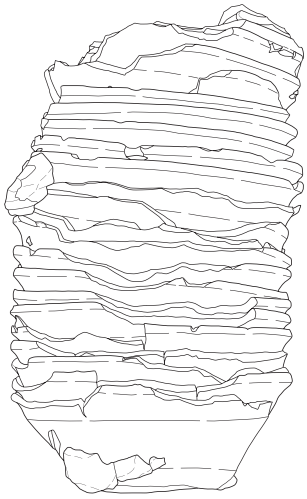

358


359

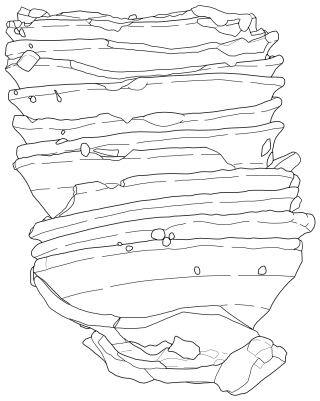

360


361


362

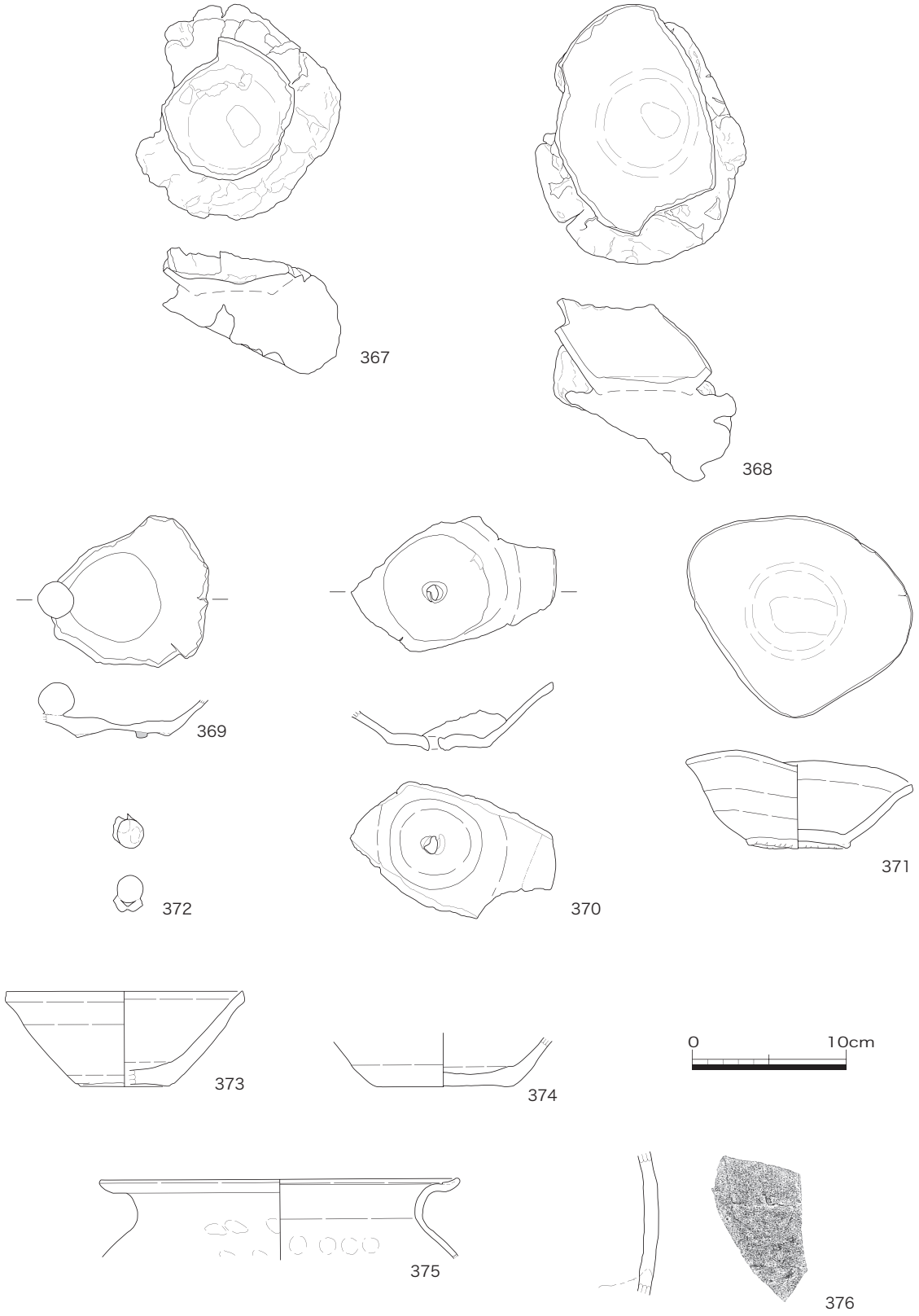

363


364


365


366

窯道具・その他



SY01 完掘状況（北東から）

左　：分焔柱検出状況
左下：分焔柱断ち割り状況
下　：窯体内埋土堆積状況

SY02 断ち割り状況（北から）

左　：焼台出土状況

左下：分焔柱断ち割り状況

下　：分焔柱粘土貼り付け状況

SY03 完掘状況（北から）

左　：窯体補修状況
左下：床面補修状況
下　：分焔柱補修状況

遺物（SY01）


1


1


1


3


4


5


9


10


29


32


34


39


278


288


327


17


17


17


16


18


21


23


51


54


56


319


330


101
101
101
59
60
67
71
88
90
140
155
161
255
259
260
120
120
120
85
86
122
126
129
135
171
275
267

遺物（SY03・SK01）


221


221


221


173


174


188


214


216


220


229


230


235


238


241


244


208


208


208


339


209


210


354


363


364


367


367


369


370


371


369


370


371


372


372


374


374


375


376


375


376

報告書抄録

ふりがな	あいじー２ごうかまあと
書名	I-G-2 号窯跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 129 集
編集者名	鵜飼雅弘
編集機関	愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒 498-0017　愛知県海部郡弥富町前ケ須新田野方 802-24
発行年月日	西暦 2005 年 3 月 31 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
I-G-2 号窯跡（ごうかまあと）	愛知県愛知郡（あいちけんあいちぐん） 長久手町大字岩作（ながくてちょうおおあざやざこ） 字三ヶ峯（あざさがみね）	23304	15033	35 度 10 分 6 秒	137 度 5 分 27 秒	2003.4.7 ～ 2004.7.7	350 ㎡	青少年公園再整備に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
I-G-2 号窯跡	古窯跡	鎌倉時代	窯体 3 基	灰釉系陶器	山茶椀・小皿・陶丸を焼成

文書番号	発掘届出（14 埋セ第 156 号・2003.2.28）通知（14 教生第 72 - 14 号・2003.3.7） 終了届・保管証・発見届（15 埋セ第 24 号・2003.6.20） 鑑査結果通知（14 教生第 72 - 14 号・2003.8.15）

要約	本窯は山茶椀・小皿・陶丸を焼成した、いわゆる山茶椀専焼窯である。中世東海地方に通有の分焔柱を有する窖窯であり、窯体を３基確認したが、いずれも上半は滅失した状態であり、燃焼室及び焼成室の一部を確認するに留まった。遺物の年代観から、１３世紀前葉から中葉にかけての操業が考えられる。本窯は猿投窯岩崎支群の一群に含まれており、周辺の丘陵を含めた窯業生産の実態を示す一資料として位置づけることができる。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第129集

I－G－2 号 窯 跡

2005年３月31日

編集発行　財団法人　愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印　刷　株式会社クイックス